
ディスティニー～運命～第1部

Misty

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

デイスティーニ運命 第一部

【Nコード】

N5720B

【作者名】

M i s s t y

【あらすじ】

異世界へと飛ばされ、ほぼ永住するはめに・・・しかも、呼ばれてない招かれざる者どうなるの？私！！（注意：破天荒な、普通ならしないだろう行動が多い小説です。そのような小説を好まない方は見ないことをお勧めします）2部は、私のホームページにて公開中です

登場人物

登場人物

秋田^{あきた} 香苗^{かなえ} 19歳（実際はあと2日のこつてる）

目：黒（金） 髪：黒（七色） （ ）内は封印解除時

別名【セレネ・アキータ】

航空自衛隊第1空団整備隊の整備員

元々、射撃選手で全国大会2位の成績を持つ異例の女性
気づいたら、異世界に迷い込んで・・・

属性：光

魔道士検定：S+ （測定不能）

シエラ・エルフィード ？？歳

目：金 髪：七色

女神シエラの思念

聖剣シフフィードに憑依している

たまに、香苗を乗取る事がある

シリアスな分も在り、ノーテンキな部分も在る

属性：不明

魔道士検定：不明

メリア・アキータ 16歳（推定）

目：緑（赤） 髪：金（赤） （ ）内は封印解除時

体の弱かった彼女は、炎の精霊の器を受け

体力を回復するが、その後事件が在り

今、シエラの養子として暮らしている

実は、メリアが持っている剣には・・・

属性：火 土

魔道士検定：B - (S+)

フェンリル ??歳(2000歳以上?)

目：黄色 髪：黒色

黒豹である、聖幻獣

人間に化けられる能力の持ち主

香苗を主としての主従関係に在る

属性：闇・水・風

魔道士検定：不明

セリス・フローティア 12歳

瞳：銀 髪：銀

聖精霊術士の権威であるフローティア一家の末柄
運悪く、盗賊に親を殺され・・・

属性：聖

魔道士検定：不明(神官見習い)

ティニア・デイスティーニ 18歳

目：緑 髪：青色

香苗を異世界に連れてきてしまった張本人
責任をとって、香苗の付き人として旅をしている
魔術師でもあり、剣術の使い手でもある

一応、香苗の師でもあるが・・・

デイスニー王国第2王位継承者

現在、王が退位し王になる

属性：火・風・光

魔道士検定：B + 時間が経ち今現在 A -

マレリア ？？歳

目：緑 髪：緑

マレリアの店という服屋店長

チャイナドレスの様な服がお好き

ミリア 200歳ぐらい

目：青 髪：緑

ラアスという、元傭兵の飲食店店員兼ラアスの娘

人間とエルフとの間で生まれた

母親は、産んだ後死亡

父親一筋で育った1人娘

香苗が着てから数十年後、ティニアと結婚することになる
<王妃様>

属性：森・風・光

魔道士検定：A -

序章 てか、ここどこよ！（前書き）

今まで、デンパンBOOKSに居たのですが、
管理者が不在？というか、倒産？したっぽいので
移動してきました
どうぞよろしくっ！

序章 てか、ここどこよ！

「で？・・・ここは、どこよ！」

何故か、森の中で立っていた

【静岡県浜松 航空自衛隊浜松基地内射撃場】

「これより、航空自衛隊射撃大会を行う！」

2人1組の隊員が横1列に並んでいる

「目標！正面の的！脚なし！寝撃ち！！」

鉄のすれ違う音

「弾を込め！青の弾倉！5発！」

弾薬が、弾室に入る

「右・左方よーい！」

全員のコーチが手を上げる

「射撃よーい！」

凜とした空気が漂う

「つてえ！」

号砲が鳴り響いた

今日は、金曜日

自衛隊じゃ、花金と言われ

17時になるとすぐに外出する

それを5時ダッシュといわれ、それに基づいて出来る、渋滞を5時ラッシュとも言われる

「すごいじゃない！香苗！50点だって？！」

的の紙に指を出し入れしながら言う友人1

自衛隊隊舎内で、作業服から外用の服に着替える途中
隣の由紀が話し掛けてきた

私の名前は、秋田香苗（19）独身

父母が嫌いで、家を出た私は
働いて、なおかつ部屋・光熱費付の働き手があるといわれ
入った自衛隊。

父母が嫌いだったわけは・・・今は言わないでおこう
きつと、いう必要ないから・・・

この子は、自衛隊に入ったときからの付き合いで
いわゆる、腐れ縁だ

「まぐれだつて」

先ほどまで、行われていた射撃大会で
50点満点を取ってしまった

おかげで、祝勝会とか言うのを行うから来いといわれた・・・

行きたくないんだよね・・・自衛隊つて何かしら飲みたがるから
しかも、まだ未成年なのに・・・
はあ

「でも大変よね、あの幹部とでしょ」

劳いの言葉をもらい、苦笑する私

「嫌だといつても、初動対処要員でも、きつと無理やりでも連れて
行かれるわ」

はあ、と肩を落とす

「おつかれさん」

ポンポンと、肩をたたかれた私はもつと片を落とす
いやだ・・・いきたくない

【浜松駅周辺】

「そのの、貴女」

黒ずくめの女性が私に声をかけてきた

「え？私？」

「そう、そのの君。ただで占ってあげよう」
え？なに・・・この人

「い・・・いえ、結構です」

「そう言わずに、ささ」

で・・・気づいたら・・・

第1章01 あんた誰？

「で・・・ここ、どこよ？」

森林と言える場所にぽつんと、座っていた

つい、今さっきまで女占い師に占ってもらい

変な言葉を聞いていたら？・・・

その後の記憶がない・・・???

そして、気づいたら此処に居ると・・・

混乱しつつも、自衛官であるためなのかすぐに状況を把握するため

行動を起こした

身体異状なし！

持ち物！ハンカチ、チリ紙、携帯電話、鍵、アーミーナイフ・・・

「あ！カバン！！！」

自衛官になってから、1日は何とか生きて行くためにカバンの中に色々と詰め込んでいたのだ

でも、まわり見渡してもそのカバンは無かった

身の回りを確認し終わり、周りを見渡した

「森・・・よね・・・」

木や草などいろいろあるが、有ってもいいはずのものが無かった

それは・・・

「ゴミが無いわね・・・」

日本の土地には、100メートル歩くと必ず有るといわれるゴミ

プラスチック・紙・木の加工材など・・・必ず有ってもいいはず

のものが無かった

そして、地面を触った

湿っている・・・2日以内に雨が降った証拠だ

今夏は、温暖化の所為で雨が降らなかつたはず

それを知った私は、ある結果にたどり着いた

「ここは・・・日本じゃない・・・」

下手をすると、地球でもない・・・ファンタジーだけ
その時

草の葉が擦れあう音がした
だ・・・誰かが居る！！

すぐに、身を隠し気配を消した

「あたたた・・・着地失敗しちゃったよ・・・確か、この辺で気配
があつたんだけどな」

ん？この声は??

間違いない、あの女占い師！

確か、『ティニア』とか言ってたっけ・・・

あのやるゝ

「おっと・・・いけねえ、声そのままだ」

え？

そういうと、女性は喉元に手をかざしたとき

淡い光が喉を照らした

「うん、これでよし」

ビックリしてしまった・・・先ほどまで凜とした女性の声だったのに
今じゃ、男の声だった

ついでにフードを取った男？の姿を見たときに確信した

青髪に、緑の瞳・・・最初は、染めたのかなと思っただ

光が髪を通したとき、それは否定された

結論、此処は地球じゃない・・・異世界だ・・・

一番早いのはこいつに事情徴収するしかないな

ポケットに有ったアーミーナイフを取り出し、刃のついてない
鑢ちゆうりのほうを出した

誤っても、切ることは無い

そして、暗殺者のように背後に回り

「ぐっふっ！」

一気に無力化した

殺気を漂わせた低い声で

「動かないで、動いたら動脈が切れるわ」

「わ・・・わかった。落ち着け、話し合おう」

落ち着いているけど、とりあえず言葉に乗ってみるか

「落ち着いていられると思う？あなた、私に何をしたの？」

「言いなさい！言わないと！」

冷たいだろう、ナイフの腹側を首に押し付ける

人間、首の感覚は鈍感に出来ている

5〜7本程度の鉛筆を首に当てても

1本程度だと思ってしまうほど鈍感なのだ

「わーわーわかった！早まるな！言う！言うから！！」

「早くしなさい！」

「『ホールディング』」

なっ・・・体に何か冷たいものが走った

「まったく危ないじゃないか」

私はあせった、体が動かないのだ

そして、唯一の武器が奪い取られてしまった

「あれ？刃が無いのね？」

「わざとよ！無抵抗の人間に傷をつけるほどバカじゃないわ！」

バシッと、彼から奪い取る

「そうですか・・・ってなんで動けるんだ！」

ふと、気づくと体の自由が利くようになっていた

「ほんとだ・・・なんだったの・・・さっきの」

にらみつける私

「えっと、貴女の世界で言う魔術っていうのかな」

愕然とした・・・やっぱり・・・

「こっ、異世界なのね・・・」

第1章02 やっぱfantasyだ！・・・しかも・・・私も

男は突然、アホな事をほざいた

「で・・・貴女はどなた？」

はあ？おまえがここに連れてきたんじゃないか！

ポカーと口を開けて呆れてしまった

なにを考えているんだ・・・

頭を抱えつつ

「あんたがここに連れてきたんでしょ！違つもの？」

「なにをまたあゝここにつれてきたのは、黒髪に黒瞳の若い女性ですよ？」

貴女のような、神々した姿の方なんて喚んでませんよ？」

「はあ？私は、黒髪で黒瞳よ！なにアホな・・・」

今気づいた・・・確か、私ショートカットのはず・・・

なんでー？髪が長いの？

しかも、光に当てると7色に輝く髪・・・ふあ・・・

「ファンタジーだ・・・ありえな・・・い。ねえ！あなた！！

私の髪何色！それと！瞳も！！皮膚も！全て言いなさい！」

男の襟首をつかみ上げる私！

れ・・・冷静になるのよ！わたし！！マ・・・

マジですか・・・やっぱりfantasyだよね・・・

私どうなっちゃうんだろ・・・

「なーに言ってるんですか！髪は、不思議の七色で、瞳なんて

女神シエラ様と同じ金色じゃないですか！皮膚は、神々しい傷も何

もない肌色ですよ」

・・・

完全なる・・・fantasyだ・・・

立ち直れない・・・

完璧とっていいほどのショック

O T L 状態

「?どうしたんですか?」

状況がまったく把握できないであろう男が心配してくれるのはありがたいが

この状況を打破したい・・・

しなきゃだめだ!!

「あなた・・・名前は? ティニアしか聞いてないわ、フルネームは?」

「あはは・・・人の名前を聞くときは、まず自分からでしょ」
頭をうなだれる私はつぶやいた

「・・・香苗・・・」

「え?」

ムクリと立ち上がりその男を見下ろした

「香苗! 秋田香苗! 19歳!」

・・・あと、2日で・・・誕生日だったのに・・・どうして・・・

「は?何を言ってるんですか? 香苗様は、黒髪で・・・」

「だぁーーーーー、だから私が香苗だってば!!!!!!!!!!」

と、怒りと爆発のイメージを出すと

轟音とともに、その男も吹っ飛んだ

え?

わけのわからない私は、どうしたらいいかわからなかった

なに?これ・・・やっぱfantasyだ!・・・しかも・・・私も

第1章03 さあどうしてくれよう

何かの爆発で吹っ飛んだティニアは

近くにあった大木に当たり腰をさすっていた

「いったあゝ・・・」

「だ・・・大丈夫?!」

爆風で自分が飛ばなかったことを気づかずに

人のことを心配するのはやっぱりお人好しなのだろう

「なにするんですか!・・・って?あら?」

「え?」

なに?

首を傾げる彼女をみつっ

男が言った言葉は

「香苗様じゃないですか!僕ですよ、ティニアです
はい?」

「だから!私が香苗だってい・・・てる・・・??」

あれれ?確か、さっきまで不思議な色の髪だったよね?

よく見ると、長さは変わっていないかったが黒髪に戻っていた

前までとはちよつと違うサラサラの髪質をちよつと堪能しつつ

「はぁ・・・よかつた・・・で!」

ティニアの方に振り向いた

獲物を見る獣のように殺気だった瞳だった

香苗がそれを殺気を放つという意味を知ったのは

まだ先の話だったが

それを浴びたティニアは何かの金縛りにあつたように凍る
「・・・ッ」

背中に冷たい汗が滴り落ちていた

ライオンと猫の睨み合いのように、

驚愕の顔をしているティニアを見つめる

形勢逆転の状態を維持するため、香苗は行動に移る

ゆっくりと、足を踏みしめるように

そして、彼との距離は30cmほどになり

私の手がすうっとティニアの顎をつかんだ、掴み取るように

完全に私は、ぶち切れ状態・・・もう、誰にも止められない・・・

いや、きつと止められるのは『会社の上司』ぐらい

に、完全に切れた

冷たい笑みと、彼女の声がティニアを完全に思考停止する

「説明・・・してくださるわよね？」

「はい・・・」

彼の声は裏返っていた

第1章04 え？私が伝説の女神？

彼の説明はこうだ

魔術を習っていた彼が見つけた古い魔術書を見つけ
魔術を放ったとき、私の世界に迷い込んだらしい
物珍しいということ、近くを通った私を連れ込み
占いをしたら・・・ここにとばされたいらしい

「で、私は帰れるの？」

大事なのはそこなのだ、私は元の世界に帰れるのか
帰れないなら帰れないなりの行動はとらないと

「わ・・・わかりません・・・」

「わからないなあ？！」

叫んだ私は、ティニアの襟首をつかんだ

「お・・・おちついて！」

首を絞める手をふりほどこうとしているが

そんなよわつちい、腕で私の拘束から逃れられるとでも？！

「こんな状況で！冷静でいられるか！」

「ぐう・・・ちぬ」

パツと放ち

「でも・・・」

肩で息をしているティニアをみつっ

「これを、楽しまない手はないよね。で、その文献ってどれ？」

「え？それはですね・・・」

頭をぼりぼりと掻くティニア

「まさか・・・」

私は、ありえない想像をしてしまった

「あははは・・・あの世界においてきちゃいました」

・・・

「クロス」

本気で殺しそうな雰囲気を漂わせた瞬間

なぜか、香苗の黒いきれいな髪が宙に浮き

まさしく、魔女といわんばかりの姿に変わった

「あわわ・・・あなた、香苗様じゃありませんね!!

魔術師ですね! 香苗様の替え玉ですね!! 間違いない!」

ビシツと私に指さす

きつと、勝手に漏れだした魔力がそのような姿にしたのだろう

「ふっ、愚問ね。私は香苗よ! じゃー、言ってあげましょうか

貴方は、あるとき私に声をかけてなおかつ、断ったのに

連れ込んで、あんなことこんなことを・・・」

「やってませええん!」

やけに高い声で尚かつ叫び声を出した

だって、そのぐらい言わないと勘違いなおしてくれないし

しかも、絶対にかんちがいしてるからねえ

「じゃー責任とってね」

カポーンと口が開いたままだったティニア

「わ・・・かりました・・・」

「うんうん、でね、一つ聞きたいんだ」

これだけは聞いておきたい、この髪のことである

瞳だけど、先ほどの話（前話）で伝説の魔女とかウンタラカントラ

「ああ、そのことですか。私の世界での伝説なんです。

七色の髪で、輝く金の瞳は『女神シエラ』様であると

言われていて、金の瞳の人たちはたくさんいるのですが

七色となるとどこにもいないんです」

ふうん、そりゃ七色へアーなんている分けないもんね。

でも・・・なんで、黒に戻ったんだろう

もしかすると、『元に戻れ!』って思ったら

戻ったりして

と、その時

香苗を中心に渦を巻いた風が立ちこめた

「な・・・なに?!?!」

訳の分からない私は、なにもできずその場で立ちすくんだ
でも、なぜかその風は優しく穏やかで
なぜか気持ちよかった。

何かが聞こえるよう、なんだろう。風が踊ってる

「あ・・・ああ・・・」

ティニアがなぜか開いた口がふさがっていなかった
まったく、そんなにあいていたなら塞がらなくなっちゃうよ
「どうしたの?」

疑問を問いただしたとき、ティニアからでた言葉

「シエラ様・・・ま・・・でも、え?」

また、シエラシエラシエラうざいよ!

でも、髪をみてガツクシ

元に戻ってる・・・

ん? ってことは・・・私が女神?

まさかあゝ・・・でも・・・

「ティニア」

「はい!」

「これってさ、やっぱり私って女神なの?それとも、その娘とか?」

「・・・可能性はありますね・・・その魔力が、物語っています」

はあ・・・ふぁんたじいだ・・・

第1章05 え？試験？

「え？試験??」

「そうです、魔術検定試験です！」

ティニアが力説しているのは、魔術検定試験というもの

これは、E（-）からS（+）までの検定試験があるらしい

「それを私が受けるの??」

「はい！是非受けて下さい！じゃないと、ギルドや

ワークショップなどに行けないんです！

というか、仕事さえ受けさせてもらえません！」

別に、仕事しなくてもこの世界なら物資も豊富だし

のたれじめことも無いしなあ・・・

はつきり言って面倒なのはごめんだし

「やだ」

そっけなく言う

「そんなあ」

私は、試験と言われるものが嫌いなのだ

好きなものを学び、好きなものを知る

そういう生き方をしていた

「もしかしたら、魔術を知るにはいい機会かもしれないよ」

「え!？」

魔術といわれたとき、期待と好奇心には勝てなかった

「しょうがないなあ・・・」

でも、私は全く魔術を知らない

そんな無知な私でも受けられるのだろうか

「その前にさあ・・・私、魔術全く知らないんだけど」

「大丈夫です！試験と言っても簡単な魔術を出していった

段階を付けるだけです。まあ、BとかAはかなり難しいといわれています

Sなんて、死者が出たと言われているほどです」
だめだ・・・絶対に受からない
というか

「無理！絶対無理、だって私魔力なんてないもん」

「いえ、あります。というかかなりありすぎて
今でも漏れてるんですよ。もったいないほど」

「そ・・・そうなの??」

自分の体を見渡しても何も異常と言うものは無い
外見は普通だ

「ええ、今だって私が結界を張っていなければ
魔物が襲ってきたに違いありません」

「はあ？魔物??？」

「はい、魔物は魔力に誘われるんです。魔力を餌にしていますから
たまに、人間も食べられてしまうんです」

シヨックが大きかった

正直、ティニアに拒絶されてなくてよかったと思う

「ど・・・どうすればいいの?」

「修行しましょう。そうすれば、試験に間に合います」
いけるのかな??

正直言つて自信がなかった

ここ世界にきて、まだ3時間ほどしかたっていない

「ねえ・・・その試験っていつなの?」

「1ヶ月後です」

神様・・・貴方は鬼ですか？

第2章01 へえ・・・魔術ってこんなもんなんだ

その後、探査魔術を使ってティニアの家を見つけた

GPS、軍事衛星・偵察衛星顔負けの魔術だ

え？なんで、ファンタジーに現代用語があるかって？

それは、航空自衛隊でT-4ジェット練習機整備してたから

そのぐらいの知識はあるけど、あっても無くてもいいような知識ね
ここじゃ

この知識が、世界に影響をもたらすなぞ、知る事さえ無かった

その後も

いろいろなことを聞いた

戦争も争いもここ100年ほどない

でも、なにか不穏な空気が流れているという噂を聞いているらしい
歩いて4時間で着いたティニアの家は本当に美しかった

パリにある豪邸のような雰囲気であり口はバラのツタでアーチが作
られていた

「まあ、とりあえずですね。部屋はたくさんあるので
好きなところ使ってください」

家にはいると、フロアーが広くあり天井にはシャンデリア

これって・・・ブルジョワ・・・

開いた口が塞がらないと言つことわざはこういうときに使うのだろう
綺麗なシャンデリアに見とれていた香苗

「香苗様このシャンデリアは、約400年前に当時のガラス職人が
作った

品です。できあがった後、風の魔術を使って埃がつかないように
加工してありますので、今になっても美しい輝きを保ったまま
なのです」

学者のように淡々と香苗と一緒に見上げて見るシャンデリア女性とは綺麗なものや、かわいいものには目がないと言うが全くその通り、本当に綺麗

「さ、貴女様に見ていただきたいものがあるのです」

「え？なに？」

と、テイニアと一緒に入った部屋は暗くそして埃ばかり

「『輝ける光の精霊よ汝の呼びかけに答え、闇を消したまえ』」

それは、言葉に表現できない声だった

なぜだろう、言葉がわかる

その時、天井が光に包まれると輝いた雪のような物が

降って部屋を明るくした

「うあ・・・」

そこは、元の世界の市営図書館より大きいのではないだろうか

本がギッシリと詰め込まれていて本棚が縦に

1・2・3・4・5・・・17も並んでいた

しかも、入りきらない本がそのまま積み重なっていた

「これは、すべて魔術書なんです。魔術とは人それぞれにあった

言霊といわれるものがあり、それを書にする

それが、魔術書といわれるものなんです。

ですから、実際に魔術と言われる物は唱えればいいわけではないん

です

ヒストリア語と言われる魔術語があります

今使われている魔術語は現代ヒストリア語といわれ

古代から使われているのを、古代ヒストリア語と言われています

それが、魔術といわれるもので、そのほかにも、魔道士・魔女

と言われる分類もあるのですが、ここ最近見ませんね・・・」

淡々と、話をしているテイニア

それを聞いていた香苗は、飽きてしまった

近くにあった、一冊の本を手を取った

表紙を見ると、ミミズの走ったよくわからない文字だった

なにこれ・・・

開くと、ミミズの文字となぜか読める文字があった

その文字は、なぜか心に刻まれたような元々知っていて
今まで使っていたような

これって、デジャブ？

「ねえ、ティニア」

未だに話をしていてティニアを止め

「なんですか？」

「あのね、お話中ごめんね。この本なんだけど」

「ああ、それは古代ヒストリア語について書かれている参考書です
私が、研究しているのが古代ヒストリア語ですので」

「これ、なんて書いてあるの？」

指さす、ミミズがのたうち回ったような文字を指す

「ああ、ここの国の文字でしてティニス語といえます。

文字、読めないのですか？？」

「え・・・えーと・・・この、字は読めるのよね・・・」

ミミズではなく、先ほどの読める字だった

「それは！！古代ヒストリア語の文字です！もう、ほとんど
使われなくなつたもので、王国の城を守っている結果も

古代ヒストリア語で作られたと言われている・・・

これ！よめるのですか！」

「ええ・・・『ティーレス・レブ・レーモホスレ（汝は欲する

世界の言霊）』・・・『モルセ・ディーブス・レストリアス

（世界の語源を我に）・・・ツ」

激痛ともいえる頭痛がおそつた

頭を抱え込みしゃがみ込む

その時、彼女の体が光り出した

「香苗様ッ！」

一瞬の光だった

「いったた・・・なによ・・・さっきの」

キヨロキヨロと体を見渡す

異常はない、さっきの頭痛がちよっと響いているけど
何ともない

「香苗様！！だいじょうぶですか！お怪我は？！身体に異常は？！
！」

心配になったようで駆け寄り、体を込まなく見回すティニアを
余所目に

「大丈夫、みたい・・・」

私もちよっと心配になった

「はぁ・・・あまり心配かけさせないでください。

あと！さっきのは魔術語です、身をもって体験しましたね

魔術語は話す、空中でも地上でもどこでも描けることができます

まあ、皆さんは言うより書くことが多いですね・・・」

ふうーん・・・

さっきの本を見た

『遺跡から発見された古代ヒストリア語の解析と考察』と書かれて
いた

へえ、本当に参考書だったんだ・・・

「・・・え！えええ！！！」

いきなり叫んだ

「どうしたんですか！！やっぱりに異変が？！」

「違うの！・・・さっき、『ティーレス・レ』いや・・・

この古代文字を訳すと『汝は欲する世界の言霊 世界の語源を我に』

となるんだけど、この本、読めるのよ・・・これって

手に顎を置いて頷く

「もしかすると、香苗様の考えが妥当かと思えます」

「やっぱり・・・この呪文、翻訳呪文なんだ・・・」

「ますます、香苗様の属性が知りたくなりました！」

「属性？！ってなに？」

その後、翻訳呪文を偶然唱えた結果

この世界の文字だけ理解できるようになったと言ふことは
後、書けないと言ふことが判明するまで気づかなかつたというのは
後の話である

第2章02 ん！私って！もしや！！

「属性って？」

ファンタジーだから、きつと火・風・水・地とかあるんだろ？な
きつとあるに違いない

属性、って言うんだから

「魔法の属性です。火霊・風霊・水霊・地霊・聖霊と、
まだいろいろあるのですが、

滅多にない属性で光霊・闇霊とあるんです」

「へえ、光と闇ねえ」

「私の得意なのは、水と地です

これでも、一応魔術師でして

級はB+です。あはは・・・」

正直言つてB+が良いのか悪いのか基準がわからない

「そつだ、自己紹介もまだだったね。」

僕は、ティニア。ティニア・ディステイーニといます。

お見知り置きを」

丁寧に挨拶するティニア

ティニアって言う名前は、最初あった時に聞いてたから解つてたけど
そう思えば、あの時はぐらかされたままだったんだ

「あ、秋田香苗です。よ・・・よろしく」

「えーと、香苗様。この世界だと、香苗という名前の方は珍しいん
です・・・どうでしょう。このさい、名前を変えてみたら？」
変えるのねえ・・・

確かに、この世界で私の名前をずっと使うとなると・・・
物珍しそつに見られるよね。

それもいやだな・・・

「そつね・・・何にしようかしら・・・」

腕をそつと組み顔をかしげる

「セレネってどうでしょう。ここでは、月の神の名前なんです」

「セレネね・・・いいわ。でも、セレネ・アキータにして。」

自分じゃなくなってしまうそうで」

「わかりました。そうしましょう。セレネ様」

あはは・・・

「様はやめてほしいな。せめて、さん付けで・・・」

「そうですか・・・」

結局その後、部屋に戻った私

持ち物といって何も無いのだが、携帯電話に移っている

自分の飼い猫を見ていた

(ティナ・・・どうしてるだろ・・・元気かなあ・・・)

飼い猫のティナの心配をしている時点で彼女の器が大きいことを意味していた。

物珍しいものに惹かれてしまう彼女、実際男友達といった

陸上自衛隊富士火力演習(実弾演習を民間人に展示する行事)で

戦車の迫力にほれ込んでしまい、自衛隊に入った経歴の持ち主

珍しいもの、かつこいもの、かわいいものが大好きなのだ

(きつと、いつかもどれるわよね)

心の奥では、帰れるのかと心配する香苗だった

ティニアは、自分の書齋でなにやら悩んでいた

「・・・光の民・・・降臨・・・か」

光の民とは

2つの国が魔術による戦争をしていたことにより、

世界の持つ魔力の器が崩壊し溢れ出た魔力によって

魔物が現れた。

今まで見たこともない魔物が人間たちに襲い掛かってきたのだから
2国の戦争もすぐに終戦し魔物たちの駆除に当たった

しかし、数年たつてもその出現率が多くなり人類の滅亡まで問われるようになったとき

現れたのが、光の民『女神シエラ』だった。

シエラは、世界の器を修復し全人類にある制約を結んだ

それは、魔力の放出の制限だった

その後、シエラは言った『これ以上の争いも戦も、許しませんもし、そのようなことを若しくはそのような行為を見つけたらわれわれ光の民が貴方たちを滅ぼすことでしょう。』
と、言つて消えたのだった

そういう伝説がある

それから、光の民は『管理者』といわれている

この2000年の間に光の民が降臨したという話はない
「まさかね」

2000年の間にも実際に戦争は起こっていた

数十回繰り返された戦争のときも、光の民は降臨することは無かった

ティニアもが油断していたのだ。

光の民である、香苗を。

翌朝、むくつと体を起こす

うつすらと細めで瞬きをしつつ・・・

ふあ~~~~とあくびを1つ

ムニヤムニヤと口をもぐもぐさせ

ベッドから降りた

パジャマだった私は、普段着（昨日ティニアから

お下がりをもらったばかりだ）

を着て階段を下りた

ティニアはもう起きていた

早起きなんだなあ・・・

「おはよ・・・」

香苗に気づいたティニアはエプロン姿で

「おはようございます、セレネさん」

「え？セレネ？・・・あ」

「もうお忘れになったんですか？」

「いや、昨日の今日だしね。」

「それもそうですが」

といいつつ、手に持っていたお皿を香苗の前に置く

今日の朝ごはんは、卵焼きと魚料理らしい

もちろんご飯というものもないこの世界で穀物は

マリユムの実という細かい粒でできた穀物だった

「いただきます！」

食べてみると、玄米に似た味のしたものだだったので

少し食べやすかったのがうれしかった

その後、庭に出て話をしていた魔術というものの講義を聴くことができた

要するにこういうことらしい

魔力というのは、誰もが持っているもの

そして、それを作り出すものはイメージと考察力らしい

といってもどういうものなのかまったく掴めないのだが・・・

「じゃあ、早速簡単な魔術をやってみます」

手をゆっくり前に出し人差し指を突き出した

蛍のような淡い青の光が指先から発光する

指先を動かすと、文字のようなものがゆらゆらと空中に止まっていた

あれ、あの文字・・・ただ単に光って書いてあるだけ？

香苗は、不思議に文字を見ていた。

と、書き終わったのか指を掌にしまうと

小さいボールサイズの光る玉が出てきた

「すーい」

ちよつと感動

「このように、小さいものは少しの鍛錬ですぐにできるのです。まず、現代ヒストリア文字についてですが・・・」

先ほどの『光』というものを手で書いてみたが、何も起きなかった

「というわけで、基本的には魔力というより指先に集中していれば自然に魔力は指先に移動して・・・」

ん？指先に集中して・・・

じつくりと指先に集中するとだんだんと淡い青色が輝いてきた
ティニアより明るい色だった

で、先ほどの文字を書いてみる

なんだか、体の中が暖かい・・・

自然に書いていた文字を手に入れて掌を開いた
ポフウ

「うああ」

「どうしまし・・・た・・・ええ！」

そこには、先ほどより3倍ほどの光の玉ができていた

「ど・・・どうしよう・・・」

ティニアは青ざめていた

「な・・・なんて魔力・・・」

「なんとかしてよお」

結局、ティニアに教えることはないといわれ
図書館？にこもってしまった私だった・・・

まあ、これもなかなか面白いんだよね・・・

こここの私ってやっぱ天才かも

と、自惚れる彼女だった

第2章03 うはっ！聖獣ですよ！

検定試験1週間前になったころ

私は、いろいろな魔術を試してみた

9割は、成功するのだが1割は失敗

現代ヒストリア語は日本語にたとえるとカタカナに似ている
だから、ほぼ100%で間違えることはないのだが

古代語になると、1割は間違える

起動さえしない

というか、何もしないでイメージだけでも十分使える

ティニア曰く、魔女に匹敵するかもしれないと言われたが・・・

19になりそこないが、魔女ってねえ・・・

何かイメージが

検定試験のS級以上はこの文字をある程度覚える必要があるが
初歩の初歩だけである

その前予習のためにティニアは勉強していたらしいが

私にとっては、漢字とひらがなである

「セレネさん、この文字教えてください」

と、3週間前とまったく逆の立場になってしまった私たち

私は彼に魔術を、彼は私に剣術を教えてもらうことで立場上同じに
なっている

「それはね、『大地の恵みよ、偉大なる光の精霊よ、我に従い傷つ
く者に祝福をそして幸福をもたらしたまえ』って

なってるわね。たぶん、医療とか治療の古代文字だと思うけど・・・

聖術かな・・・」

とあって、彼に渡された本を返す

「ありがとうございます。そうだ、今から街に行きませんか？来週
検定ですし」

「え？今から？」

「はい、どうでしょう?」

この世界に来て、一度も街に行ったことがない私ももちろん拒否する理由もなく

「うん、行きたい!」

数十日ぶり、初めてである街への遠出に心弾ませていた

「準備しますから、庭で待っていてください」

と言い残し、部屋を出た

「街かぁ、どんなところなんだろう。やっぱりファンタジーゲームみたいなのかな」

十分こもファンタジーなのだが・・・

数分後、私は特に何ももつものがないので手ぶら

ティニアは何かいろいろ持っているようだ

荷物を馬に乗せた

「セレネさんは、馬に乗ったことは?」

「ないよ、でも飛んでいくから。」

「そうですか、わかりました。でも、街の近くになったら歩いてくださいね」

「そのときは、ティニアの馬に乗るv」

「はいはい、ちゃんと追いかけてくるんですよ」

「はあい」

そういうと、私をおいて先に行くティニア
急いで魔術を展開する

手に集中する、淡い青白い光が指先を照らす

体の中から湧き出る魔力を手に送り出す

(このぐらいかな・・・)

そのころには、私を中心にして風の渦をまいていた

そして、それを空中で古代文字を書く

【風の精霊よ、我に従え。共に戯れ、天近くまで舞い上がれよし】

『フィラト!』

香苗の体が宙に浮く

「よし」

トンっと、足を蹴ると一気に上空へ飛んだ

3週間ほどしか勉強していないが、この世界に来てから記憶力がいいというよりかは、思い出しているような感覚があった

この世界での目標は、古代の歴史を探ること

ついでに、元の世界に戻る魔術も探す

それが、私の目標

この飛行魔術を見つけたのはごく最近

ある文献に、書いてあったので試したら出来てしまったというのがいきさつである

まあ、楽しかったので遊び程度でしかなかった

ティニア曰く、誰も成功していない飛行魔術だから人前には出すなといわれた

空中で蹴ったスピードは速度を落とすことなく飛んでいく
まるで、風の抵抗がないように

水平線が見える景色を堪能しながら気持ちよく飛んでいると
強い魔力の波を感じた

(何?)

精霊たちの痴話喧嘩で小さな魔力がぶつかり合うのか感じたことは
多々あるがこれは違う・・・

口笛を吹きティニアに合図を送る

それに気づき顔を上げ、どうした?という表情を浮かべた

彼の手元に淡い青い文字が浮かんだ

【ツよい、マリヨクはどうヲかんじた。キニナル、ムカッテいい?】

それを見て彼はうなずき、方向はどっちかと合図を送ってきた

私は、彼から右斜めの方向を指差し、40と指で合図した

ここの距離は、デイスという単位らしく、

1デイス約100mぐらいらしい

彼も合図した方向に転換し走り出す

20秒もしないうちに目的地に着いた私は近くへ降り
周りを見渡す

(近くか・・・こっち！)

気配がするほうへ走り出すと、そこには

怪我をした白い豹のような動物が男3人に囲まれていた

動物虐待とかそういうのが嫌いな私は即座にとめに入った

「そこ！何してるの！！」

凜と通る声が森に響いた

ざわついていた森も一気に静寂する

「誰だ！」

3人とも私のほうを振り向く

「動物をいじめるやつに！名乗るほどの器は持ってないわ！」

「んだと？！死にてえのか！」

フンと、声にも出ないほどのため息をついて

「殺せるもんなら殺してみなさい・・・」

その冷えた声で言った

3人の中の1人以外は怯んだが1人だけ普通にしていた

(こいつ・・・戦いに慣れてるな・・・)

傭兵かと思つたが、そういう者もいるのだろうか？と疑問に思った

その男が、私に剣を向けた

「女を殺すのは、あんまりいい感じはしないが・・・

貶されちゃプライドが許さん」

と、一気に間合いを詰めた

私は一步も動かない

振り下ろされた剣は、私から30センチぐらいのところまで

鉄同士が当たる響いた音がした

「・・・ッ」

すぐに間合いを開ける

(手馴れてるな・・・)

「魔道士か?!」

「どうかしら、似たようなものよ」

「ふっ、所詮魔道士。結界を張ったって解除されちゃただの人間だよ!」

札のような物を取り出し私に投げつけた

その時、私の結界にその札が張り付き

大きな音を立てた、稲妻が落ちるような大きな音

だが、ただ音が大きかっただけ

私の結界はまったく無傷だった

「なっ・・・解除札が効かない!」

「子供だまし?のつもり??」

ニヤッと笑い、私は攻撃魔法のひとつを宙に書き出す

「くそっ、お前たち!引け!」

と、言うとすぐさま2人は逃げていった

「あら、もうおしまい?」

悪魔のような笑みを浮かべる

最近、ここに来て私のキャラクターが変わっていくような気がする

はあ・・・

「ッ、俺は、バスター、バスター・デイスアナだ!この勝負お前に預ける!」

と、苦渋の決断だったのだろうとても悔しがっていた

「あら、ご挨拶ありがとう。私は、セレネ。セレネ・アキータ。いま。ティニア・デイスティーニと一緒にいるの」

「デイスティーニ?・・・あの、炎の賢者の・・・ふ、そうかちよいと、相手が悪かったな・・・また会おう!」

といい、立ち去ってしまった

会いたくないんだけどね・・・

そして、怪我をしている豹の方を向いた

「大丈夫?怪我」

膝を折りしゃがみながら同じ視線にする

『助けてくれて、ありがとう……』

うあ、豹がしゃべった……普通なのかな？

しかも、女の子ばい声

まあ、ファンタジーだからv

「いえ、どういたしまして」

『あなた……私の声、理解できるの?!』

「できるといえばできるけど、近くによつていい？」

『命の恩人を拒絶するほどのことはしないわ』

「ありがとう」

そつと立ち上がり、近くによつて怪我の具合を見た

ほとんどが、剣の切り傷だが致命傷にはなっていない

結構深いな……

「ちよつと待つてね、今直すから」

『無理よ、私に魔力を当てても……』

「やってみなきゃわからないじゃない」

頬を膨らましながら言う

確か、ティニアが言つてたあの呪文使えるかな

掌に意識を集中した

「『大地の恵みよ、偉大なる光の精霊よ、我に従い傷つく者に祝福

をそして幸福をもたらしたまえ』」

『へえ、古代聖術が使えるの。でも、聖力が足りない。それに、そ

の呪文は光の民が残したといわれる神聖術のひとつ、普通の人間で

は扱えないよ』

へえ……これ神聖術なんだ……

ん？じゃーあの格好ならできるのかな？

意を決して、自分の力を解放した

【我の力をふさぎし者よ、汝の力を解き放て。ひと時の間、力を開

放せん】

深淵の黒髪が、ガラスのように割れそこから七色の髪が浮き出てきた

うん。これならいけそう

『あ……あなた様は……』

「患者は、静かにしてなさい！」
と、叱る

同じ呪文を言うとうすと傷口が閉ざされていった
これでよし

気を抜くと、7色に輝いていた髪の上にまた黒いものが覆いかぶさ
って

元の黒髪に戻った

「これでいいね、血だけはどうにもならないから。食っちゃ寝すれば
なおるから」

伏せの状態の豹がむくつとお座りの状態になった

こう見ると、立派な豹である

『突然、申し訳ないのですがこれは何かのめぐり合わせ……』

「なに？」

『私の主になってほしい』

私は、光の民に忠誠を誓った聖獣の一人、2000年前からいなく
なつて以来

この世界の脅威を払ってきました。是非、あなたと一緒に旅をした
い』

ん……どうしよう。そういわれてもなあ……

「どうしよう。ティニアがいないし」

と、呟くと

「いいんじゃない？何がわからないけど」

突然現れたティニア

豹も驚きすぐに襲える格好になった

「ま！待って！彼は味方よ！」

『そうですか、それは失礼しました』

たぶん……聞こえてないよね……はあ

「えっとね、ティニアこの子飼っていい？」

言いにくそうに、言う私

突然、大きな豹を飼っていいかと言われたら
もちろん・・・

「かまいませんよ」

つていうよ・・・？は？いまなんて？

「え？いいの？」

「はい、ただし！世話は、ちゃんと見てください！それが条件です
あと、庭をみだらに荒らさないこと！」

豹の方をみて

「できる？」

『私は、聖獣。そんなこと容易いですよ』

「できるって」

「いいでしょう。しかし、その豹聖獣に似てますね・・・」

「え？だって、その子せ」

『待つて！聖獣って言わないでください』

「え？」

『聖獣は元々、ペットなどにはいけないと言つ法律があります』
そ、そうなんだ・・・

『異例に、神に近い者は許されるとされているから。それは、
魔道協会が認定し、国王の承認を得てからの話』

ものすごいことをしてしまったようで

戸惑う私

そりゃ、聖獣だからって言うわけではなくて・・・

そこまで申請しないとイケない獣を飼つてよいのだろうか

飼うつて言うのもなんか変なきもする・・・

『しかし、私は主君に忠誠を誓つた者。たとえ、世界を敵に回しても
私は、主の味方です』

なんか、かつこいい事言われた

ちよつと赤くなる

女の子じゃなきゃ、ほれてたかも。

と、思う私・・・

この、豹の名前はフェンリルというらしい
フェンリルって・・・あの、人間に化けられるといわれてる
あのフェンリルなのかな？

第2章04 いやあ、街っていいものですねえ

「オルト街」

言うなれば、そこは古代ヨーロッパのような街

レンガ作りの家や店、その前に並ぶ露店商

そして、人の波

「へえ〜」

少し感心してしまう。初めて来る街だが

こうもにぎやかとは思わなかった

ふつと元の世界地球のことを思い出す

レンガの家なんて、滅多になく

コンクリートで作られたビル、ガラス越しで見るショーウィンドウ

なんか、やっぱり異世界に来ちゃったんだなって

『香苗様は、異世界から来られたんですね。この世界より

科学が発展してそんな感じがします』

（うん・・・やっぱり、魔法があるからかなあって・・・）

「え?! なんつでえ?」

驚きのあまり、大声を出してしまった

それに気づいたのかティニアが心配そうにしていた

「どうしたんですか? フェンリルが来てから何か、変ですよ?」

「え? い・・・いやああははは」

笑ってごまかす私・・・情け無い・・・

肩身を狭く歩く

うな垂れている視線をフェンリルに向けた

『香苗様と私は主従関係で結ばれた云わば契約と同じ

貴女様が私を認めて下されなければ、意思の共有はなされません。

なので、この世界では普通なのですよ。ああ、後ですね

私との会話は、思念・・・思うだけで会話はできます。

もし戦闘になった場合でもこれを使うことで有利になることもあり

ますから

慣れてくださいね。』

(そ・・・そうなんだ)

『ええ、あと。セレネと言う名前も偽名だということも知っています』

(だから、本名で言われたんだ)

『ですが、あまり本名を人に言わないほうがいいでしょう。』

本名を使うと、呪術や、契約術などの対象になってしまいます。その関係では、偽名はとても賢明な判断だと思いますよ、

ティニアさんに感謝してくださいね』

(そ・・・そう・・・)

ドン

何かにぶつかつた、ゆっくり頭を上げると

なんか嫌な雰囲気漂っている男

(ヤバ!ど・・・どうしよう・・・ん?)

「ごめんなさい」

すぐに、頭を下げて謝る

腰の角度は90度にもなるほど

「気をつける! 餓鬼!」

が・・・がきだあ?!

ムツとして突つかかろうと思ったとき

『香苗様、お気を確かに!これはやり過ぎしましょ』

クッ・・・

「ケッ」

歩き去っていく男

『財布、すられましたね』

(はあ、良いことないなあ。ねえ、フェンリル・・・)

私が言おうと思ったことを察したのか

『取ってきますね』

男を追う姿勢になったとき

フェンリルの考えが、私にも流れてきた

(フェンリル・・・殺しちゃだめよ？命を殺める時は、あくまでも最終手段だからね)

『御意に』

にいと、笑ったような表情をした

こう見るとカツコいいのになあ

「あれ？フェンリルは？」

ティニアが、フェンリルの姿がないのに気づいた

周りをきよろきよろ見渡す

「あの子、気まぐれだから。勝手に戻ってくるわよ」

「そっか、最初に服を買いに行こう。僕の行きつけの店があるから行って見よう」

服だあゝいつも、男物だったからなあゝ胸がきつくてゝ

・・・うそです・・・ああゝきついゝっていつてみたいゝ

女としての小さな悩みを心の中で叫ぶのだった・・・

(おい、小さくないぞ・・・作者！)
げっ・・・

第2章05 これって、あれだよな？あれ！

その店は、マレリアの店と書いてある札が立っていた

（なんかそのまんまねえ、と言うか何の店だかわからないじゃない！）

扉を開けると、鈴の音が店内に木霊した

「いらっしやあい、あら？ティニア様じゃないですかあ
もう修行はいいんですか？」

「こんにちは、マレリアさんちょっと買出しですよ、この子のね
私の頭を優しくなでる

「あらあ、もう彼女ができたんですか？妃にでもするんですか？
その言葉にびっくりする

「き・・・妃？！」
妃って、王家とかそういう貴族が使う言葉だよな？！

「冗談はそれぐらいにしてくださいよ
ティニアは、店内を回ってみる

「その子、セレネっていうんですけど。寸法とかいろいろ測って
適当に見繕ってくれませんか？」

「はい、ええと」
私のほうを見るマレリア

紫色の髪と緑の瞳と整った顔。美女って本当にいるんだなあ
呆然と見つめてしまった

ふと、我に返って
「始めまして、セレネです。セレネ・アキータといいます」

簡単に挨拶をする私をジーと見るマレリア

「・・・へえ、珍しいわねえ。光属性？生まれて始めてみましたわ
「はやくしてほしいなあ、マレリア」

催促を促すティニア

「はあい、お待ちを。えーと、このサイズだと・・・これなんかど

うかな？」

マレリアが着ていたのと同じような服を出す

それは、私の世界で見た事のある服

「ちゃ・・・チャイナドレス?!」

マジ?! うっそお。

赤い服に、刺繍が施してあり、なおかつ、太ももまである

スリット・・・

どう考えても、どう見てもチャイナドレスだった

(『香苗様? 今、どちらに居りますか?』)

(うあっ・・・驚いた・・・今ね、マレリアの店ってところで

着るもの買ってるよ)

(『ああ、あの店ですね。今行きます』)

思念通信を終え、その服を見る

・・・ジーンズとかがいいなあ・・・

スカートも良いけど、スパッツがあるともっといいかなあ

・・・ないと思うけど・・・

良く、見渡すと・・・

そこにあるもの・・・

「・・・あるし・・・テイニア、これ!と、このTシャツだけでい

い!」

手に持った品は、青みのかかったズボン

ベルトを通す部分もあり、左右前後には小物が入るようになった袋

そう、ジーンズパンツ又はジーパン、今だとデニムと言うかもしれない

ない

なんで、こんなところに?

そう思っていると、店に誰かが入ってきた

「いらっしやあい、あら、フェンリルじゃない?」

フェンリル?

その名前を聞いて、振り向くとそこにいるのは

日焼けをしたような薄黒い肌をした1人の女性

ピンクの瞳に、白いロングヘアをポニーテールにしている
活発そうに見えるが、とてもかっこいい容姿をしている

「こんにちは、どう？お店のほう」

「フェンリルのおかげで、繁盛してるわ。この服もあなたが教えて
くれたものですもの」

まさか・・・チャイナドレスを??

もしかして、このデニムも??

疑問がどんどん増えて、混乱寸前の私

（『香苗様、この服のデザインは先祖から伝えられている女神シエ
ラ様が

残したといわれている、伝書に載っていたものなんですよ』）

へえ・・・そ・・・

え?!

「お店の前にね、これが落ちてたの。誰か知らない？」

彼女の手にあるのは、どう見ても私の財布

でも、それはフェンリルがとりに・・・あれ？

どうなってるのよ!

（『私がフェンリルですよ』）

（え?）

「これ、あなたでしょ?もう落としちゃだめですよ」

「あ・・・ありがと・・・」

渡すときに、こっそりといわれた（豹になってきますね）

と・・・やっぱり、この女性フェンリルなんだ・・・

「じゃ、たまたまよかっただけだから。またね」

「またおいでね」

手を上げて出て行く

「え〜と、お代金は、ティニア様がお支払いでよろしいですか?」

「あつ、よろしく」

「かしこまりました。こちらが、お品でございます」

袋に入れられた、荷物をもらおうとしたが、ティニアが横からそれ

を取った

「女性に、持たせるわけないじゃん」

ニヤと笑い

私は、ちよつと苦笑してしまった

フェンリルは、外に待っていた

ちゃんとお座りして、こう見るとあの女性とこの豹が同じとは思えない

そこら辺がやっぱり、異世界なんだろうなあ

「この次は？」

「ああ、お前の武器を買いに行つてから、食事を取つて

その後、魔道士協会に行つて検定の申し込みをしよう。

それで今日のお買い物はおしまい」

肩に、荷物を背負つて歩いていく

今度は、武器か・・・

人を傷つける武器

日本では、武器を持っていたが人を傷つける事は絶対になかった
でも・・・きつと、この世界では・・・

そう思うと、気が沈んでしまう香苗

その異変に気づいたのだろうか、ティニアの腕が私を覆い寄り添う
びっくりして、引き離そうと思つたが

なんか、優しく包む腕そして、ティニアの鼓動が聞こえると
これも悪くないな・・・

そして、武器屋に向かう男女2人と豹1匹だった

これって、何かカップルみたい

内心笑ってしまった

第2章06 どじしよじ、やっちゃったよ！私

始めてみる武器の店

日本では絶対に見る事のできない刀剣類の数々
おもちゃ屋などで陳列しているように

武器が山ほど並べられていた

バスタードソードと言われる、大きな両手剣

ショートソードと言われる、細身の片手剣

モデルガンシヨップで売られているボウガン

弓道で使うような弓もあった

もちろんナイフもある

しかし、日本と違うのがどれも金属と木で作られた物

石油などで作られたプラスチックがない

そもそも、科学の進歩がないこの世界ではしょうがないことだろう
いろいろなものがあるのだなあと、品々を見て回る

そうすると、一角だけ展示しているような空間が広がっていた

「へえ、今日は展示品があるようですね」

ティニアが興味があるらしく、一緒についていく

展示してあったのは、細身の綺麗な剣

装飾もさほどなくとも、その剣は大事に使われていたのだろうと
見て判断できた

鞘に小さな白く輝く宝石のようなものが付いている

綺麗・・・

なぜか、懐かしく思えるその剣

触ったことも見たこともないのに、いつも身につけていた

そんな感じがした

その下に書いてある商品の説明を読む

『この剣は、私たちの女神であるシエラ様のご愛用されていた
剣と言われ光の民である者しかこの剣を抜くことができないと

されています。未だかつてこの剣を抜く事のできるものは、未だかつておりません』

光の民・・・女神シエラ・・・

ティニアの家に置いてあった書物からもその言葉はいくことなく出てくる言葉だった

七色に輝く髪そして、金色に輝く瞳

金色の瞳は稀に生まれて来るらしく、その人は神の子として扱われてきたといわれる

でも、私は両方を兼ね備えているわけで

もしかしたら・・・と、変な事を考えてしまった

「ねえ、ティニア・・・もしかしたら・・・だけど」

剣に見とれていたティニアは、こつちを振り向かずに返事をする

「この剣ね・・・私、触つてみたいんだけど・・・」

何か考え込んでいるように腕を抱えて悩みこむ

確かに、私ならこの剣を抜けるかもしれない

異世界から来た、そして、七色の髪、金の瞳

でも、周りに人がたくさんいる

私がかもしも、この剣を抜いてしまったら騒ぎになる

きっとそのような事を考えていたのだろう

「そうですね・・・オーナーに聞いてみましょう」

そう言い残して、店員に何か話していた

ティニアから剣へと視線を向けた

懐かしい・・・そんな思いが強くなる

もう、そのときなのですわ・・・

え？

突然、誰かに話しかけられた・・・

周りをきよるきよると見渡しても今は私しか周りに誰もいなかった

もう一度、剣のほうを見る

(もしかして・・・この剣?)

始めまして、私はシエラ、シエラ・エルフィード

(え?!・・・うそ・・・けんがしゃべ・・・てる?)

驚く事はないわ。喋っているわけじゃないの

良く見ると、鞘と剣に付いている白い宝石が薄らと光を放っていた

貴女と、心の中で会話をしているわ

そう、聖獣フェンリルと同じね

(フェンリルを知っているの?)

ええ、私と生涯共に生きてたたった一人の友人ですもの

(そうなんだ・・・じゃあ、女神シエラって・・・)

私よ、本人はもう地球に帰ったけどね

(地球に帰れるの?!本人?)

私は、本人から作られた思念のようなものよ。

本人は、招かれた者だから帰れるわ。でも、貴女は、招かれざる者

普通なら来る事のなかった光の民

今、この世界は全く平和ですもの・・・来るべき者ではなかった

(え?)

残念だけど、貴女は世界に帰る事はできないわ

(う・・・うそ・・・)

帰る事ができない、地球に・・・そんな・・・

帰れると信じていたのに

薄らと涙を流した

大きな失望感、そして絶望・・・

どっと押し寄せる、不安

(・・・無理なんですネ・・・帰る事は・・・)

できるかもしれない・・・でも、時間はかかるわ

1000年2000年かかるかもしれない・・・

(無理じゃない!そんなに私生きてられない!)

大丈夫よ、光の民は年を取らないから

その代わり、得るもの失うものがある事だけは

知っておいて頂戴。いずれ、ティニアと言う

者も、寿命で天に召されてしまう・・・

しかし、あなたは生きないといけない・・・

その覚悟だけは、ちゃんとしておいて

真つ暗になったところから一筋の希望の光が見えた
気休め程度だったが、私にはそれがうれしかった

希望はある、ならそれなりの生きかたをすればいい
父から教わった言葉・・・

『生きるもの、出会いと別れは一緒』
そして

『楽しく生きる。』

なぜか、その言葉がとても励みになっていた

今も・・・

父さん・・・ありがとう・・・いつも励ましてくれて・・・
きつと大丈夫だよね・・・

私は、作ったはずだ。この世界を知る事、そして
この世界で行きぬいていく事を目標に・・・
大丈夫、どうにかなる・・・

(大丈夫、帰れなくてもここで楽しく生きていく。そう決めたから)
そう、でも忘れないで。貴女は地球人って事を

(ええ)

すつと目を瞑った

この数日でいろいろな事があった

ティニアにもあった

魔術を知った

剣術も習った

書物でこの世界の事を知った

フェンリルもの会った

マレリアさんにも会った

そして、シエラさんにも

まだ始まったばかりだ!

私の物語は・・・

意を決して目を開く

そうすると、ティニアは私の傍で立っていた

「どうしたんだい？」

「うん、なんでもないの」

首を横に振り、平然を保つ私

やせ我慢・・・きっとそのように見えたのかもしれない

「大丈夫、楽しく生きよう」

ティニアから出た言葉・・・

ふと、父さんの面影が一瞬見えてしまった

止めようとした涙が・・・止まらない・・・

そのとき、ティニアは私を抱きかかえた

無理やりのように見えてとてもやさしく

「泣きたい時に泣きなさい、笑いたいときに笑いなさい

そうやって、人間は生きていくんです」

「ティ・・・ティニア・・・うう、うえぐ・・・うわーん」

力いっぱい、ティニアを抱いた

たくさん泣いた

すべての不安・失望感・絶望すべて出し切るように

そして、希望の光を大きくするために・・・

私が泣きやんだ頃、ティニアが私の腕を解いた

「もう、大丈夫だよね？」

うん、と頷く

「よし、あの剣ね触らせてくれるって」

気づくと、その剣はもうショーケースに入っていなかった

泣いているときに持ち出されたのだろう

「おいで、客室に行こう」

目を赤くしながらティニアの腕につかまり歩いていく

客室に入ると、老人が1人と若い男の人が1人立っていた

「テイニア様、お久しぶりでございます」

丁寧なお辞儀をする老人

「ええ、お元氣そうでなりよりです。デイスア伯爵」

「その方ですか？」

私のほうを向き挨拶をする

「始めまして。私、デイスア・ブルディーカと申すものです、この店のオーナーでございます」

「あ、セレネ・・・セレネ・アキータです」

机に置いてあった、剣を私に差し出す

「こちらがご要望の剣でございます」

「あ・・・ありがとうございます・・・拝借させていただきました
重たそうに、彼は持つが渡された私には紙のように軽かった

「あの・・・もし、この剣が鞘から抜けた場合どうするんですか？」

疑問だった、価格さえ書いていないこの剣

もし抜けた場合、いくらかかるのか

「もし、抜刀できた場合その剣は抜いた方に差し上げます。

そのように、言い伝えられてきたものですから。

それ以外の事は、何もする事はございません」

もらえるって事・・・

それはいいんだけど、あまり大事にしてほしくない・・・

顔に出たのだろう

「この剣がなくなつたとすると、魔道士協会等が騒ぎ出すでしょうが
我々も光の民が降臨した等の情報は漏らしません」

「わかりました・・・」

それなら、大丈夫だろう・・・

私は、剣の柄の部分をつかみ

そつと、引き抜く

刀など抜く時出るスイッチのような音がした

鞘と剣がこすれるように抜ける剣

抜ける剣は、淡い青色に輝いていた

刃こぼれもしていない、指紋などの油も付いていない
とても綺麗な刃をしていた

「ぬ・・・抜けた・・・」

隣にいた若い男が仰天のあまり一步下がっていた

老人は平然として言った

「どうぞ、その剣をお持ち帰りください。光の民セレネ様」

先ほどとは違い、膝を付く

老人だけではなかった、隣にいた若い男性も

「この老いぼれが、光の民に会えることができもつ言い残すことは
ございません」

な・・・

「馬鹿なこと言っちゃだめです！冗談でもそういうことは言うては
だめ！」

「これは・・・大変申し訳ございません」

「頭を上げてください・・・恥ずかしいです・・・」

「・・・失礼いたします」

そういつて、やっと頭を上げてくれた

「このように、セレネ様とティニア殿下二人そろって見られるとは
我々、とてもうれしゅうございます」

「ティニアはともかく、私は・・・え？殿下？」

殿下・・・つて、皇太子・皇族などの敬称で、皇太子・皇太子妃・
皇太孫・皇太孫妃・親王・親王妃・内親王・王・王妃・女王などに
用いる、あの殿下？

「ティ・・・ティニア？」

ジトと見る私

なんか、冷や汗でもかいているのだろうか

私の視線から外れる瞳

「ご・・・ごめん・・・言っただけだと思っただけ・・・」

僕、第2王位継承者・・・なんだよね・・・」

はい？王位継承者ですか？今、そんなこと言った？

言ったよね・・・絶対いったよね・・・

私、王子様に溜口聞いてたの？

あーでもない、こーでもない・・・

うああゝゝはずかしい・・・

顔を真っ赤にしてうつむいてしまう私

かれこれ、3週間も立っていたのにティニアが王子だとは全く持つて気づかなかった・・・そんな面影もない

「・・・」

「気・・・気にしちゃだめだよ・・・だって、光の民は神の存在なんだし

セレネを、特別扱いするような事もしないよ。普通でいようね。ね」
完全にパニックになっている私・・・

「ティニア！絶対に、『僕の妃になってください』とか言うなよ！」

「はあ?!」

混乱して言った言葉はそれだった・・・

それから、20分ほどして混乱は落ち着いた私

一人の逸れ神と、一人の王子との物語
始まるまでまだまだの様子だった

第2章07 はぁ・・・私・・・呪われたのかな・・・

地球に帰る事ができない、出来たとしても数百年も後の事でも、めげない・・・負けない！絶対に
そう決めたんだもん

武器屋から出た私の腰には先ほどのシエラの事、神聖なる剣『シルフィード』が帯びていた
彼女、シエラ曰く「私か付けた名前じゃないから勝手に言ってくればいいのよ」と言っている
まあ確かに勝手に付けた名前だから勝手に言わせて置けばいい話だろうけど

歩いている途中で、シエラの経歴を聞いた
西暦1980年の九州にある種子島から召還され
世界が生み出した魔王を永眠させ、世界の魔力の器を大きくし
そして、ある程度補強をした後地球へ帰ったらしい
もしものために、この剣に思念を植え付け
何も知らない召還者（光の民）に対して、道しるべを与えるべく残
したらしいが

イレギュラーである私が、以外だったらしく・・・元々の予定が狂
ったらしい
そんな事私に言っても知らないよ、と人事のように言う
そんなやり取りをしているとティニアの足が止まった

「ここです。僕の唯一おいしいと思うお店です」
ボケーと歩いていた私が見上げると

木造の建物で、西部劇に出てくる飲食店のように思えた
まさか・・・中から出てこないよね・・・カウボーイハットのお兄
ちゃんが

そんな事を思っていると中から出てきたのは・・・

防具を付けたただの兄ちゃんだった

予想が外れてちよつと苦笑する私

中に入るのは私とティニア、フェンリルは入った後人間に化けて1人で食べるらしい

「らっしやい！お！ティニアじゃねえか！」

「おやつさん、元気にしてるみたいだね」

「おう！おかげさまでな！まあ、入ってくんな！ミリア！客だ！」
遠くから、かわいい声で”はあい”と聞こえると

エプロン姿の女性が走ってくる

緑色の髪に髪留めを付けて丸く纏め上げている女性は

少し耳がとがっているのかなと思う。もしかして

エルフとか言う分類なのかな？と思ってしまうた

「お客様2名さまです・・・かあ？！ティニアじゃないの??」

最初私を見た後に、後ろにいたティニアを見つけると驚いた声を上げた

「や・・・やあ、ミリア元気？」

すごい消極的になり、なおかつ私を盾にしている・・・
なに？何？

服をつかみ見られないように隠れるが、伸長差と体格であればれ

「なに？私を差し置いて、その子と、デートでもしてるの？」

「ちよつと、服伸びちやう・・・って？はあ？」

いきなり言われる、彼女疑惑・・・

ティ・・・ティニア！伸びる！早く何とかして！

「ち・・・違うって、この子は、お客様。ね、今この街を案内してるの」

「ふう〜ん・・・」

そして、私のほうを見る・・・

しかし、先ほどの嫌悪のオーラがだんだんと収まってきた

「何か、あなたを見てると・・・まあいいわ。今回はお客様だし

どうぞ、こちらです」

そうして、案内された丸いテーブルに椅子
なんか、こういうのって映画で良くあるこれを盾にして
銃撃戦とかあるんだよね」

と昔懐かしむ私

ダーティーハリーとか、そういう映画に良く出てきたよね・・・

突然、ドアが・・・

バンツと、リアルで扉が開いた

「おい、ジジイ！貰うもんもらいに来たぞ」

良く言うヤクザチックな、チンピラが約6名入ってきた・・・

いや、7名・・・

「お前らにやる金はねえ！帰ってくれ！」

おやつさんは、テーブル越しに言う

「ああ？何だつて？聞こえねえーなあ」

近くに在った椅子を蹴り飛ばし壊した

私・・・こういうの許せないんだよね・・・

ガツと立ち上がる・・・

しかし、ティニアは私の腕をつかんで首を横に振る

(だめだ！今は・・・)

(で・・・でも！)

悔しがる私

派手に壊し回る男

やだ・・・こんなの・・・絶対に！！

私が、お手伝いしてあげます。

え？

「あっ！」

突然、私の体が硬直し体がプルプル震える、そのまま瞼がすうと閉
じた

そうして、あけた時瞳の色は銀色になっていた

ティニアの腕を振り解き

暴れていた男の前に立ち、そのまま鞘の入った剣をしたから振り上げた

空気が切れる音

男の喉下で寸止めされる

動きが止まる男

「な・・・何だ貴様・・・」

『誰でもいいだろう・・・店の中で暴れるのは止せ』

声と、表情は、香苗の物ではなかった

香苗の声に似つかない低い声

そして、触ったら切れてしまう刃物のような表情

「や・・・やんのか？ああ？」

その表情と空気で脅えてしまう男

ふつと鼻で笑い

『もう？負け犬の遠吠えか？笑わしてくれ・・・』

男の目の前で先ほどの女性の姿が消えた

香苗は、その場で勢い良く回転し体重を乗せた回し蹴りで男を突き

飛ばした

サンドバッグを殴るような鈍い音

スローモーションのように『く』の字で宙に舞う男

そして、空中で繰り広げた香苗の足と男の背中が落ちるのは同時だ

った

膝を付いていた香苗は、そのまま立ち上がり

『まだやるのか？今度は、手加減はしない・・・死を覚悟するなら・・・』

...

目を細め、そして、一気に殺気を放つ

『来なさい・・・』

後ろのほうでバタバタと失神する人達

「か・・・適う相手じゃない！」

「やばいって！・・・こんなのいるなんて、聞いてねえぞ！」

そんなこと言いながら、這い蹲り逃げていく

『ふう……』

そして、振り返ると3人ほど失神して店員が介護していた私は、近寄ると

「ヒッ」と、恐れた表情の顔をあげる女性店員

『大丈夫、怖くないから。ね』

と、女神のような笑みと心温まる雰囲気はこの店全体に漂わせた心の中で、唱えた心の治療呪文、恐怖や不安を取り除く聖霊魔法香苗は知らないシエラだけが知っている物だった

失神していた人達は、知らない間に意識が戻っていた

『ごめんね、あまり暴れさせないよう努力したんだけど』

周りを見ると、男がいたところだけぼろぼろに壊され散らかっていたふう……と、ため息を付いてしまう

（あの……勝手に体を動かして……何も説明なしですか？）

この体の本人がこの体を使っている誰か……シエラだと思うけど問いかけた

あら、ごめんなさい。手っ取り早く終わらせようと思って

少し、体借りたわ。すぐ返すからちよつと待ってね

（はぁ……）

『後は任せたわ、ティニア殿下』

ティニアの傍で、呟く

え？と驚く

『ちよつと、支えて。なれてないから……きつと倒れるわ』

「ど……うあ」

いきなり力が、抜け落ち抱きかかえられるようになる私の体そして、体に力が入る

「はぁ……やつと戻った」

「やつとつて？え？」

何がなんだか判らないティニア

しょうがないだろう……どう話せつて言っんだいい！

とりあえず、ティニアに任せて

私は、片付けを手伝った

終わった頃には3時を過ぎていた

ご飯も奢りと言う事でいただいたが

正直言つて・・・ウマすぎです！

どこかの豪華レストラン並みにおいしいですって！

驚きのあまり食べ過ぎそうになる私をティニアが止めに入り

ちよっと名残惜しい事をしたなあと後悔していた

でも・・・勝手に動かす事の出来るシエラ・・・

呪われた剣を持ってしまった勇者って感じが

判る気がする香苗だった・・・

第2章08 裏口検定・・・しかも!?

食事も終わらせ、向かった先は魔道士協会

「うぁ・・・」

下は-10度、上は60度近く見上げる

その建物は、まるで国会議事堂

「む・・・無駄にでかいなぁ」

正直な感想を言う

「検定を行って級を取らないと魔術を使つてはいけません。

その費用が馬鹿にならないので、実際級を取ってなくても使っている人が

多いですね。」

解説しながら、中へ入っていく

そこは、大きなフロアーになっていて

中央に、鷹のマークの入ったじゅうたんが敷いてあった

「うへ・・・CIAとかFBIみたい・・・」

映画で出てくるようなマークを見てつい、そのように思ってしまった
中央の受付に行く

「いらつしやいませ。ご用件を承ります」

ベレー帽の様な帽子をかぶり受付をする女性

「登録番号1-22323-33のティニア・ディステイーニですが、
が、

来週の検定試験の申し込みに来ました。あと、この子は、新規で申し込みです」

「判りました。少々お待ちください・・・ティニア様ですね。級はA-でよろしいですか？」

「はい、あと、この子なんですが、普通の魔力測定器だと・・・壊れるかもしれないので・・・」

「はい?そうでございますか。判りました、減衰室で計りましょう、

22番でお待ちください」

「こっちだよ」

テイニアに腕を引っ張られながら、何が何やら判らずに
22番まで行く事が出来た

1人の男の人が私を待っていたらしく

「えーと、テイニア様のお付人の方ですね？こちらへどうぞ」

私とテイニアが別れ別れになり

1つの個室に入れられた

そのとき、体に脱力感が襲った・・・

なに？

魔力を一定以下に下げるときの減衰室です

魔力が大きすぎると、測定値が壊れてしまうので

強い人とかはこの中で計るんです

そういうの、嫌いだから体の中のみ解呪しますね

ふうと楽になった

「えっと、お名前は？」

「セレネ・アキータです。18歳」

「セレネさんですね。では、魔力を計りますので気を楽にしてください」

ふう・・・楽にしちゃうと・・・魔力出ちゃうんだよね・・・

あ・・・それを計るからいいのか・・・

ふっと気を緩めた瞬間

魔力メーターの針が振りきり

なおかつ煙を噴出した

あ！すぐに、気をため魔力をとめる

「うそだろ・・・」

男の人が驚いたような顔をしつつ

「お・・・お待ちください！」

あわてて、部屋から出て行ってしまった

ちよっと不安になった私は、フェンリルと交信を試みる

(ねえ、フェンリル?)

(『何ででしょうか? 香苗様』)

(あのね・・・機械壊しちゃった・・・テへ)

(『はあ・・・香苗様、貴女は光の民で在るんですよ。いくら、高価で性能がいい魔力メーターでも気を緩めたらすぐに壊れますよ! 当たり前です・・・』)

思念通信でも、フェンリルのあきれた顔が目には浮かぶ

(どうしたらいいかな?)

(『なるようにしかありませんよ・・・』)

だよね・・・

プスプスと煙を吐いているメーターを見る

それは完全に真っ黒になり使い物にならないだろうと見て判った
どうなるだろう・・・

心配になっていると、ひとりの老人・・・またか?

同じような格好でおかつ顎鬚・・・

「ふおふおふお、お主かのう? 魔力計測器を壊したという女子は」

「え? はあ・・・そうなんでしょうね・・・」

「ふむ・・・ワシによう目を見せておくれ」

「はあ・・・こ・・・こうですか?」

ふむうくと細い目を私の瞳をじっと見ていた

「・・・ほう、その目は偽りの瞳じゃの・・・その、髪もそうかのう」

な・・・この人・・・何者?!

この人・・・どこかで見たこと在ると思つたら、月の賢者の末裔じゃないかしら・・・

え? そんな偉い人なの?!

「な・・・なに、言ってるんですか・・・」

フオフオフオと笑って男たちを外に出るように言い
2人だけになつてしまった

・・・こういう、重い空気・・・嫌いなんだよね・・・

「ようこそいらつしゃつた、光の民よ」

え？

「なっ……」

言葉にならなかった、いきなり私の正体？を見破られてしまった
「その、偽りの魔術を解いてくれないかのう。天に召される前に
見たいのじゃ……神の姿を……」

そう言つて、何かを祈るようなしぐさをする老人
はあ……

私は、一時封印をといてもとの姿になつた

と言つても、元々はこの黒髪に黒瞳なのだが

この世界では、これが普段の格好らしい

「おお〜」

感激したのだろう、私の手を握り

「お会いしとうございました……」

細い目から薄らと涙が流れていた

「あなたに会えて、うれしいです。ですが、

困つた事に、私は招かざるものなのです」

「といたしますと……」

「この世界の危機を救うべく来たのでは在りません
たまたまなのです……いわゆる、落神です……」

「そんな事……落神なぞ言つてはなりません。」

貴女様は、我々の女神であるのですぞ

この老いばれ、いつでも味方になりますぞい」

「ありがとうございます。えっと、早速なのですが」

「なんですじゃ？」

「私、光の民が降臨した事は誰にも言わないでください。

そして、出来れば……検定も受けずに取りたいのですが……」
ずずずしいことを言う私だが……

「何じゃ、そんな事ですかえ！すぐにでも発行させるですじゃ。

お会いでき……本当に……嬉しい限りですじゃ！

それでは、老いばれは失礼いたしますすじやよ」「
と、ノコノコと歩いてゆき出て言ってしまった
うあ・・・即了承？

外にいた、若い男の人は、もういいですよ
と言われ受付まで歩いていくと

「この場でお待ちください」

そう言つて、待たされること10分

何かブレスレットの様なものを持ってきた男たち

「セレネ様でいらっしやいますか？」

神官服の様な白い服を着ている男が尋ねてきた

「あ、そうですけど」

「魔道士協会オルト支部理事長より、検定合格の品をお持ちいたしました」

そう言つて、私の左手に付けるブレスレット

「あの・・・これは??」

「これが、検定合格書の代わりになるものです」

それは、金色に輝いていてとても綺麗だった

ティニアが驚いて私の腕を取った

「こ・・・これは!」

「え?なに??」

「ま・・・間違いじゃないのですか?」

「いえ、私には判りませんが、オルト支部始まって以来です

S+級のブレスレットが出るのは」

S+?

・

・

・

・

・

S+!!!!??

「はぁ！？な・・・なんだってえ~~~~っ
その声は、フロアー全体に響き渡った

結局、S+級を覆す根拠がないわけで
そのまま、級をもらい検定を受けなくてすんでしまった
受ける気満々で勉強していたのだが
まあ、それもいいだろう・・・

第2章09 んゝなんか、先生になった気分(1)

結局、何もなくS+の魔術検定をもらい
浮かれ気分の私

「ふんふん」

あれから6日が経ち、ティニアはと言うと

「はぁ・・・明日かぁ」

そう、明日はティニアの試験日なのだ

あの後、私もなぜか試験場へ来るよう通達が在った

まあ、話によると試験官になれという通知らしい

S+級の魔術師なんてめったにいない

この世界できつと両手にいるかどうかだろう

持っていた洗濯物をパンパンと伸ばし、物干し竿に干していく
んゝ朝は気持ちいい

「どうしたのさぁ〜ティニア。もしかして、緊張してるの?」

洗濯物を干し終わり、洗濯籠を持ってリビングに上がる

「そうですね・・・はぁ、気が重い」

ぐったりとうな垂れる

「大丈夫よ、私の講義を聞いているんですもの。それに・・・」

「それに?」

「ううん? なんでもない。ほら、最後のスパートがんばって!」

ポンポンと背中を後押しする私

「何事も、後悔先に立たず。全力を押し切って・・・あれ?

違うな」

「・・・出し切ってますか?」

ポンと、手を叩くと

「そうそう、出し切ってやって見なさい」

「あはは、何か母上様みたいなこと言うんですね」

「は……ははうえ?!……」

驚いて声を上げてしまう私

「聞かなかったことにしてください」

「はあ?!……」

結局その後も、私は書齋で本を読み漁っていた

ここに在る本も3分の2はもう読みきった

こんなにも勉強家だったのかなあと思うほどである

もちろん、立場も正反対になってしまったティニアも

私によく聞きに来る

何だかんだと言って……

翌日

「もう、1週間経ったのね……なんだか、昨日のように思える」

「そうですね……あ、僕最初筆記ですので。ここで遊んでいてください」

そう、実は驚かすためティニアには言っていないのだ
試験監督官になる事を

「解った、がんばってね」

にこっと笑って手を振り見送る

その背中が見えなくなると

ふう

ため息をひとつついて、受付へ足を踏み入れた

「あの、セレネ・アキータですが」

「え?あつ!セレネ様ですか!お待ちしております!」

そういうと、1枚の紙を渡される

「これは?」

「試験官用の服装になっていたいただきます。え〜と……失礼なんですが……」

「ええ、いいですよ。ここに書けばいいんですか？」

「はい、ご記入お願いいたします」

そう言っている間に、手に持っていた物を見つっ赤い1筋の光が文字を刻んで行く

「はい。これをお願いします」

ペンを渡そうとしていた受付の人同時に紙を渡そうとする私

「え？あ？あれ？？あ、はいこれで結構です。控え室は先ほどの用紙に書いて在ります」

「ふふ、サイズあるかなあ？」

楽しそうにしながら、受付を後にした

私の背中を呆然と見ている受付嬢が居たことも気づかずに

「はぁ・・・緊張する」

大学教室の様な大きな場所

そこには、約60名の人が座っていた

「気を引き締めていかなきゃな」

一人の女性が入ってくる

試験官の服装でそして見た事のある黒い髪・・・

「セ・・・セレネ?!」

試験官用の服に着替えた私は、答案用紙を持ち

教室の中に入った

そして壇上の上に行く

「ここは、魔術検定A-の試験会場です！間違えてきた方はすぐに外に居る係員に行つて正しい会場へ行つてください」

淡々と棒読みする私

「え」と、自己紹介をします。S+級のセレネ・アキータです

特別に、このA-試験監督官として召還されました」

ざわざわと、驚きの声を上げる受験生たち

じつと、私を見る

「では、説明します・・・と、言っても知って居ると思いますので省きます

試験時間は、予定通り50マイナ（この世界でいう分に近い単位記号）

で行います。20マイナまで退出は出来ません。20マイナの後終わった方はその場所に試験問題を右側に、解答用紙を左側に置き退出してください、問題に付いての質問は出来ません

カンニング・・・不正行為が在った場合、その場で転移魔術により退出していただきます。と、言いたいのですが、あえて言いません」
会場がざわつく

「次の実技で、私の相手になってもらいます。そのときは、死を覚悟してください。もちろん、勝てる相手ではない事は判っているでしょうから、

勝てば、合格させてあげます。でも負ければ受験資格を剥奪します
そういう勇気が在れば、挑んでもかまいませんが・・・
無謀なことは、しないほうが身のためですよ。

以上です、質問は？・・・では、始めてください」

（うそだろ・・・なんで、セレネが?!試験監督官?!）

問題を読みながら、そんな事を思っている

問題用紙にスウと青い光が文字を書いた

『ティニア、ガンバ』

ふっと笑うそして、顔を上げると

セレネがこつちを見て小さくうなずいた

（はぁ・・・やるっきゃないか）

「はい!終了!!そのまま退室して結構よ!」

そういうと、受験生たちは全員退室した

私は、そうと手を上げると部屋の中で強い風が起きた

助教で来ていた人達が目を隠す

風がやんだ頃には、私の手に答案用紙と問題用紙を握っていた
「はい、これよろしくね」

そう言つて、助教に渡して部屋を後にした

もう、昼食の時間

実技は午後からになった

「あ、ティニア」

試験監督官用の服装でティニアを呼ぶ

その服は、黒くところどころに銀の装飾が施して在った

ティニアは、パスタの様なものを食していた

「セレネ・・・なんで・・・」

「まあまあ。深い事情がないわけでもない・・・うん・・・
頼まれたから断れなかつたのよねえ」

「ですが！何で私に一言言つてくださらなかつたんですか！」

「まあ、驚かそうと思つて」

テへと笑う私

にらみつけるティニア

あはは・・・

冷や汗物だ・・・

「驚きましたよ。そりゃ・・・でも。おかげで・・・」

「ん？おかげで？」

「何でも在りません！実技なんて出来るのですか？

あれ以来、稽古つけていないでしょ」

「うん・・・大丈夫だと思つよ。うん」

「どうなんでしょう・・・お手並み拝見としたいですが・・・
不正行為したものの居たんですか？」

「居た居た！3名居たよvやる気満々だったけどね」

「大丈夫なんですか？！本当に！！」

「うん。たぶんね」

(だ・・・大丈夫だよね??任しちゃっていいよね)

全く問題ありませんわ

(あはは・・・よろしく)

その後、食事を済ませ試験の時間になった

そのときは、もう香苗ではなくシエラになっていたのは
言いつまでもない・・・

第2章09 なんとなく、先生になった気分(1) (後書き)

s p e c i a l t h a n k s

y u u 様

a k a n e 様

第2章 10 んんなんか、先生になった気分(2)

『うふ。はあくい、皆さん！こつちですよ』

(はあ・・・私のイメージが・・・)

いいじゃないの、後は任せて。

あ、魔術のほうはそつちがやってね

(はいはい・・・)

『では、最初に剣術からです。えくと18番と22番、39番
あなた達は不正行為をしたでしょ。私の餌食になってもらうわ』

(え・・・餌食って・・・)

そう言つて、持っていた練習用の木刀を片手に取り

18番の男に渡した

『はい、あ。そうだ。3人一緒でもいいけどどうする？』

戸惑っていたのだろうか、2人は置いてあつた木刀を取る
不敵な笑みを浮かべて

『ふふ、いい顔してるじゃない。でも・・・お仕置きは・・・』

ニコニコしていた顔から、真剣な眼差しに変わった

『手加減しないわよ』

周りに居た受験生たちほとんどの肌を鳥肌が立った

「クッ・・・」

1人が剣を振りかざして着たが、ヒュツと目の前を通り過ぎ
全くあたらない

彼女は、剣さえもつていなかった

3人同時に攻撃しても、その剣が体に当たる事はなかった

5分ほどが過ぎ、3人は肩で息をしていた

『あら？もう終わり？まだ、早いわよ。終わるのは』

その光景を見ていて、驚いていた

避けるのに必死なのかと思っていたが

彼女が居た所から3歩以上離れて居ないのだ

しかも、体を捻ったりするだけで剣筋は彼女の体を避けるように滑っていく

まさしく神業だ・・・

『それじゃ、終わりにしましょう』

そう言つて、手刀で首筋を叩いて行く

ね。

うふつと、笑うときには白目を剥いた受験生たちが地面にキスをしていた

『さあ〜て、序曲はおわり〜』

よつと、と言つて落ちていた木刀を手に取つた

『じゃー、実技試験を行います。そこに落ちてる木刀を取つて、私わたくしとお相手してください。もちろん、この子達のように無様になる事はないので安心して。ただ単に、どのぐらいの技量が在るかどうか基準が在つてね。文章で書かれてるんだけど・・・』

その紙を丸めてポイツと投げ捨てた

『私が見込み在るものは合格。満たして居ないなら不合格にするわ。それじゃ、1番から〜時間は一人10分まで。その間何してもいいわよ・・・あ！でも魔術を使つてはいけませんからね、強化ならいいです。自分の剣が折れた時点で失格、落としても失格ですから気を付けるように』

そう言つて、1番から始まつた

もちろん、誰もが彼女の哀れむ姿を想像したが・・・

『キャハ。そんなんじゃ、あたらないわよ。ほら〜腰がひけてる〜』

10分と言つ時間をくれたのだが、30人・・・目でも最大で3分と言つ時間しか・・・相手になつて居ない・・・

みんなが、強化していた武器を壊され、していない者は剣と剣とのぶつかり合いで弾き飛ばされてしまつていた

そして、38人目・・・僕の番だ・・・
「よろしく・・・」

『よろしくv。ティニア君』

(ちよ・・・手加減してあげてよね！)

それはどうかしら〜

すう〜と、剣をあげる

息遣い・・・隙も・・・まあ、荒削りだけど良いセンスしてるわね

ふう〜ん、いいじゃない・・・

そのとき、彼の足が地をけた

木刀同士がぶつかり合う音

普通ならそれで木刀を落としているが

『へえ〜ティニア、やるじゃない』

「・・・あなた・・・だれですか！香苗様じゃない・・・」

ギリギリと音をしながら顔だけ近づいて小言で話す

『ご明察、私は香苗であつて香苗じゃないわ。』

剣術に慣れている香苗つて言ってもいいわよ』

「じゃ・・・誰ですか！」

間合いを取つて再び剣同士叩き合う

『聖剣の中に居た人物と言つてもいいかもしれないわね』

「ま・・・まさか！シエラ様?!」

『ふふ・・・ご想像に任せるわ。でも、今は共通の名前セレネよ』

バンと、大きな音がしたと思つたらティニアの手から剣がなくなつ

ていた

「参りました・・・」

『はあ〜い、お疲れ様。次の人〜』

そう言つて、75人の受験生達

シエラ曰く、30人だけ合格にした

もちろん、ティニアも合格していた

さて・・・次は・・・私の番か
実技の最後の種目、魔術である

第2章 1 1 なんとなく、先生になった気分(3)

「え」と……」
たじろぐ私……

先ほどの、剣術の試験で嫌な雰囲気になってしまっている
あゝあ……どうしろって言うんですかあ……

「とりあえず……最後の試験です。魔術なのですが……」
1枚の小さな紙を各人に渡した

「これ、ある魔術によって字が書かれています。数は2つ……
その数字を浮かび上がらせて私に持ってきてください。

どんな手を使ってもいいです、でも……慎重にやってください。
たとえば……間違いの解呪をすると……」

持っていた紙を前に突き出した瞬間、煙もなくその紙は燃えて消えた
「こうなります……こうなったら、失格です。そのままお帰
りください」

「成功すると……」
持っていた逆の手に在った紙を受験生たちに見せる
白い紙の上に、立体的に浮かび上がる字

「こういう風になりますので、なったらそのままの状態で持ってき
てください。あ、気を抜くと消えちゃいますから気をつけてくださ
いね。えーと……制限時間は、30マイナです。では、がんばっ
てください」

そーいうと、もっていた本を読み始める私
今日の本は『古代遺跡の紋章 第39説』という、古代の言い伝え
られている紋章についての論文だった

(こりゃ……難題だよ……セレネ……)
深く息をする

これは、精霊魔術による物……あと、神聖術……か……

また凝った物を・・・

でも、この解呪法はセレネ・・・香苗と教えてもらったものだから何とかなりそうだった

その紙を手に持とうとした

だが、その行動を止めた

何か忘れている・・・そう思ったのだ

周りを見ると、手に取ったりして解呪を試みている

違う・・・これは、触ったら終わりだ・・・

触った瞬間に、術が発動して・・・何をしても燃えてしまう・・・

セレネが、置いて回った紙をじつと見続ける

上と下とに呪文で書かれた円形の紋章が見えてきた

これか・・・

紙の上に手をかざしたとき、上は緑色の文字　下は白く輝く文字が現れた

その文字は、『3』『8』だった

(あはは・・・単純明快・・・受験番号ですか・・・)

風の魔術によって触らないように浮遊させセレネの所にもって来た

「お願いします」

「お！来たね、うん。OK合格！」

そう言っつて、浮いている紙を取った

そして、耳の近くで言った言葉「おめでとう、ティニア」

囁いた後、体を離して「おつかれさま、あ。コフェ(カフェテリアの様な喫茶店)で待ってて」

一礼して退出した

その後、コフェに行った私は

「ご説明・・・くださいますよね？」

ご立腹の様なティニア・・・

顔と顔の間は30センチにも満たないほど前に乗り出している

「あは・・・あははは」

目を合わせず、人差し指で頬を搔く

「『あははは』じゃ在りません！！何なんですか！！あの、剣術は！！」

「そ・・・それはあ・・・」

「私にも言えないのですか？そうですか！家主は誰だと思っているんですか？」

「いっつ・・・それひどい！」

「ひどく在りません！いいですか！あなたの事情を知るのは、保護者としての責務です！」

「ほ・・・保護者って！いつからなったのよ！」

「今からです！」

「はあ?!」

あきれて物が言えない私

激怒中のティニア

結局私が折れた・・・

じゃないと、家から追い出されそうだったし・・・

「じゃ、その剣に秘められたシエラ様の思念が先ほどの事をしたと？」

「そう・・・です・・・」

ふう〜と、ため息を付くティニア

手をもぞもぞと動かしうな垂れる香苗

「そういうことは、早めに言ってください！それと！！」

ピシツと指を私に差し出し

「シエラ様です！！いるんでしょ！出てきて返事なさい！」

びっくりして目を開いていた香苗だったが、ふっと目を細めた

『そうね、言うのが遅れたわね。ごめんなさい。以後気を付けます・

・・・』

香苗もびっくりしていたが、ティニアもびっくりだった

戦女神、光の民と言われた人が、ティニアに謝罪したのだ

(シ・・・シエラ？それ本性)

ふふ、そう見える？

(はぁ・・・ある程度意識共有してるんだからね？判るでしょ？)

あら〜ごめんあそばせ〜

(反省してないわ・・・こりゃ)

「わ・・・判ればいいんです・・・」

『そう、よかったわ〜それじゃね〜』

スウト、瞼を閉じた後目を開いた

全く違う雰囲気が漂う

やっぱり、本当の事だったんだなと改めてティニアは思った

「それじゃ、帰りますか？」

「うん、帰ろう〜」

1日臨時監督官の仕事が終わった

ついでに、監督官用の服も、もらって帰ったのはついでの事だった。

あとがき

作者のMISSTYです。

ご愛読ありがとうございます〜

やっと、2章完結です！

長かったですわ〜・・・

新3章の予告をして、ご挨拶にいたします〜

それでは、皆の衆ごきげんよう

次回予告(第3章)

セレネ(香苗)「ねえ、何か手紙きてるよ?」

ティニア「ん?あれ?親父からだ・・・」

手紙の中を見る

セレネ(香苗)「なんだって?」

ティニアは、持っていた手紙を燃やそうと魔力を上げた
とっさの判断で、セレネは相対魔力をそれに当てる

セレネ（香苗）「なに燃やそうとしてるのよ！！見せなさい！！」
あっ！

と声を出す、もう遅し……

セレネ（香苗）「？……え、何で私の事が？！」

どうなるのでしょうか、香苗の運命はいかに……

次回、『香苗、王都に行く』

第3章01 香苗、王都にいく(1)の巻

陽に当たり輝く砂時計

その砂が無くなり、光り輝いた

独りでにカーテンが開き、窓も開く

太陽の光が香苗に降り注ぐ

香苗が作った自作の目覚まし時計

「ふう〜ん・・・」

眩しそうに目を覆う

そして、ムツクリと起き上がり

眠たそうに目をこする

「・・・ふあ〜〜っ」

背伸びをした後、首をクイクイ回すと骨が鳴る

「ん〜いい天気だ〜」

いつもの朝の日課

ティニアのために朝ごはんを作る

まあ、ここに来る前も趣味は料理だったし

朝も、起床6時だったからあまり億劫になっていない

「今日は、無難に昨日取った魚にしますか〜」

着替えて終わり台所で調理を始める

魚を焼くと結構煙くなるので、風の魔法を使って

一気に上空約20m付近まで煙を出していた

小さな結界を張りつつ、台所を汚すのは最小限にとどめていた

「ふんふ〜んふんふん〜」

焼き終わった、魚にご飯の様な穀物を炊いたもの

後、最近見つけた岩塩で漬けた浅漬け

こんなもんだらう〜

「よし！ティニア〜ご飯だよ〜」

ダダダと、2階に駆け上がり

勢い良くドアを開く

案の定、布団に包まって寝ているティニアを発見！

「こらっ朝だよ！おきろっ」

「ふにゅっ・・・」

ティニアの寝顔、かわいいからいつも起こしに来ちゃうんだよねっ

「ほらっおきてっ」

ぬふっ。私じゃないと置きないわよっちょっと失礼！

(うあっ！)

『ほらっティニアっおきなさい、起きないとっセレネお姉さん襲っ
ちやうぞっ』

バツとティニアを抱き付こうとするが

「うわあ〜っ」

驚きふためくそして、ベッドから落ちる

「ッてっ・・・セレネさん！毎日、悪い冗談止してください！！」

『あらっ、だって香苗だとしても起きないじゃないっだから、私が
いつも起こして上げてるんじゃないっ』

「やめてください！！」

『そうっもう朝ごはん出来てるから、着替えて降りていらっしやい
手を振りティニアの部屋から出る』

そして、意識も切り替わった

「もっ、そういうやり方・・・やめてよねっ」

香苗とシエラとの意識の切り替えも慣れた

ほぼ0秒に近い意識の交換が出来る

魔術・弓は香苗、剣術・近接戦闘はシエラと言う風に分担する事に
したので

まあ、ある程度シエラも魔術を使えるらしいけど

魔力が少ないと言う理由であまり使わない

完全に開放するには、私とのシンクロが重要らしい

そうそう、弓は元々射撃の腕が在ったためか

一回やってみた。それが楽しくて、今じゃ自分専用の弓さえある
それは、まるでアーチェリーの弓になってしまった

アーチェリーを見るために、弓手がたまに見に来るのだ

「フェンリル！ご飯だよ！」

そういうと、私の斜め後ろに現れる

「ご飯だよ」

振り向いて言った

「はい。」

そう、フェンリルもいつまでも豹の姿も良くないと思い
ティニアに事情を話したらすぐに、了承してもらえた

「はい、ご飯」

おわんによそって、渡す

「ありがと」

片手に新聞（この世界にも新聞と言うものが在る。と言っても、テ
レビがないから情報源はこれだけなのだ）を持ちながらもらう

「ほら！食事中は新聞読まない！」

「はあい・・・」

【まるで夫婦だ・・・】

ご飯を口に運びながら、何か言い忘れてた物を探した

「食事中申し訳ございません。朝手紙が来てました。王宮の印が在
ったから」

お父様からじゃないかと」

フェンリルは、ティニアに手紙を渡す

「ふうくん、見して」

フェンリルは、その手紙を手渡す

ビリビリと、印を破り紙を取り出した

読んでいると段々表情が険しくなる

と、その瞬間簡易的な火の魔法を手にもって来たのが判った
私も相対魔法を使って、燃えそうだった手紙に打ち当てた

「っ」

「こらっ！何証拠隠滅しようとしてるの！見せなさい！！」
それを奪い取る！

「あっ！」

そして、その内容を読む

我が息子ティニア、元気にしているか？

魔術検定合格おめでとう、ようやくこっちに帰ってこれるな
お前を待ち遠しく思っているぞ

そう、風のうわさで女性と同居しているらしいじゃないか

親に無断でか？いい度胸をしている！

すぐに帰って来い！猶予は与えん！すぐに迎えの者もやる！

それと！彼女も連れて来い！

以上だ！

ティニア・ディステイーニ・アルディスト 宛

ダルタニア・ディステイーニ・アルディスト 王より

「ふう〜ん・・・王都かあ〜一度行って見たかったんだよね〜」
うふつと笑う

「だ・・・ダメです！絶対ダメです！」

「なんで？どうして??」

「え？だって、貴女は光の民ですよ！ばれたら、軟禁されてしま
います！」

なーんだ、そんなこと考えてたんだ

「ねえ、ティニア。もし、ティニアを人質にされても助けると思
う？」

「・・・思いません・・・」

「よろしい〜だから、大丈夫だよ。振りきれぬ自身あるから」
頭を抱えるティニア

こうなると、誰にも止められない・・・

「ほら、うわさをすれば」

そのとき、ドアをノックする音が聞こえた

「3名です、王の近衛騎士のようです」

会えて、思念で言う

(通して上げて、危害はないわ。きっと、お迎えね)

(『御意』)

「お迎えさんですよ」

と、パタパタとドアを開ける

「失礼！デイスニー王国近衛騎士である、バルタであります。

第2王位継承者である、ティニア王子とその御同居している女性を

お連れに参りました」

「はい、お疲れ様です。ティニアは、そこに」

シュツと、抜刀し私の首めがけて剣が飛んできた

キーン

首ギリギリで、受け止める

もう意識は、シエラになつていた

『失礼でなくて？急に剣を立てるとは』

そう言つて、剣をはじき返した

そういうと、その場に彼女の姿はなかった

「ど！ど！」

刹那 首に冷たい違和感があった

『動かないほうがいいわ・・・死にたいなら動きなさい』

そついうシエラ

彼の視界からはずれ神業のように背後に付いたのだ

石と鉄が当たる音がする、彼が剣を捨てたのだ

「俺の負けだ・・・先ほどの、ご無礼申し訳ない」

『あら？命乞い？近衛騎士が珍しいわね』

そう言つて、剣をしまつ

「近衛騎士でも、命は惜しい……ですが、先ほどのティニア様に
対する

発言は許しがたいものでした、ですので反射的に」

『殺そうと思つたかと？あら、怖いわ』

半身になつて、顔を隠す

「申し訳ない……」

『いいですわ、そのぐらいでは私に勝てませんもの』 ティニア、
お客さん！』

反射的に動く彼

私は、殺気を放ちそれを止めた

『それ以上、やると……容赦しないわよ。それが、近衛騎士であ
つても』

その声は、そこにいる3人の素肌を切り裂くような殺気だった声

「セ！セレネ！どうしたんだ？」

すごい殺気を放っている、セレネを見て驚いたティニア

「ん？あ、ティニア。も、この3人、ありえないんだよ！いきなり、
切りかかつてきて！防いだんだけど、まだやりそうだったから」

「お前たち！」

「ハッ！ティニア様！お迎えに参りました！」
膝を付き礼をする3人

「この馬鹿たれ！この方は、私の師匠に当たる方だ！無礼な行為を
して

しかも、生きていたなんて幸運の幸いだぞ！まったく……」

「も……申し訳ございません……」

「セレネさん本当にすみませんでした」

頭を下げる、ティニアをみて

その肩を叩き

「気にしない、気にしない」

にこつと笑つた

「あははは・・・」

苦笑するティニア

「ああ、私はいいけど、もう一人のほうで、しごくって」

「ゲツ・・・」

それもいいね。

(『私も、お手伝いしますよ』)

(まったく、面白がつて・・・)

その後、王都に行くために準備をして終わったのが1時間ほど後だった

「忘れ物ないですか？」

「大丈夫、在ったら会ったで・・・ね」

「そ・・・そうでしたね・・・」

「じゃーいこ〜」

馬に乗る私、といっても動かすのはシエラのほうだ
私は乗ったことないから判らないのだもん

そうして、王都に向かい出発するのだった

気配を消し潜んでいた黒い影

あれがそうか・・・第2王位継承者・・・ティニア・ディステイ
ー二・・・しかし・・・あの、女は・・・

第3章02 香苗、王都にいく(2)の巻

テイニアが、馬に乗る私に近づいてきた

「もしかして、シエラ様ですか？」

と、眩く

「ん？なんのこと？」

にこりと、笑みを浮かべ

とぼけるシエラ

「いえ・・・何でも在りません」

(馬つて、始めて乗るよ) たのしい)

香苗は、馬に乗ったことないんだね。

あっちでは、車？

(うん、電車と車かなあ・・・乗馬つて成金ぐらいしかやらないしね)

ふうん

「テイニア、後どのぐらい？」

「そうですね。260キナマイナ(約250km)ぐらいですかね」

(約、6時間か・・・シエラ？お尻いたくない？)

ん？大丈夫よ。姿勢さえちゃんとしてれば

でも、クツシヨンが在れば楽でしょうね

(ちよつと待つてね。『風の妖精よ、我に従い思念に基づく形をかたどり出現せよ。【フレイズデイス】』)

呪文を発動すると、セレネのお尻にクツシヨンの様なものが出てきた

へへ、これはいいわね。呪文書作ったら売れるかもよ

(あはは、考えておくわ。にしても静かね・・・)

・・・

(シエラ？)

黙つて！

(！)

『・・・テイニア・・・』

小さく囁く

「ええ・・・困まりましたね・・・何人か判りますか？」

(フエンリル！)

(『前3、左右2、後1です・・・武器は、左右1ずつ弓

前3後左右1は刀剣です・・・厄介ですね、王家の暗部らしき服装です』)

「前3後左右1刀剣、左右1弓・・・テイニア・・・あなた、親父さんに狙われてるの？」

「そんな覚えはないよ・・・」

「ふうん、じゃあなんで・・・王家の暗部が来てるのよ」

冷静に普段の顔をしていた

「きつと・・・僕が狙いだよ」

「アンタが？」

「うん・・・たぶん」

「なんで？アンタをつけ狙う必要があるの？」

「それは・・・女王が僕を国王にする・・・つもりらしい・・・」

「ま・・・待つて！確か、あんた第2王位継承者だつていつてなかつた？」

「あれは、建前・・・」

(あの・・・これって、もしかしてなんですけど・・・)

言わないでいいわ・・・当たってるから・・・

とんでもないのに巻き込まれたわ・・・

知らなかつたとはいえ・・・まさか、テイニアが第一王位継承者候補だとはだとは・・・

「まあ・・・いいわ、ねえ！近衛騎士さん！ちよつと休憩しない？」

「ああ、かまわないが。休憩を取るとしよう」

見晴らしのいい草原のど真ん中で休憩を取る・・・

「セレネさん・・・こんなところで休憩とつて良いんですか？」

「問題ないよ」

ギリギリと、組み立てていく香苗の弓

この世界でもこのような歪の弓は見たことないだろう

「よし出来た」

2本矢を持つと立ち上がる

「じゃー、宣戦布告としますか」・・・

キュウイツ

弦が伸びる音がする

そして、放つ

シュツ

風を切る音が鮮明に聞こえた

そして、振り返りざまにもう一発

シュツ

(よし)

お見事！

300m先でドサドサと何かが落ちる音が

かすかに聞こえた

狙いは、魔力が一番高い所を狙って撃つつもり

たぶん、監視していた暗殺者だろうけど

民間人だったらどうしようと言う考えは全く無かった

顔とか見えないし・・・しょうが無いよね

持っていた、弓に付いていたネジを一本はずすと

はじける音と共に瞬時に分解される弓

重力に反発するように浮いている部品らは

自我があるように決められた場所へ入っていった

「まあ・・・あとは、来るの待ちましょう」

ティニアに入れてもらった飲み物（紅茶に似ている）をすすりながら
敵が行動するまでふけていた

「ん？来たよ」

黒い覆面の人間がうちらを囲んでいた
慌てる近衛騎士たち

冷静沈着なティニアと私

『あら、どちら様ですか？』

「・・・死を向かえる者に名乗る必要もなかるう・・・」
手には、弧を描くように曲がった剣を持っていた
暗殺などに使われる剣だ

『そうですか・・・私は、セレネです。セレネアキータ
以後、お見知りおきを』

にこつと笑う私

苦笑するティニア

刹那 キーン

鞘に収まっている剣が先ほどの男の持った剣とぶつかった

『穏やかではありませんね』

「やり手が・・・」

すぐに間合いを取る

『いえ、そんなたいそうな者ではありませんよ』

「ならばっ！」

男が手に集まる魔力を放った

そのエネルギーが直撃すると、その爆風で土ぼこりが舞う

「手ごたえなかった・・・なっ!？」

埃が段々なくなると、1人の人影が見えてきた

「はぁ・・・何をするんですか・・・」

「ま・・・まさかっ!直撃を食らったはず!」

驚愕の顔を隠さずにいられないと言った口調だった

「こんなので？まさかあゝ、まあある程度技量が判ったので・・・」
今度は、私の番

同じように手には赤い火の玉が現れた

しかし、先ほどの魔力をはるかに凌駕する魔力を持っていた
「このぐらいでは死なないでしょう?」

男の目が見開く

「ひ・・・引け！」

シユンといなくなるが・・・

「もう来ないようにして上げます。どうか飛んで行ってください！」

そして、その魔力の玉を放った

玉・・・いや、弾は自我を持ったように

逃げてゆく敵に向かって行った

そして、数秒後

反動の後、大きな爆音と共に

深淵なる黒髪が風に舞った

「ふう・・・もう来ないでしょ・・・」

ティニアがともつらそうな顔をしていた

「大丈夫、死にはしてないでしょう・・・でも、数日は動けないか

もしれませんか・・・」

「なら・・・いいんだけど・・・」

ほっとしたような顔を見つつ踵を返した

「さ、行きましょう」

何事もなく？邪魔者を追っ払った私たちは
目的地、王都へと向かうのだった

第3章03 香苗、王都に着く・・・着いたけど・・・

デイスニー王都

遠くから見た

それは、パリに似た町並み

石畳で、城まで続く道

大きくはだかる城壁、そして

凱旋門のように大きな門

その側にある通用門ではいるかと思ったら・・・

「ティニア王子が帰られた！かいもーん！かいもーん！！」

大きな音を鳴らし、50mもありそうな大きな門が開きだした

それを見ていた私は、開く口がふさがらない・・・

ど・・・どうやって動いてるの？！

というか、凱旋門って知ってる？

パリのでかいもんだよ！あれだよ！あれ！

馬を、門近くに在る馬小屋に置くと歩いて王宮に向かった

「うあぁ〜城下町ってすごい・・・」

まるで田舎者の叫び声

それに呆れるティニア

「と・・・とにかく・・・城に行きましょう。その後で、街に行く

という事でどうでしょう？」

「うん！」

まるで子供だった

その城は、まるでシンデレラ城を似せたのか？と思っほど

大きい城を目の前にして、ポカーンとする私

「セ・セレネさん！はしたないですよ！」

「あっ！」

急いで口を押さえる

気が抜けるような顔される

それを見てしまった私は、顔が真っ赤に赤くなった

「私だ！門を開ける！」

「はっ！」

敬礼をする門番達

うあ、顔パス？しかも、王子様モード？

そこへはいると、メイドたちが列を作りて向かえていた

「「「ティニア王子、お帰りなさいませ」「」」

「ただいま」

そういうと、先に歩き出すティニアを追いかける私

中央に立つ黒い紳士服の男と青い服を着た女性が立っていた

「ティニア様、お帰りなさいませ。王が謁見のまでお待ちです」

「判った、この者も一緒にいくのだな？」

「御意に、その前に湯殿へおいでくださいませ」

私も王に会うの？へえ〜っ

そのまえに〜おふろ〜おふろ〜っ

あんまり緊張しないところは、シエラも香苗も肝が据わっていると

言葉よう

「セレネ様、こちらへ」

「はいはい」

後ろで、ティニアと先ほどの男と何かしゃべっていたが
セレネには聞こえていなかった

「うあ〜すごい」

「セレネ様、お背中をお背中お流しいたしますわ」

ん？何か・・・

「え？一緒にはいるう？」

「いえ、お体を洗うのをお手伝いするだけでございます」

「ひえ〜〜いいよ！自分で洗えるからあ！」

もう裸になっていた私は後去りしていたとき

ツルツ

「きゃあっ」

しりもちを付いて、受身は取ったがお尻が痛かった

「いたたた・・・」

「大丈夫ですか!？」

「うん・・・大丈夫・・・あたあ・・・」

「じゃーお体洗いましょう」

「でえ〜〜〜っ」

その後、お風呂場で甘い声が響いたのは言うまでもないことだった

《作者・・・後で覚えて置け!》

お風呂が終わって、出て言った時

かなり疲れ果てて出て着たセレネ

正直、あの従女が世界で最強じゃないのかと思ってしまった

正装に着替えたティニアを見つつ、私はいつもと変わらない普段着

「ティニア・ディステイーニ入ります」

「入れ」

そう返答が来ると、大きな扉が開きだした

歩いて行くや、ティニアは膝を付き頭を下げた

が、私は後方5mほど下がったはじのほうで立っていた

「ん？そなたか？うわさの策女は！」

いきなり暴言を吐く王に、ちよつと苛立った

『あら、王なのにいきなり私に対して暴言ですか・・・』

「なっ！貴様！何様だと思っている!」

いきなり、激怒する王

『ただの王でしょ……』

慌てるティニア

「全く……何を騒いでいるのですか……」
と、横から声がした

右の扉から現れた人物、見たことある……書物で

確か、王妃のミリティだったかな……

若く17で王妃になって、今21歳

金髪の髪には、ティアラが乗っていた

「あの者だ！あの者がいけないのだ！しかも、黒だ！不吉だ！」

「全く……何を早とちりしているのですか？」

はあと、ため息を付く王妃

それを見て、私は笑いをこらえていた

「王様？そんな、私の髪が嫌であれば、どんな色がよろしいのですか？」

赤ですか？緑ですか？茶色ですか？地毛の色のほうがよろしいかな？

そんな簡単に、髪の色が変えられるの？

(うん、もちろん。)

「ぼ……王に対する冒瀆だ！おまえら、こいつを捕らえろ！」

「ふうん、じゃあ私の地毛見てからでも遅くはないともいますよ」

そういうと、封印を解呪した

七色の髪そして、金色の瞳が現れた

捕らえようとしていた兵士たちはすぐその場から離れた

「ま……まさか」

最初に出た声の主は王妃だった

「始めまして、光の民であるセレネ・アキータです。今、ティニア王子の

師匠を務めております。以後お見知りおきを」

ニコっと笑う私

「ば……莫迦な！そんな大それた事を！きつと目眩の術に違いな

い！

お前たち、光の民並びに、王への冒瀆だ！そいつを捕らえ牢屋へぶち込め！」

「はっ！おとなしくし」

その最後の言葉は全く出せずに固まった

魔術によって体の神経を固めたのだ

それを、避けながら王の所へ行く私

『あら・・・ひどいわね・・・光の民に対して、冒瀆ですか・・・
王様』

ティニアのそばを通る

「せ・・・セレネさん」

王は持つていた剣を抜こうとした

刹那

その時はもう彼女の剣は抜かれておりその剣先は王の首下に在った

『私を・・・侮辱するなら王としても許さないわ・・・楽しく暮らそうとしていた私の生活を壊すなら・・・』

キツと王をにらみつけ

『光の民を総勢集めて、あなたの王族の命と引き換えだよ・・・』
息を呑む王

もちろん、光の民なんて私1人だけだが・・・

といつても・・・一人で出来そうなくらいの事だろう・・・怖いが私たち（シエラ・香苗）を敵に回すと怖いぞと印象を入れて置かないとね

『まっ、私が気に入らないならこの子のお守りはごめんだね』

首元に在った剣をしまう

そして、踵を返し出口へ向かった

『ああ、そうそう隣国の暗部がこの子狙ってたけど私が倒して置いたから。』

まっ、お礼なんてくれそうにないでしょうね。ティニア、短い間だったけどお世話になったね。また会える時を楽しみにしてるよ。あ

あ、それと・・・こんな王とは、一切協力はしないからね。もしかしたら、隣国と協力関係になったりして・・・ふふ・・・」
私は手を振って出て言った

ティニアの呼ぶ声が聞こえたがあえて無視あんないやみつたらしい王なんて

顔を見るのも嫌だ

「陛下・・・あなた、大変な事をしてくださいましたね・・・」

王妃は青ざめたような顔をして王に言った

「なぜだ！何がいけないのだ！」

「あの方は・・・間違はなく光の民・・・あの剣は、光の民のみ使える聖剣それを見ていなかったのですか？あなたは！」

「な・・・なんて事を・・・私は・・・光の民を・・・敵に回してしまったのか・・・」

今頃になって、自分が犯した罪を知ったのだ

まさか、このような形で会うなんて思ってもいなかっただろう
このデイスニーは、光の民に対する冒涇は国家反逆罪に匹敵するもので

ほぼ、極刑に近い

もちろん、王族であるならばその王族はすべて・・・

今の王に何言ってもきくと耳に入らないだろう

「失礼します！！」

そう言って、出て行くティニア

城門の近くまで着た私

「セレネさん！！」

城を出るとき、ティニアに呼び止められようやく振り向いた私

「ああ、ティニア。どうしたの？ごめんね。」

私、あんな事言われて黙っていられないからさ。

もちろん、シエラも同意見だよ。まあ、ここに残るなら残りなさい。止めやしないわ。あと、さっきの隣国の話しあれでまかせだから。

でも、協力はしないわ。あんな、王と協力しろなんて虫唾が走る！」
「セレネさん、少し時間をください。お願いします！」

勢い良く頭を下げるティニア
確かに、勢いで言ってしまった私も悪い・・・けど、これだけは譲れない

あんなやつのために、私の人生振り回されるなんて・・・絶対嫌だもん

「しょうがないわね・・・2日待つ。昼間は、城下町でふらふらしてるわ。夜は、ここに来る時に見つけた『エイダの宿』って所にいるから。あ、そうだ。これ渡して置くわ」

持っていた、赤いペンダント

「何か在ったら、これを割りなさい。解呪呪文で割れるわ。暗部に狙われているのだから・・・気をつけなさい。じゃ、健闘を祈ってる」

「セレネさん・・・」
ガンバって・・・

なぜか、ティニアにはその声が心の中で聞こえたような気がした

第3章03 香苗、王都に着く・・・着いたけど・・・(後書き)

SPECIAL thanks

akane様

第3章04 あなたに謝られても・・・

ティニアから別れた私はフェンリルを人間にして街を歩いていた
「うあ、かわいい」

露店商の置いてあるアクセサリーを見ながら楽しんでた

あのねえ、香苗・・・

(ん？気になるの？後ろの3人)

気づいてたの？はあ、その暢気・・・何とかならない？

(ならないよ。気になるなら任せるよ？)

まったく・・・厄介ごとは私？

(まあまあ、私そういうの苦手だし・・・)

よく言うわ、王にあんな事言ったくせに

楽しんでた開いた目を細めた

(ああ・・・あのアクセサリーほしかったのに・・・)

そう思いながら、シエラに体を託す

先ほどと違い、興味が無いようにまっすぐ露店商のとおりを歩いていく

途中の細い路地に入り、近くにあった木箱に座った

フェンリル、挟み撃ちして逃げられないようにしてね

(『御意』)

走って入ってくる男3人

驚いたように立ち止まる

『私に何か用かしら？』

一番前にいる男に聞く

あら、いい男・・・

(ちよつと・・・色目使わないで！)

「いつから気づいてた！」

気になるのだろう、完璧な尾行だと思っていたのかな

『そうね、城を出たところぐらいかしら？』

後ろにいた男たちが剣を取ろうとしたとき

前にいたリーダー格の男が静止した

「待て！お前たちがかなう相手じゃない！ここは引くぞ！」

2人は後ろを振り向くと、色黒い女性が壁にもたれかかるように立っていた

フェンリル・・・かつこよすぎだよ・・・

『あら、尾行してきた理由話してくれるまで逃げられないわよ』

「っ」

『その襟章、王都の諜報部員かしら？王が、私を消そうなんて考えたのかしらあ？と言っても一度狙われてるから2度目かしらね』
ちよつと裕福そうな高価な服装の襟元に金色の目立たないバッジがそれをあらわしていた

「ばれたからには・・・いの」

「うっ！」

「なっ！！」

後ろにいた、男2人の首筋にはフェンリルの得意とする

投げナイフが首元にかかっていた

前にいたはずのセレネは、今いたはずの場所にいない

リーダー格の背後に立っていた

『あら？何をしようとしたのかしら？これ以上、金魚の糞のよう

についてくるなら』

シエラ、お得意の殺気

『斬り捨てるわよ』

その男は、完全に固まっていた

動いたら、殺される・・・

俺たちがかなう相手じゃない・・・

そう思ったのだろう

その男たちを縫うように、大通りへ歩いていく

「フェンリル、いくよ」

「はい・・・」

投げナイフを上手に回しながら懐へしまった

「な・・・なんてやつだ・・・ま・・・まるで・・・」
魔女だ・・・と思った

その夜、珍しいお客様が私の部屋にいた
まあ、たぶんあの人だろうと思っていた

「こんばんは、ミリティ妃」

デイスニー国王妃ミリティだった

「どうさ」

『れたんですか?』と言う寸前で

「申し訳ございません!本当に・・・ごめんなさい・・・」
いきなり、謝られてしまい何がなんだかわからなくなっていた
そして、戸惑う私

「な?なに??どうしたの??そりゃ、王にはひどいことを言った
り、したりしたけど、私あなたには何もしてないわ。謝る理由なん
てないはずよ

諜報部者のも、王の差し金でしょ。貴女が謝ることじゃないわ」

「ですが!神であるあなたを夫である王が冒流しました・・・」

そのことを、消し去るつもりで貴女様に・・・それは、揺ぎ無い事
実・・・」

「そうでしたっけ?はて??なんのことやら??」

惚ける私

「この国を統する王の妃である私にも・・・王が行った罪は同じ用
に償わなければなりません」

神を冒流した王の責任は后であるミリティにも責任があると考えて
いるのだろう

「いいわよ、気にしてないし。でも、なかったことにはしたくない
しね・・・」

ううん・・・と、考える私

ポンっと手を叩いて提案する

「ねえ、ミリテイ。離婚しちゃいなさい」

香苗はとんでもないことを言う

実際に、そんな簡単に離婚ということができるのかはわからないが

「ええ!？」

いきなりの提案に驚くミリテイ

そうよ、離婚しちゃえばあんなやつどうでもいいじゃない!

「そ．．．そんなこと．．．出来ません．．．」

「なぜ?ミリテイがいないと国が成り立たないから?」

「それは．．．そうかもしれないけど．．．今の王は．．．故メリム妃が死んでから．．．変わり果ててしまいました．．．」

メリム．．．今の王位継承者である者たちを生んだ母

最後の子供であるテイニアを最後に出産の時死んでしまったらしい

「そう．．．なら、今の王を退位するよう説得しなさい。ん、テイニアが

王になるって話出てるんでしょ?ならそうなさいって。あ、もし説得できないなら私がするわ」

「だ．．．だめです!テイニアにはまだ早すぎる!」

「そうかしら．．．私テイニアの事まだ1ヶ月しかいないけど．．．いつも、国の事．．．考えていたわよ。検定が近いのに欠かさず政治や王国学は欠かさなかったから」

私は見ぬ振りしていたが、必ずその勉強はしていた

なぜだろうと思っていたが、王位に2番目に近いといわれていたからだろう

1番目の兄は．．．実は、この国にいない

というより、今の王を毛嫌いして出て行ってしまったのだ

唯一の残ったテイニアが一番王になりやすい立場だった

「そんな．．．知らなかった．．．」

うな垂れるミリテイ

義理の母なのに．．．そこまで知らなかった自分を悔やんでいるのだろう

「いいじゃない、今知ったんだから。ね。どうせ、今の王と結婚したのも

政略結婚ってやつでしょ？」

「それはっ……」

その反応……凶星か……なら話は早い

愛・恋がない結婚なんて進展しなけりゃ、ドツボにはまるだけだ

「そうね……」

「……」

「ごうしましょう。交換条件！もし、ティニアが王位になったらティニアの近衛並びに教育係になってあげる」

どうせ、何百年と生きられる人生だ。そのくらい人生のかけらぐらいにしかならないだろう……それも楽しそう……

「それは！本当なのですか！」

光の民である私がティニアの近衛になれば無敵だろう

この世に私より強い相手いないだろうから……
いれば、面白いんだけど……いるのかな？

「うん、本当。私、嘘付かないわ。でも、貴女も覚悟が必要よ？判るわね」

「はい……」

「うん、よろしい。そうね、1日しかいないつもりだったけど話が進んじたから……うん、1ヶ月いるわ。その間に決めてじゃないと、ここから出て言っちゃうから」

と、脅迫めいたような内容？を行ってしまっ私

はぁ……どんどん、セレネに毒されているような気がする……

失礼ね！勝手に毒されてるのあんたでしょ

（そうですよ……勝手に……はぁ……無意識って怖いわ……）

「判りました、早急に話を進めます……今日のご無礼申し訳ございませんでした」

「いいっていいって、結果期待してるよ。」

手を振って、送り出す私

さて・・・どうなるんだろう。

翌日、王が退位するという噂が国内に広まった

第3章04 あなたに謝られても・・・(後書き)

誤字修正しました

まりす様

ありがとうございました。

第3章05 この世界で、始めてプチキレタヨ

あれから、数日後

王位の意欲をなくした国王レスタ・ディステイーニは引退（死んだからだけど）し、ティニアが王になったもちろん、ティニアの兄も了承し、国へ帰るとの連絡も受けた

私は、その3日後に近衛及び護衛騎士として騎士師団に入ったもちろん、光の民である事を隠して

「ハッ！ヤツア！」

暇つぶしに私と、フェンリルで王城内の訓練場で手合わせをしていたキイン

フェンリルは、投げナイフを交差させ私の剣を受け止める

私・・・シエラが得意とする抜刀術。居合いを極めている彼女にとっては

遊び半分、体力練成半分といったところだろう

この世界に来てから、身体的に脅威とも言えるほどの向上しているため

めったに屁たる事はない

本気でやったら、フェンリルでさえ赤子の手をひねるようなものだろう

「セイ！」

間合いを取った私に投げナイフが飛んでくる

何事もなかったように左へ体をひねりナイフを交わす

ふう・・・

そろそろ、潮時かな

私は、間合いを開け瞳を閉じた

流れる空気、放たれる気、相手の鼓動・息継ぎすべてが耳に聞こえてくる

『・・・(さすが、主・・・隙がない・・・)』

全く隙がない彼女にどう攻撃しろ？と思うフェンリルに

(どうしたの？フェンリル立ち止まらず、進みなさい)
シエラが追い討ちをかける

そのとき、相手が動いた。放たれるナイフが風を切りながら私に襲い掛かってくる

キーン

剣からの間合いに入ったナイフは地面に叩き落とされた

彼女は全く動いていないように見えた

しかし、フェンリルは見た

最小限の剣の道筋を選択し、そして近づくナイフを落ししもとの体制に戻っただけの事・・・

フェンリルの体は、慣性の法則で動いてしまった体を制動する事が出来なかった

(『しまった!』)

(いいんだよ、それで。それを、今後に生かせば)

そう言つて、フェンリルの胸に剣の柄が突いた

カラン

持っていたナイフが手から離れる

「負けました・・・」

肩膝について負けを認めた

『 いい腕よ、もっと精進すれば私もヤバいかもしれないわね・・・』

「 お世辞はいいです・・・まだ未熟だと判りましたから」

『 そう？もつたいない・・・どうですか？団長さんも

この娘と、お手合わせしてみては？』

目を閉じ、後ろの方へ意識を向ける

「 ほう、気づいていたか・・・私も、年を取ったかな・・・」

そこから出てくる男、この騎士師団の団長だ

名は・・・確か

「 いえ、気配は完べきに消していましたが、微妙に魔力が出てまし

だから。

えーと、マチルダさん」

「マルチダだ！」

「あはは……」

「まあいい……ちよつくらやってみるか」

訓練用の剣を取り出す

「あれ？真剣じゃないんですか？」

「女性に真剣なんて、しかも試合じゃないだろ？」

ムスツとするフェンリル

こんな表情をする彼女見たの始めてかも

(フェンリル……?)

(『大丈夫です、殺しはしません』)

(オイオイ)

試合をする体制にもって行く

「いつでもいいぞ」

ビュツと斜め下に剣を構える

「……行きます」

シュツと投げナイフが飛ぶ

「クツ」

ナイフをよけるマルチダだが

「何！グハツ」

よけた先にはフェンリルが先回りをして構えていた

そして、蹴りだされた左足がマルチダの腹部を直撃する

3mほど飛び少量の吐血をする

「まだ始まって、10秒も経っていませんよ？」

「くそっ！まだだ！」

すぐに立ち上がり、間合いをつめ剣を繰り出す

フェンリルは、まるで子供と遊ぶようによけていく

しかし、表情はあのむすつとしたままだった

ふと、周りを見渡すと私の後ろの方では

王城の王員達の人だかりが出来ていた

(あちゃあ・・・)

(フェンリル、あまり目立つなよ。)

(『判りました・・・残念です、後少しで殺れたのに・・・』)

(何が残念なの〜っ！)

彼が切り上げた剣によつて、フェンリルのナイフが中を舞い

その隙を突き、剣が彼女を襲った

「くっ」

(だ、大丈夫!?)

(『受けたように見せかけただけです・・・ダメージは在りません』)

)

(はぁ?)

わざとらしく、膝を突く

周りの野次馬は、恰もその結末になると思ったのだろう

人だかりは散つていった

「どういうつもりだ・・・」

彼女は立ち上がり、無表情で言う

「目立つな、と主からの御命令ですので、失礼します」

「おい、待て。名は?」

「フェンリル、主『セレネ』様に仕えるもの」

「フェンリルか・・・覚えておく」

髪を後ろへ払い私の方へ歩み寄ってくる

「おつかれ、フェンリル」

「いえ、疲れていません」

愛そう無く言う

「怒ってる?私が止めた事」

「いえ・・・怒っていません・・・と言ったら嘘になります・・・」

正直、怒ってます・・・」

「あはは・・・ごめんね」

「いえ、止めてくださらなかつたら、きつとあの男は1ヶ月安静状

態だったでしょう」

(と・・・止めてよかった・・・)
少しほっとする

”パリーン”

ハツとする私、ティニアにプレゼントしたネックレスの宝石が・・・
割れた！？

(フェンリル！)

私が、瞬間移動魔術でティニアの場所に行こうとしたときには
フェンリルはいなかった

(『ティニアを発見、怪我をしています。至急来てください』)
そして、現場に着くとティニアの夥しい血痕が床を覆っていた

「ティニア！」

そこには、得体の知れない姿の生命体があった

(な・・・なに?!)

王様の成れの果てね・・・魔の蜜を呑んだのね・・・莫迦な事を
(魔の蜜?)

魔の蜜、魔物から得られるといわれる一種の麻薬よ、それを大
量に呑むと魔物へと変化してしまう。こうなったら、もうどうしよ
うもないわ

(まさか・・・あいつが・・・ティニアに・・・)

腕を切られ出血しているティニアに駆けつけ治療魔法を使い傷をふ
さいだ

私の奥底から、怒りがこみ上げて来る

そう、2人の怒りが

(シエラ、止めても無駄よ・・・こいつだけは・・・)

ええ、私も・・・あいつだけは・・・

【殺す！】

香苗とシエラがシンクロする

増大する魔力に封印が耐えられず

ガラスの割れたような音が、部屋の中に響いた

黒いガラスの様な物が髪から滑り落ち、そして光の粒子となって消えていく

七色に輝く髪は、無重力のように浮く

そして、黒い瞳は黄金に輝く

怒りの眼差しでモンスターに振り向く

「あなた・・・覚悟はいいね・・・と言っても、自我も無いか・・・」

「

剣を鞘から抜く

その剣は、普段と違い黄金の剣のように輝いていた

魔物は後ろへ後ろへと後づさる

恐れるように・・・目の前にいるセレネを

「元デイスニー国王レスタ・デイスティーニ・・・

あの世で、裁きを受ける！」

香苗の魔力とシエラの剣術により増大した剣筋が魔物へと向かっていく

猛烈な風と光の道筋が空間を横切る

『ぐぎやあああああああああああ』

放たれた光の道しるべは、徐々に収縮していった

光が無くなったと同時に、髪や瞳が封印される

王レスタであったモンスターの姿はそこには無かった

残されたのは放たれた魔力による縦に切られた大きな穴

そして、私達

一瞬の出来事だった

本当に

【セレネ・・・さん】

心の中で聞こえる・・・いや、耳から聞こえた

「ううん・・・寝ちゃったのか・・・ティニア！」

ティニアが気づいていた事に気づいた香苗は彼の手を握った

「だいじょうぶ？痛いところない？」

「え・・・あ、はい・・・なんとも、父は！？父はどうなりました！」

目を落としながら、真実を話した

「そうでしたか・・・父が・・・」

「ごめんね・・・私、貴方の父親・・・救えなかった・・・私の所為よ・・・私がでしゃばったまねをしたから・・・」

うつむきながら、呟いた

「いいんです、きつとこういう風になったのは判っていました」

「でも！私は、貴方の親を殺したのと同然なのよ！」

「いいんです、セレネさんが傍にいてくれれば・・・それで・・・涙を流しながら、ティニアを見る

「なんで、どうして？私がでしゃばったから、私があんな事言わなかったら

王位を失脚させるような事を言わなかったら
どうして・・・どうしてよ・・・」

「なんでよ・・・なんでそんな優しいのよ・・・私を憎んでいいのよ恨んでいいのよ」

「恨めませんよ・・・セレネさん。貴女は正しい事をしただけです僕を救ってくれました、それ以外必要在りません」

「どうしてよ・・・」

「僕、そんなセレネさん見たくありません。いつも、明るい笑ったセレネさんを見たいんです。だから、そんな顔しないでください・・・」

「
目から流れた雫を指で取った

「もう、私近衛騎士なんて・・・できない・・・」

「そんな事ありません、唯一僕の信じあえる近衛騎士であってくだ
さい

いつまでも・・・ね、お願いですから」

「うう・・・ていにあああああああ」

私は、ティニアの懷で泣き叫んだ
こんな風に泣いたの、これで2回目・・・
私って、弱い人間なの・・・そう、強くない・・・強がってるだけ
の人間

第4章01 これって？え？まさか・・・ねえ

人は、人の上になりたいと考える

強くなりたい、そんな思いが人間の心を動かす

学力をつけて人より上に立ちたいと考える者

体力をつけて人より強くなりたいと考えるもの

争いも同じ

何かの上に立ちたい・・・そんな思いが・・・人間の心を動かすの
だろう

でも・・・

でも・・・

争い以外で人間を動かすものも在る・・・

それは、人間しかもてない『優しさ』・・・そして・・・

「てぃーにあ」

いつもと変わらない、検定試験官の服装でティニアの執務室にはいる

「ああ、セレネさん。どうしたんですか？」

あの事件から、4ヶ月・・・この世界に来て半年を向かえた今
王国も大体落ち着いて着た頃だった

「ううん、ちょっと暇になったから寄っただけ」

「そうですか」

テーブルとソファが置いてあるところに座る

「なんか、王様っていう柄になってきたね」

「ちや・・・茶化さないでください」

恥ずかしそうに目をそらす仕草もかわいい
ふふと笑う、私

そんな、ティニアを見てみると何か心がホツとする
なぜだろう・・・不思議・・・
そう思っていると

「あ・・・あの、セ・・・セレネさん・・・」

何か、モジモジするティニア

「ん？なんですか？？」

「え・・・と、ですね・・・えくと・・・これ！なんですけど！」
手に持っていた何かの紙切れを渡す

「え？なに？？」

「今度のオペラ公演に、い・・・一緒にいて・・・いつてく・・・く
れませんか？」

え？！これ・・・え？まさかあ・・・

「あ・・・あの・・・これって・・・」

「一緒に来てくれませんか！」

「え・・・え~~~~っ！」

これぞ、私の初の・・・そう人生初の、男性からデートのお誘いだ
った

後日・・・

「うわあ~~~~おおきい・・・」

そこはまるで・・・神秘的な場所

すべてが真っ白、彫刻などを施して

そのとき、私たちの前に一人の男性が出迎えた

「ようこそ、我がマルアオペラへ」

どうしたものでしょう、タキシードの様な服装で私たちを出迎えた
男性

(どうして・・・こうも、この世界は美人が多いの・・・)

「こんにちは、マルア」

「いえ、ティニア閣下。お久しぶりでございます」

隣にいる私を見ると

「そちらの方は？」

「ああ、私の護衛騎士の方です」

「それはそれは・・・珍しいですね。ティニア閣下が女性の護衛を
着けるとは」

「悪いかい？」

気分を悪くしたのか、ちよつと声が怖い

「いえ、お気を悪くしたのですしたら謝罪いたします」

うあ・・・キザ・・・

「さあ、どうぞ。こちらへ」

男の人に案内された場所は本当に特等席・・・というか、まえすぎ
?!

「ねえ、なんでこんな前に座るの？後ろの方が良くない？」

「そうなんだけどね、前の方じゃないと声が聞こえないのさ」

ああ・・・なるほど・・・この世界じゃスピーカーやアンプ等の
設備もないしね・・・

ん？

昔の専門学校の頃を思い出した・・・

【みんなも知っているだろうが、ギリシャにあった公演場では王の
話を

何千人に対して話していた。だが、全員がそれを聞いていたんだ。
どうしてだと思っ？】

「そうだ・・・ねえ、ティニア。壺よ！壺！」

「へ？何いきなり、壺？」

「そう、後ろの人にも聞けるようにする方法のひとつ！

まあ、魔術を使えばいいんだろうけど、歌っている人に負担になるし直に聞きたいなら、壺！」

ティニアには私の言っている事が全く理解出来なかったらしい壺、これがキーワードになる

「えつとね、私の世界では魔術がなかったの。

だから、私たちの世界では壺をたくさん後ろの方に置いたの壺って言っても同じ大きさじゃなくてたくさん種類の壺を置くのなぜかと言うとね。共振って言う事を・・・まあ、今日はいいわ。

さっきの人に言っておいて。壺を置いたら、後ろの人も聞こえるよって」

「はあ・・・」

今は、この一時を楽しみたい

おせっかいは後後・・・

えい、とばかりにティニアの腕をつかむ

「え？」

「うふふ」

王と、近衛騎士の組み合わせはとても珍しいかもしれぬ
確かに・・・

オペラも終局になった頃

その歌声に、魅了されていた

「声・・・綺麗・・・」

「あの人は、精霊の加護を受ける者なんだ。精霊の声は心を豊かにするからね」

確かに、ずっと前魔術で精霊魔法を使った事がある

精霊、妖精とかまだ見たことないんだけど・・・

(精霊って・・・見えるの?)

ああ、見えるわよ。あの人の上の方、目に魔力を注いで見てらん

目に魔力を？

少し目に魔力を注いだ。黒い瞳が少しだけ金色になる

「あっ」

彼女の上には、水色の美しい衣を纏った女性が一緒に歌っていた

(あの子が・・・精霊・・・)

水の精霊らしいな。

その姿に見とれる私

綺麗・・・

と、何か舞台の上の方で光った・・・

魔力を注いだ瞳は、視力までも上げていた

何かいる・・・黒い・・・服を着た・・・

「なっ！ナイフ！！」

すぐに、マントに仕込んであったナイフを取り出す

相手も、狙いをつけていた

狙いは・・・！彼女！？

「テイニア、彼女、狙われてる！」

「何だつて?! 本当か！」

「やばいよ・・・ナイフで狙い定めてる・・・あまり、大事にした

くないから・・・とりあえず、ナイフを弾き飛ばすね」

そう言つて、ナイフに魔力を注ぐ

【風の恵みよ、立ち塞がる風を立ち去れ、この物に風の恵みが在らんことを】

ナイフに白い輝きが放たれる

(投げた！)

私も、タイミングを合わせてナイフを投げる

シュー

弾く音は、彼女の歌声に寄ってかき消される

失敗した事に気づくと壇上に乱入してきた

「歌姫！覚悟！」

女性の声

切り裂くはずの剣は何かに止められる

『ふうん、私が楽しく歌を聴いていたのに……邪魔してくれたのあんた?』

彼女を庇うように立ち塞がる黒い服の女性

「せ・・セレネ!」

さつきまで左の席に座っていたはずなのに……

左を見るとそこには誰も座っていなかった

「何者!」

『何者でも何でもいいでしょ!まったく……デートが台無しよ!この落とし前……どう埋めてくれるの?』

「私のナイフを落としたのはお前か?」

『あら、だったらどうするの?私も殺す?それとも』

長い髪を後ろへ払い、腕を組む

「逃げる?」

フフと、笑う姿はなんともいい用のない不敵な笑みだった

「くそおっつ」

振り払う、細身の剣

「な……何!」

『あら、遅いわよ。それでも、この子を殺す予定だったの?』

私は、その剣を恰も簡単につかみ取った

「ん?私が逃がすとも思った?」

はっと、気づき回りを見渡す彼女

先ほど、私が結界を張ったのだ

もう袋のねずみ

『貴女が、誰に雇われたか知らないけど……いい事教えて上げる・

……』

彼女の顔へ近づくと私

『その雇われ主と、契約破棄しちやいなさい。なんなら、私が契約してあげる』

「な……なにをっ!」

「ん〜、だつて、貴女腕いいもの、殺しちゃうなんてもつたいない」
もちろん、殺すことなんてしないけど。脅し文句ってやつかな

「そ・・・そんな事！勝手に決めるな！」

『いいじゃない、うちに来なさいよ。その、ティニア閣下の近衛騎士やつてるものだから。貴女名前は？私はセレネ、よろしくね』

「メ・・・メリアだ・・・」

『そう、メリアちゃん。来てくれる前提で話すけど。もしも、雇い主に

殺されそうになったら、この

ポケットに入っていたひとつの赤石を取り出す

ティニアに上げた例の石だ

『石を割りなさい。貴女の魔力を注げば割れるようにして在るから
そうすれば、私たち、近衛騎士がどつと押し寄せて、捕まえるから
もちろん。貴女は私の雇い主になるわけだから。免罪してあげるわ
どう？いい取引でしょ？』

「それを・・・信じると？」

「信じる信じないは、貴方の勝手。任せるわ」

さっきの石を彼女に投げ渡す

『じゃ、結界をとくからすぐに出て行ってね』

「お・・・お前はいつたい・・・」

そういう暇もなく、結界が消える

「セレネ!？」

「なんですか？ティニア」

「え?・・・あれ?」

「ん?どうしたんですか??」

「いや・・・さっき上で・・・」

「ん?」

とぼける私に気づかないティニア

(さーて・・・あの子どもなるかな)

腕は、確かだ。フェンリルに妹が出来るからいいんじゃないか

(『妹・・・ですか?』)

(そ、妹)

とりあえず、フェンリルあの子を尾行しなさい

(『ぎ・・・御意・・・』)

その後、あまりティニアとの進展もなかった私たち

また行こうか、と誘われ。はい と答える私

こんなハプニングがなかったら、いい雰囲気だったのにー

と、地団駄を踏む私だった・・・

「キタツ！」

その日の夜、彼女に渡した石が割れた・・・

第4章02 大丈夫、彼女強いから

(どう、フェンリル)

(『まったく問題ありません』)

(そう、やばくなったらすぐに呼ぶのよ)

(『御意』)

エントランスへ出ると、飛行術を展開し飛び上がる

割れた石から魔力をトレースし、目的地へと着地する

「フェンリル、状況は？」

「まったく持つて問題ありません」

ぐったり倒れているメリルを見ると後ろ手で縛られている

首には封魔拘束具が取り付けられていた

(苦しかっただろうに・・・)

古代技術を使った封魔用の拘束具は普通の人には、特別な工具が無い限り解呪できない代物だが

私にとっては、まったく問題ないものだった

それに、手をかざすと鍵が開くような音と共に地面へと落ちた

魔力の消耗が激しいわね・・・香苗

(うん・・・)

彼女の額へ手をかざし魔力を注ぐ

注いだ魔力のせいなのか、彼女の体が輝く

「うっ・・・」

やさしく包み込むような感覚に浸る彼女

「フェンリル様・・・」

なぜ、フェンリルを呼んだのかが私には解らないが・・・

「がんばったね、ゆっくり休みなさい」

と、優しく頭をなでる

心が休まる声に反応して体の力が抜けていく

そして、可愛い寝息を立て寝てしまった

(これで大丈夫)

「さて・・・と」

後ろで未だに戦っているフェンリルに湯を入れた

「ちよつと、フェンリル！いつまでやってるの！帰るわよ！」

汗ひとつたらさずに、打ち合いをしている

「奴等お灸を添えておきますので、お先にお帰りください」

「殺しちゃだめよ」

「御意」

はあ、あきれた顔をしてメリルを抱きかかえ移転魔法で王城へと帰った

翌日

メリルがおきた雰囲気を感じた私は、寝かせていた私の部屋へと入った

「起きた？朝ごはん食べられる？」

「・・・ここは・・・」

「デイスニー城よ。ここは私の部屋」

彼女が寝るベッドへ腰をかけた

「ごめんね、私の魔力分け与えたらあなたの封印解けちゃったみたいな」

バツと頭を抱えた

私は、その手をやさしく下ろすように撫で下ろす

赤く燃えるように輝く髪を撫でると火の粉のように赤い粒子が散らばる

「何故・・・」

「燃えないかって？そりゃー私の部屋ですもの」

優しく撫でる

普通の人なら、手も燃え尽きるほどの熱だろう

だが、熱さもまったくくないように彼女の髪を撫でている

「あなたは・・・いつたい・・・」

「私も封印してるの」

私は一本髪の毛を抜き彼女の前に見せる

「よーく、見てるのよ」

その長い髪を左手で持ち、右手を撫でるように滑らせていく

「そ．．．そんな．．．まさか．．．」

七色に輝く1本の髪があつた

「光．．．の民．．．」

「そう、あなたが火の精霊の器を持っていることも．．．」

この娘にある魔力の器が人間の者ではなかった

彼女に魔力を与えているときに気づいたのだが

「．．．．」

「理由が何であれ、あなたはあなたなんだから。その器が誰であれあなたということは変わらないのよ」

優しく彼女の髪を撫でる

押し黙っていた彼女が語りだした

「私は、体が弱かつたんです。余命が無いことも感じていました

彼女．．．デインスは私に尽くしてくれました。私のためなら何でも

そして、私は言つたんです。あなたの願いを言つて見なさい。と．．

．．

白い手をぎゅつと握る

「彼女は言いました。『あなたと共に生きて行きたい』と．．．

その時、壊れかけていた魔の器を彼女が．．．彼女が！」

彼女は叫んだ

「私はそんなこと望んでなかった！彼女と一緒に．．．ずっと一緒に．．．」

目をつぶり、涙を流していた

「私の器と対等になったときには、魔力を使い果たし．．．消滅しました．．．その時の副作用で、髪は赤く燃え盛る炎のようになり．

．．

村を燃やしてしまいました．．．私はそこから、逃げ出し．．．あ

る組織に入りました。そこで、自分は魔術を独学で学び・・・この髪を、封印したんです・・・」

「そう、でもあなたは分かっているはずよ。あなたの中に、その子がいることを・・・感じてるはずよ貴女は。どうしたいの？彼女の思いを・・・貴女は、答えを出しているでも、実行に移せないだけ行動に移せないだけ彼女の思いを・・・無にしちゃだめ」

私は立ち上がり

「よく考えなさい。人間は考えることが出来る。貴女は、精霊にとっても近くても人間なんだから。」

扉まで歩き

「お昼にまた来るわ」

そう言つて部屋を出た

壁に寄りかかりため息をつく

(酷い事・・・言っちゃったかな・・・)

いいえ・・・そんなことないわ。後はあの子しだいよ。大丈夫あの子なら乗り越えられるわ

(そうだね・・・あの子強いし)

フェンリルが彼女の部屋に入った

救おうとする彼女の強い意志が私まで伝わってくる

後は頼んだよ

第4章03 はいはい！あなた！事情聴取しますよ？

「お、がんばってるなあ〜」

訓練場にいる騎士団長

なんだか真剣なまなざしでやっている

（結構、プライド傷ついたのかな）

かもね。

「ん？・・・」

どうしたの？

瞳を閉じ、集中する・・・

城内に・・・2・・・いや3人・・・誰だろう・・・

この城壁には、私が作った魔術で結界を張っている

といつても、動物などのため絶対入れないようにしたわけじゃない
いわゆる、警報装置の様なものだ

「・・・招かれざる客ってやつがきたみたい」

えーめんどくさい

「ん〜、まかせた」

笑いながら言う

もー人使い荒いんだから

「えへへ、私の魔力使って良いから」

え？

もう一度瞳を閉じると、白い吹雪が彼女の周りを包んだ

周りからは彼女の姿は見えない

その風がやむと、先ほどの香苗ではなかった

青いチャイナドレスに身を纏った女性

ほっそりと長くなった脚に、くびれた腹、そして

香苗より大きい胸、容姿も20代後半ぐらいの大人の色気が増して
いた

『なにこれ？』

近く似合った、磨かれた水晶の柱で自分の姿を見た

『これ・・・私・・・』

(うわー綺麗・・・負けた気分・・・香苗ショック！)

『これどういうこと?!』

(きっと、魔力の所為だと思うよ。私の魔力を与えた所為で

その魔力が、体にまわりついて実体化した? ってことなのかな
推測だけだね)

『そう・・・ふふ、自分の体なら思う存分楽しめそうね・・・』

(危ない事しないでよ・・・あくまでも、私の体なんだから)

『大丈夫、安心して頂戴』

そう言うと、彼女はそこから消えた

『その人ゝなにしてんの』

城の裏側から進入して来ていた、3人組を呼び止めた

驚いた仕草をしたが、その中の1人が襲いかかってきた

速い!

今までなら、よけ切れずに切り傷を負っていただろうが

魔力のおかげで、自分の理想的体系になっていたため、そのような
事にならずに、すんなりとよける

『うわ、何!驚いたじゃない!』

『貴様・・・俺の一撃をよけるとは・・・何者だ!』

剣をまた、構えなおす姿を見ながら

『「何者だ!」じゃないわよ!全く・・・いきなり切りつけてきて』

「手前、城のもんだな!メリアはどこにいる!」

(え?メリアの知り合いなの?)

『あんだ、メリアの知り合い?』

「知り合いも何も!・・・お前に知る権利はない!」

『あつそ・・・なら・・・』

ニヤッと笑い、脇に携えてある長剣ではなく、腰にある短剣を抜いた
そして、刃元をペロリと舐める

(わわわ！なにしてるのよ！！)
意外な行動をした事に戸惑う香苗

うふふふ・・・

『私を楽しませてくれるの？嬉しいわ・・・』

その表情はまるで、悪魔・・・魔女・・・いや、魔国の王女・・・
彼女から溢れ出る魔力と圧倒的な気迫・殺気に、その者たちは凍り
ついた

まるで勝てる気がしない・・・

(ああ～これ私じゃない！絶対違う！！あ・・・でも、姿違うか
らいいか・・・)

香苗は考えを変える事で正当化した

「引け！分が悪い！！」

彼女は驚いた顔をするが、すぐにニタリとする

【あの者を囲え】

元々シエラは精霊の女王と言われたぐらい
精霊魔法を操る事が出来る

一言で精霊たちが動く

カキーン

円状に囲われた精霊結界に足止めされる

『敵前逃亡って・・・死刑なの知ってる？』

彼女はその者達に歩み寄る

不敵な笑みを浮かべて

結界の壁に退路をふさがれた事にあせっていた

刹那

「やめて！！その人殺さないで！！！！」

後ろから叫ぶ女性の声が聞こえる

『え？メリア？』

「メリア！！」

「誰かは、判りませんが・・・その人達は、私の家族なんです・・・
だから殺さないでください！！もう・・・迷惑なんてかけたくない・

・・・」

(そつか・・・もしかして・・・)

なによう)

『私の早とちりじゃない！はぁ・・・楽しくなると思ったのに』

(はいはい、また今度ね)

そう呟いて、短剣を納めつつ指を鳴らすと

結界が解ける

その時、先ほどの女性ではなく

黒い試験官用の服を着た香苗が立っていた

「事情・・・説明してくれるわよね」

第4章05 なんなら、あんた養子になりなさい！

「ふうん、事情は分かったわ。要請された者を暗殺しに行こうと思ったら

村が焼け焦げていて、この子だけが居た。ということね」

「そっだ！」

メリアを見て

「で、メリアはどうしたい？まだ暗殺の仕事続けたい？」

「そ・・・それは・・・」

言葉に詰まる

「メリアは俺らの仲間だ！余計な事言うな！」

『あんたは黙ってなっ！これは、メリアが決める事なんだ！』

ものすごい剣幕で言うシエラ

「クツ・・・」

その時、メリアが呟いた

「私は・・・私は・・・もう、人を殺したくない・・・」

「お・・・俺たちを裏切るのか！」

その言葉に、シエラは切れた

『裏切る？莫迦言ってるんじゃないよ！メリアは自分で進む道を歩

みだしたんだ！快く承諾するもんだらう！この餓鬼が！』

「餓鬼だと！」

「やめてください！」

メリアの声に、口論をやめる2人

「私は決めたんです！もう、人殺しなんて・・・したくない！

人の役に立っていたと思っていたのに何でこんなつらい事しないと

いけないの・・・もう、嫌なの！！」

その瞳は、とても強くゆるがせない決意のあるものだった

「クソッ！勝手にしやがれ！」

3人の内2人が居なくなる

だが、年配の男だけが居た

「メリア・・・強くなったな・・・迷惑だろうが・・・メリアを頼みます」

そう言つて、居なくなつた

「・・・」

沈黙が流れる・・・

・・・香苗・・・私のわがまま・・・聞いてもらつていい？

とても寂しそうないい方をするシエラを私は知らない・・・

始めて聞く・・・

香苗は否定することもなく、体を預けた

(え？うん・・・)

香苗の体が光、シエラの姿になると

『ねえ、メリア・・・私の養子になりなさい』

(え？・・・え？・・・でも、それもいいか・・・)

首を振り、拒否する

「それは・・・でも、貴女様に・・・迷惑が・・・」

『そんなことないわ、私も娘がほしかったから』

女神の様な笑みを与える

「え？・・・いいんですか？」

『いいわよ。でも、ひとつだけいいかな？』

「はい・・・」

『私の事・・・お母さんって呼んでほしいの』

「あ・・・はい・・・」

また輝くと、元の姿になると

「私は、お姉さんって呼んでね」

「はい・・・え・・・お姉さん・・・」

「うん。」

こうして、家族が増えた香苗一同

シエラ・フェンリル・メリアと

この者たちが、今後起こす騒動は・・・

作者も知らない・・・（何！

あとがき

はあくい、作者のMISSYです

第4章ご覧になってどうでしたでしょうか？

いろいろと、誤字脱字も多い小説ですので

ご指導お願いいたします。

えくと、カウントが1日約50カウント行っております

約50人の方が見てくださっているのですかね？・・・うん

分かりません！（あはは

今後、シエラ・フェンリル・メリアが主になっていきます

え？ティニアはどうした？って？

あの人は、王になっていろいろ忙しいらしく、手が離せないと言っ
事で

・・・

まあ〜気にしないでください！

ティニア：おい待て！俺の出番がないって事か！？

休暇上げたんだから、いいでしょ！ シッシツ（><）ノ

とまあ、そんなわけでまた続きます！

余談

シエラ・フェンリル・メリアは、ほとんど年はとりません

シエラは、時を止められているため

フェンリルは、聖獣

メリアは、魔力の器が精霊の物なので精霊+人間の貴重なハーフ（この人しかいません）一人です（なので年は食いません）

ちなみに、精霊が憑いた時も年を取るのが遅くなると言われています

第5章 01 異世界の車窓から?!

数日前のこと・・・

「え？それ、本気？」

「ああ、とりあえず初回視察のためこの国にある街を回ってみようと思うんだ。しかし、これほど大きい国を回るとなると何年とかかっってしまう」

最低でも、2年・・・いや3年かもしれない。だから・・・」

「手分けして視察しろと？私が？」

「そう、お願いできるかな？」

「いいけど・・・大丈夫？」

心配そうに言う香苗

確かに、一度襲われている

まだ、旧王派の根深さはまだまだある

「大丈夫、香苗さんからもらったこれが在るから」

左腕を出すと、そこには金色に光ったブレスレットがあった
何を言おう、これぞ私が作った緊急脱出用転送ブレスレット
『逃げます1号』・・・

ごめん、調子に乗りすぎた・・・まあ、古代ヒステリア魔術を使った
新しい魔道具の一つ、ブレスレットにある赤い宝石の様なものを
強く押し込むと私の目の前にポーンツと転送される仕組みなのだ！

ちなみに1回限り・・・もちろん、妨害や結界などの障害も
まったくいみなさないから、本当にやばいときに以外使わないように
と強く言っている

それともう一つの、機能として生命維持装置もかねている

絶体絶命と判断（自己判断機能）によって、自動的に転送される

「そう・・・ならいいんだけど、気をつけてね」

「ありがとう、君もね・・・近衛士セレネアキータ

本日より1年間、国内視察を命じる

なお、1年過ぎる場合は何かしらの知らせを王国まで伝えるように」

「仰せのままに」

回想終了

と言っわけで、ティニアと私は別行動で視察中なのだ

そして、今商業の街アルティナにいる

いろいろ売っている街並みを歩いていたら

「なにやってんだ！つかえないやつだな！！」

ドンツと勢いよく突き飛ばされる少女の姿があった

「」

見て見ぬ振りも出来ず、すぐに彼女に駆け寄った

「大丈夫？」

抱き起こし、突き飛ばした男をにらみつけた

「彼女痛がつてるじゃない！もつと、少しは丁寧に扱いなさいよ！」

男は、それでも怯まず脚で彼女に砂をかける

「なんだ？お前！俺の物にいちやもんつけんな！」

人を・・・物だとお！！！！

「・・・てめえ・・・さつきの言葉、訂正しろ・・・」

香苗は、低くドスの効いた声を男に放った

ここまで、香苗が怒る姿をフェンリルもメリアも、同居しているシ

エラも

見た事がなかった

(こいつ・・・ゆるさねえ)

完全に男言葉になっている香苗

自衛隊の頃はこんな感じだったなあ・・・

(あ！猫かぶってたのばれたかも！)

その時、私の脚にしがみつく者がいた

「え？・・・」

涙ぐみながら何かを訴えていた

しかし、声が聞こえない・・・

だが、私は彼女の額に手を置いた

(＜助けてください＞)

心の声を聞き・・・

「はっ！そんな不良品捨てちまおうと思ってたんだ！気に入ったん

なら、お前にやるよ！」

はっはっは

と笑う男に

香苗は・・・

プチッ

刹那

香苗は長剣で男の首元を目指して切り捨てる

シエラの知識を借りて居合いの剣を使った

普通の人なら、気づいたら首が吹っ飛んでいたという状態になっていただろう

しかし、男の首元でとまる・・・いや、ほんの少し切れていた

(・・・シエラ・・・止めないで・・・こいつ、ゆるさねえ)

人間を何だと思ってんだ！人権を尊重しやがれこのやろう！(怒)

だめ！冷静になつて！

ほんのコンマ何秒シエラが止めなければ、奴の首はきつと地面にキ

スをしていただろう

未だに、ものすごい殺気を放つ彼女は

「消える・・・この街からな・・・もし、見かけたら命はないと思え」

尻餅をついた男は、叫びながらそこから去って行った

（ゆるさない・・・こんなことする奴は・・・私が、壊滅してやる・・・）

私も手伝うわ、でも、無駄な殺生はさせないからね・・・

（私もかっとなったのがいけないから・・・まだまだね・・・私もその前に・・・）

女の子を抱き起こし、彼女の目を見た

目が虚ろだ・・・しかも、魔術の感じがする・・・呪い？

とても何か違和感を感じる・・・

これは・・・もしかすると・・・

女のこの額に手をかざす

「【束縛するものよ、我に姿を現せ エクスプレイション（表示）

」

そうすると、彼女の額に赤く輝く紋章が現れた

これは・・・隷属の紋章・・・呪縛だったのね・・・

「【呪縛するものよ、我、香苗の名の元に縛を開放せん、自由と祝福を与えたまえ フリー（解き放す）】」

パキーン

赤い紋章が崩れ落ち粒子になって消えてしまった

「これでいいわ。立てる？」

「はい・・・あーじ・・・自由に言葉が・・・しゃべれる・・・」

少女が信じられないような顔と嬉しさで泣いていた

そうすると、フェンリルが近寄ってくる

「おぬし、人売買組織にさらわれたのか？」

フェンリルが女の子に訊くと、頷く

「私の、父母は・・・盗賊に殺されて、私はそのまま連れて行かれ

たんです

その時、額に何か押し当てられて・・・そうしたら、何か何も考えられなくなつて・・・」

「そう・・・隷属の印・・・まだあつたのね・・・古代魔道具の一つ・・・」

数は少ないはずだけど・・・タブーとされている魔道具の一つ・・・

「

「でも、私の唯一の・・・母の形見を売ろうとしたとき・・・必死に抵抗して・・・そうしたら・・・」

（え？隷属の印を・・・跳ね除けたの？）

隷属の印を押されたら、ほとんどの人はその印によつて考える事も間にならず、命令に忠実な奴隷と化す

どうしたの？香苗？

（もしかすると・・・この子・・・）

「私、セレネアキータ、あの子は、フェンリル、その隣が私の義妹のメリアアキータ・・・貴女は、名前なんて言うの？」

「セリス・・・セリス・フローティア・・・」

（ふ・・・フローティア?! フローティアって・・・あの・・・）

だからどうしたのよ!!

（書物で呼んだ事があるわ。フローティア家、代々精霊魔術の中の聖について権威を持つていた伝説の聖精霊術士・・・私たち光の民と並ぶかもしれない・・・力を持った一家よ・・・数年前から消息が途絶えたと聞いているわ）

「貴女がよければ、私の下で働かない？そう、私の下で神官をしない？」

驚いたのは、香苗以外のすべてだった

「え！でも・・・私何も役に立たないし・・・」

「いえ、そんなことないわ、貴女は大きな大きな宝石の塊」

手でジェスチャーをする香苗

「でも、まだ原石・・・それを加工して磨いて行けば、輝く宝石に

なるの。

どう？私こう見えても、デイスニー国王近衛士なのよ。後ろにいる2人もね」

「でも、私の様な者が・・・神官なんて・・・」
きつと、奴隷扱いされていた者が神官なんて務まらない汚らしい事もいろいろした者が神官なんて

そんな風に思っているんだらうと察しがついた
「大丈夫、貴方の過去なんて問う人なんていないわ。
もし、居たら私が罰しちゃうから！ね。安心して」

「本当に・・・私が神官なんてしていいんでしょうか・・・」
興味を持ったのだらう、そんな問い方をするんだから
もう一押し！

「私が保証するわ！世界一の大魔道士兼大剣術士がいうんですから」
手を取り、光の民である由縁の微笑む姿を見せ

「ね、一緒に行こう」
「う・・・うん・・・お願いします・・・」

（よし決定！やった！聖属性苦手だったのよ。そうなれば・・・）
「ねえ、その・・・お母様の形見かしてくれる？少しでいいんだ。
ね」

「うん・・・なにをするの？」
「貴女に、パートナーをつけてあげる」
「ぱーとな？」

そっか、ここは英語とか無いんだっけね・・・
苦笑しつつ、そのペンダントを受け取り、瞳を閉じ集中する

「【我、聖精霊を召還す、汝この物に宿り、主”セリス・フロート
イア”を加護すべく、この者に祝福を与えたまえ】」
ポーっと白い光がペンダントから輝きだした

そうすると、白い白衣姿の可愛い銀髪の少女が現れた

”我、召還され目覚めた、我を呼んだのはお前・・・か？！”
目を丸くし、驚く顔が可笑しい

かつこよく出て来たのに台無しだね。と思わず思ってしまう香苗とシエラ

”シエラ様！シエラ様ですよね！！どうしましょ！もしかして、世界の終わり？おしまいですかあああ！！！”

『あんだね・・・久しぶりにあってそれかい？まったく・・・もうちょっと落ち着いたらどうだ？』

”でも、光の民が着たって事は、また魔王復活？”

それについては！私が！！という風に説明をする香苗

”そうなのですか・・・それは、ご不運でしたね・・・で、私は何をすれば？”

「この子なんだけど、貴女が教育係兼護衛として雇いたいの。というより

やってほしい・・・どう？やってくれる？」

”それは・・・この子・・・もしかして・・・”

「セリス・・・セリスフローティア・・・フローティア一家の一人娘だとおもうわ」

”セリス？！・・・分かりました、お受けいたします・・・”

(セリスの事知ってそうない方ね・・・)

「よろしくね」

目を開け、そのペンダントを返した

「それ、掛けて。そうすれば、貴女の相棒が目を覚ますわ」

「あ・・・はあ・・・え？だれ！うわあ！」

掛けた瞬間の驚きの顔がやっぱり面白い・・・

クククと笑ってしまう

ちよっと、どういう雰囲気が見たくなった

”主よよろしく・・・名前を決めてほしいのですが・・・”

「え？私が？ど・・・どうしよう・・・」

そこに私が、助け舟を出す

「心に決めた人の名前でもいいのよ」

「そ・・・そうですか・・・ティーネ・・・」

” ティーネですね．．． ティーネ．．． 貴方のお母さんお名前ですね．．． ”

「え？何で知ってるの？」

” 秘密です。ウツン！我の名を『ティーネ』とし、セリスフロートイアと契約す！”

セリスの体が薄らと白く輝いた

「これでよし．．．後は．．．」

立ち上がり、メリアを見る

「この子．．．2・3日、面倒見てくれる？ちょっと、やる事が在るから

その間、帰ってこれないかもしれない．．．だから、お願いできる？」

その顔は真剣そのものだった

きつと、セレネさんは．．．

「分かりました．．．でも！無茶だけはしないでください！」

「分かってるよ！何かあったら、剣を使いなさい」

そして、フェンリルを見る

（行くよ．．．）

無言で頷く

そして、街中へと居なくなった

「セレネおねーちゃん達．．．どこいったの？」

「．．．患者退治．．．」

つづく

あとがき

始まりました！第五章！

第一回目の旅！のはじまりですっ！

さて、今回出て来た奴隷・・・この国では、奴隷制度を廃止すると法律で定められているのですが、古代ではそれが当たり前前にされていたようです

さて・・・どうなるのでしょうか！作者も分かりません！この展開！！

え？だめじゃんって？？

いいんですよ！私の頭の中で物語が進んでいるのですから！

ティーネ：ねえ・・・私の出番ここで終わり？

作者：まだ、後で出した上げるからね〜まってね〜

メリア：わたしもおいていかれたーッ

セリス：わたしもー

作者：大丈夫、番外編に入れて上げるからねー

全員（作者以外）：わーい！

まずい事を言ってしまったと・・・後で後悔する作者だった・・・

第5章02 悪徳組織壊滅作戦(オペレーション)『可愛い乙女には刺がある作戦』

タイトル長くてすみません・・・

一人では絶対に歩かない細い路地裏に一人の少女が歩いていた
その姿は、とても愛らしく金髪で緑色の瞳10歳程度の少女だった

「かわいいじゃねえか、これなら高く売れるな」

その少女の歩く先をふさぐ男たち

「ど・・・どなたですか・・・」

その声は、とても怯えていた

いきなり、腕をつかまれ羽交い絞めにされると

「きゃあつむぐぐ」

口元を押さえられ、もう一人の男に何か額に押されると

彼女はぐったりとしてしまった

それを見て、男たちは笑いながら連れて行く

しかし、ぐったりしていた少女に不敵な笑みを浮かべていたが

誰も気づかないでいた

「入れ！」

隷属の印を押された少女はボーとした雰囲気ですらふらふらと部屋に入
っていく

カチャリと鍵が掛けられる

それを、ゆっくりその方向へと振り向く

視点がはつきりしない瞳が一気に光が戻ると同時に

額から赤い隷属の印が出たと思った瞬間スウと消えていった

(フェンリル、侵入成功・・・被害者は、10数名殆どが10代前
半)

その少女は、香苗だった

身体変化の術を使い、体の体格年齢を下げたのだ
もちろん、髪の色や瞳の色も変えて

（『分かりました、そちらの位置も確認。取締り騎士団も後数時間で到着予定です・・・どうしますか？』）

（まだ踏み込むには早い、証拠を集める・・・もう少し泳がせよう・・・）

そこに居た者達の隷属の印を消した

「捜査に協力してくれるかな？」

10数名に私の階級や立場、今の状況を簡単に話した

「どうすればいいんですか？」

「あまりしたくはないんだけど、隷属の印をまた貴方たちにつける・・・

ああ、安心して貴方たちの場所や位置は分かるようにして

売られて、数日したら私の騎士団が救出するから

もちろん、考える事や拒否することが出来るようにするけど

基本的には、主人には忠実になる・・・

いわゆる、召使になるだけ・・・どう？

もし、嫌なら今すぐでもここから出して上げる」

10数人が皆周りを見渡す

その時、中の一人が言った

「私は信じます・・・こんな奴ら、刑務所に一生入れられればいいんです！手伝わせて下さい！」

そうして、全員が協力してもらえるようになり

私的には、嫌だったがもう一度仮の隷属の印を彼女たちに施した

先ほどとは違い、目の色は少しだけ光があった

「よし・・・安心して、約束は守るから」

（フェンリル、この子たちに位置を知らせる魔術を施したから誰かに売られ次第、買った者と少女たちを保護して）

（『解りました、あの・・・セレネ様・・・』）

（ん？）

(『お気をつけて・・・』)
(ありがとう)

数時間後

鍵が開く音がする

(フェンリル！来た！用意はいい？)

(『いつでも、先ほど買い取られた少女3名は、保護しました』)

(ありがとう！)

すぐに、術に掛かったような表情を装う

「おい、その金髪・・・でろ」

よそよそと、歩きながら男について行く

どこかの応接室だろうか、そこには髪の毛のない片メガネをした

男と、金持ちの様な男・・・

「どうでしょ、この者は？」

「ううん、悪くない・・・本当に、忠実な僕になるのだろうか」

「間違い在りません、古代遺跡から発掘したこの、隷属印を

使えば、誰でも忠実に指示に従います。ケヘケヘケヘ」

「そうか・・・わかった・・・そのものを買おう。いくらだ？」

「そうですね〜い」

と、その時言葉を遮るようにその少女が言った

「ごめんなさい・・・私非売品なの」

驚いたような顔をする2人

「な・・・どういうことだ！バスカ！」

「そ・・・そんなはずは・・・おい！命令に従え！お前は私の奴隷だぞ！」

その目には、先ほどと違い強い光がともっていた

「ごめんあそばせ・・・そんな、金にものを言わせて、すべては金で動くような馬鹿な発想をしている男の所なんて行きたくも在りませんわ」

そして、毛のない男の方に剥いて

「あんたみたいに、ツルツルの禿頭の言いなりになんてなりたくもない！」

そもそも、奴隷の取り扱いは法律で禁じられているし」

スカートの下から、一冊の手帳を取り出した

「ここにある、裏帳簿を参考にしてあんたらの組織を壊滅した上げるから

覚悟してね」

ちよつと可愛らしくウインクしてみた

(ああ〜はずかしっ！)

「な・・・なんだあ?!」

(フェンリル!今よ!)

と、その時爆音が響いた

「何が起きた?!」

駆出して入ってくる兵士が叫んだ

「取締り騎士団です!早くお逃げください!」

「くそっ!」

逃げ出そうとしたとき、私が行き先を止めた

「どけ!貴様にもう用はない!」

「申し訳ないんだけど・・・私はあるのよ・・・」

そうすると、少女の周りに空気の壁が出来き彼女の姿が見えなくなつた

徐々にその風がなくなつてくると、そこには

近衛騎士の軽装備をしたシエラの姿があつた

『あんたには、デイスニー王国法に基づき、罰を受けてもらいますわ!』

その姿を見て、啞然としていた

今まで、少女だったはずの者が急に近衛騎士になっていたのだから驚きは計り知れない

「お・・・お前たち!こいつらを相手してやれ!」

「し・・・しかし!近衛騎士です!王国の反逆罪になってしまいま

す！」

「しるか！やれつと言ったらやるんだ！」

怒鳴りつけられた兵士らは慌しくシエラに向かって剣をおろしたしかし、彼女は剣を使わなかった

身動きもせず、そのまま親指と人差し指で剣をつかみ取った

『あんたら・・・そんなんで、私に挑む気？』

「ば・・・ばけものだあ！！！」

ドサドサと、逃げ出す兵士たち

「く・・・くそ！アンペール！居るか！」

禿頭が呼ぶと隣のドアから一人の男が出てきた

「お前の腕ならそいつといい勝負が出来るだろう？やってくれ」

「ああ、解った」

その瞬間、いきなり目の前にその男が間合いに入ってきた

「なっ！」

油断していたシエラは、剣を抜き胴に向かってきた剣を防いだ

こいつ・・・少しはやるな・・・フェンリル！主催が逃げた！

後は頼む！こっちは、ちよつと野暮用が出来た！

(『了解』)

(シエラ？力貸そうか？)

冗談！

一気に詰め寄り、シエラは自分自身に魔力をためた

”キーン”

アンペールが受け止めた剣が真つ二つに切れてしまった

「なっ！俺の剣が！」

『剣術はまあまあだな、ボルダ流か？』

驚いた顔しつつ

「おまえ、ボルダ師匠を知ってるのか？！」

そのままアンペールに剣を向けているシエラに聞いた

『ああ、知ってるも何も私が教えたのだから・・・まあ、いいあいつは元気か？』

「いや……3年前病で倒れそのまま……」

『そうか……いい奴を、失ったな……まだ、私とやるのか?』

「いや……俺の負けだ……一応雇い主には、逃げて貰ったがな」

フエンリル、男は捕まえたか?

(『抜かり在りません』)

解った

『そう思うか?先ほど、奴は捕まえた。どうするお前は?雇われただけだろ?』

「ふっ、俺はお前に負けたんだ……煮るなり焼くなりしてくれ……」

『そうだな……こういうのはどうだ?ボルダには、いろいろと世話になってな。いや、世話をしてやったのか?まあいい、その仮を弟子であるお前にかえそう……』

「なんだ?この事はなかったことにすると言うのか?」

『不満か?』

「いや……いい……甘んじて受けよう……まだ、俺にはしないといけないことがあるんでね……」

剣を暖炉の方へ向けた

『そこに非常用の出口があるはずだ、押すと入り口が出来るそこから、ここを出るがいい……じゃーな、精進しろよ』

そう言つて、部屋から出て行った

こうして、事件は解決へと向かった

裏帳簿の情報で隷属の印を押された少女たちは皆保護されたが、中には本当の恋に発展してしまった件もありまだそのまま、居続けたいと言う人達も多々あった

結局、無理やり隷属にされた人達の中での自分の意見で

拒否した者に対しては、罰則を

それでない人には、とりあえず調査し脅されていないのかを判断した上で帰すことになった

「よかったですね。事件解決して」

メリアが歩きながら言った

それに反応したのが、香苗

「うん・・・なんか複雑な気分だけどね・・・まあ、いいかな」

「そうですね」

嬉しそうに言うセリス

「どうしたの？セリス？何か楽しそうだけど？良い事あった？」

「ひ・み・つ・です。あはっ」

「なによお！言いなさいよっ！」

「いやですうっつ・・・あ！セレネお姉様！逃げます！」

いきなりダツシユするセリスを追いかける

「どうしたの？・・・え？」

走っていると、後ろからものすごい音が聞こえる

そーと振り向くと、男の集団が私たちを追いかけているじゃないで

すか！

「な・・・なんなのよおっっっ！！！！」

『セリスさあ~~~~ん！』

そう、この男たちはセリスのファン集団なのだ・・・

何故そうなったかと言うと、それは番外編に記す・・・

つづく

あとがき

どうも、MISSTYです。

第5章の2を御届けいたしました

なんとなく短く区切ってみました

ん〜、アクションを文章にするってとても難しい事に気づいたんですけど、いやあ・・・ちよつと、長くしようか迷ったんですが

頭中で思い描いただけですので・・・

とりあえず・・・マンガであつたおとり捜査官を思い出して作ってみました！

どうでしたでしょうか？

ご感想・・・お聞かせください・・・
場所は、私のホームページまで・・・

第5章03 バルン州にきてのお出迎え？

「はあはあはあ．．．撒いたわね．．．なんなの？あれ！」

体力的に余裕なのだが、とりあえず雰囲気を作るためにあえて疲れたようにする香苗

「ふう．．．ご説明ください．．．メリア様．．．セリス様．．．」

ジロリとフェンリルが当事者を見る

タラあと冷や汗をかく2人

「あ．．．あはは．．．ファンです．．．あの人．．．」

「ふあん？！なにやったの！」

驚いて叫ぶセレネ

「え．．．あの．．．ヒミツです（あは）」

「「あは」じゃないわよ！まったく．．．まあいいわ」

そう、この話は．．．また別の時に話そう．．．

「で？次はどこに向かうんですか？」

メリアが、誰かに問う

「次の行く先は、バルン州です」

フェンリルがさらりと言う

バルン州とは、加工工業が盛んな街である

この街で作られる鉄鋼などはデイスニー国の約半分を補っているとはいえ、何か物騒な話が王国にも噂になっている州なのだ

「バルン州かあ、科学進歩してるのかな？」

魔法のない地球で育った香苗にとっては

きつと、すごいところなのだろうと勝手に思っていたが．．．

「すごい！なにこころ」

「すごいですねー、魔法も使っていないのに動いてますよ!!」

「全くだ・・・よくまあここまで作ったものだ・・・セレネ様？どうしました？」

3人は驚くように見ていたが、私的にはOTL状態

期待していたものと大違いだった

電気自動車が走り、半導体素子などを十分に使って技術を売りにしているのだろうと・・・

だが・・・

走っているのは、蒸気機関車・・・

といつても、SLほどの物でもなくまるで初期の蒸気機関である

列車の様なものもあるが、殆どが自動車ぽい形の物が殆ど

唯一地球と違うというところ

魔術を使いクリーンなエネルギーを使っている事ぐらい・・・

そのため、空気が汚染されて居ないのがとても素晴らしいと思った

・

それだけだった・・・

「ありえない・・・もつとすごいと思ったのに!!」

その言葉の意味すら解らない3人だったが

この後、セレネが行うものがこの世界の技術進歩に大きく役立たせることになる

街へと踏み入れる一行が見たものとは

鉄で作られただろう入れ物が転がり、紙屑が風に舞う

人と言うと、酒に溺れたじい様や売春婦がうろつく街・・・まるで

「ゴーストタウンね・・・ここ・・・」

香苗が呟いた

その時、皆が異変に気づく

いや、セリス以外

「・・・困まれた？かな？」

メリアが3人にしか聞こえないように呟いた

「メリア様もだいぶ鋭くなりましたね、素晴らしい進歩です」

フェンリルが絶賛するが

「つたく・・・だれよ！トラブルメーカーは！」

ジトーと2人は私を見た

「・・・私?!・・・よね・・・はあ・・・」

ポリポリと頭を掻く

前方から何かが近づいてくる、私たちを止めるように

それは、蒸気自動車に乗った盗賊チックな姿の奴らだった

「おうおう！お前ら！新入りか？ここを通るにはなあ〜」

その後の言葉を遮るように香苗が言った

「通行料を払え！とか、言うなら払わないわよ？」

「なっ！」

驚く男

「すごい、何で解つたの？読心術？それも魔術？」

「いいえ、勘よ！か・ん！」

「きさまらあ!!!俺たちを何だと思ってる！この街の治安を守ってる

ジュール一族だぞ！」

ボルダーやら、アンペールやら知らないけど・・・今度はジュールですか？

(V)とか(A)とか(J)とか・・・まったく・・・今度、ワツトとか出たら

火の弾お見舞いするぞコノヤロ！

「知らないわよ！全く・・・ジュールだか、シューズだか・・・

私たちには関係ないの！そこどいて、そこ！じゃまだから」

挑発する香苗

「くそおーっ！野郎ども!!!」

そういうと、数十人の男たちがお迎えしてくれた

手に持っているのは、きつと銃だろう・・・

(フェンリル・・・こいつらが持つてるのは、鉄で出来た弾を高速で飛ばしてくると思うから、目に魔力ためて見切って)

(『解りました』)

「ティーネ・・・高速で飛んでくる物体を弾く結界張っておいてね”解りました!”

「メリア、鉄を溶かすぐらいの炎なら怪我することないから・・・そうね、蒸発しちゃいなさい」

「え？鉄を？そんな大出力でいいんですか？暴走するかも・・・」
「コントロールしなさい！さてと・・・」

(シエラ、あの弾結構早いから弾くなり、切るなりして避けてながら行けば

勝機はあるよ。この前もあっけなく終わったし、疼いてるんじゃない？)

ふふ・・・分かってるじゃない！

『さて・・・楽しませてくれるかな？メリア・フェンリル行くよ！』

「はい！」

「御意」

「やっちまええ!!!」

それが合図に、号砲が響いた

香苗の言ったとおり、鉄の弾が飛んできていた

それは、全く旧式と言って良いほどの弾

地球の2000年現在で使われているNATO規格の物とはぜんぜん違い

ただ単に丸い弾が飛んできていた

(まったく・・・進歩してない・・・)

音速以上に飛ぶ弾を魔術によって目を強化したため

まるで、マトックスのように空気を切る部分がゆがんで見えた

「『ファイアーストーム!』」

後ろではメリアが魔術を放っていた

炎の竜巻によつて弾が蒸発する

竜巻の隙間から、炎の矢が敵の銃に当たり溶かしていった

「閃光覇！」

フェンリルが投げナイフで相手の右肩を貫いていく

セリスは、敵の魔力を低くするための聖魔法を唱えていた

完璧なチームワークで相手を翻弄してゆく

次々と倒れていく男たち、逃げ惑うものもいた

まるで地獄絵である

「く・・・くそっ！引け！！ひけえ！！！！」

わらわらと逃げる男たち

『メリア！一発お見舞いしてやれ！！』

「はい！『我の名において、炎よを集え！そして、永遠の灯火があがらんことを！ドラゴンファイアー！』」

まるで、ドラゴンボアの元気球の様な炎をポイと投げるメリア
そのたまに気づく男たちの悲鳴が聞こえると

とてつもない光と共に

爆音と衝撃がここまで響いてくる

『よくやったメリア！』

絶賛するシエラを香苗が否定する

「やりすぎよお！！メリア！！」

「あはは・・・」

真っ黒になつて痙攣を起こしつつ倒れている男を見下ろし

そこにある約20メートルほどのクレーターを見て溜息をついた

その時、この街の警備騎士達が私達を囲んでいた

「君たちか？この騒ぎの発端は」

「いえ、そこに倒れている数十名の人達です」

「ほう、君たちはいつたい何者かね？」

殺意までもないが、威圧感は結構ある人だ

さすが、警備騎士隊長だなあと少し関心をする

「名を聞く前に、自分から名乗るって言うの学校で習わなかった？挑発めいた事を言う香苗にいらだっていた騎士の一人が牙を剥いた
「貴様！我々を何だと思ってるんだ！！」

「バルン州ミツカド市街警備騎士の下っ端？」

フェンリルが、後ろで何か笑っている声が聞こえた

(こら、フェンリル笑うな)

(『す……すみません……クックッ』)

「はっはっはっ、すまんことを聞いた。我は、バルン州ミツカド市街警備騎士隊長、メリギア・リゾッドだ」

「私は、デイスニー王国近衛士のセレネ・アキータよ。王の任命により

初度視察に来てるの。ああ、これがバッジね」

襟の中に仕込んであったバッジを見せる

そうすると、先ほどまで牙をむき出しにしていた者たちが

青ざめて行くのがよく分かる

「なっ……近衛士……あの噂の……深淵の黒鬼?!……」

「黒鬼？私そんな名前って言われてるの？」

全く知らなかった香苗は、フェンリルに聞いた

「そのようです……近衛隊長を素手で倒したと言う噂が流れてから

そういう名前がつけられたらしいです……」

「フェンリル！何でそんな重要な事言わないの！」

「いえ……言ったら、きっと大変な事になると思っていましたので」

「どう大変になるの！」

「噂を出したものが……この世からいなくなるのではと……」

「……で！私を捕まえる？それとも、ない事にする？」

とりあえず、私は免罪符あるから、捕まえたらそれはそれで……」

脅すように言う、香苗

駆け引きにもならない……

「先ほどは大変申し訳ございませんでした。ようこそバルン州ミツ

カド市へ

歓迎いたします」

「ええ、先ほど歓迎されたわ」

「痛いお言葉で・・・」

「市長に会わせてくれる？とりあえず、今のこの状況好ましくないから」

「分かりました。すぐに手配いたします。こちらへ・・・」

香苗たちは、そのものたちの後を追った

その近くで、誰かは知らないがこちらを見ているものがいた事
香苗とフェンリル以外気づくものはいなかった

つづく

あとがき

はーい！MISSYです

第2話御届けいたしました。

急いで掻いたので、あまりストーリー的にはまだ進んではいません
ん〜最近思った事は、いろいろなSSや映画、販売小説に

影響されて勝手に解釈して勝手にストーリーにする

そんなこんなで作っています・・・

秘儀！パクリ？

とまでは、いきませんが

基本的な物は似てるかなあと

今回は、どこかで見た覚えのあるアニメ・・・をモチーフにしています
スチームボーイだったかな？

そんなこんなで続きます！

あ、そうそう。ランキング投票始めました
ぜひ、投票してください。

目指せ1位！（え）

ああ〜ちなみに、この番外編はこのシステムを使わず
MYWEBサイトに入れますので、ここだけ見ても分かりませ
んよ

私のHPについて確認しましょう。(いつ出すかは言いません)
気づいたらあたりしますから〜っ

第5章04 なんか陰険な奴やな

市長の屋敷だと言われるところに着く

「・・・なんか、趣味悪いね・・・」

そこはまるで、魔王の屋敷のように暗い雰囲気にも包まれていた

「なにか・・・あるような気がします・・・」

フェンリルが呟く

「メリア・・・セリス・・・ここで留守番！」

「えーまたですかあ〜」

「私も行きたいです・・・」

二人とも行きたがっていたが、何かあつては遅い・・・

「まだメリアもセリスも若いの・・・だから、大人しく待ってて

そうね・・・フェンリルと対抗出来るぐらいの技術を持つたら一緒に

に行くこと許すわ・・・でも・・・まだ」

香苗はその屋敷を見る

誰もが入る事を拒絶するような建物

嫌な予感がする・・・

「まだ・・・こういう所に入るのには早すぎる・・・」

「分かりました・・・セレネ御姉様」

「分かったわ、姉さん・・・フェンリル！貴女には、絶対に勝つか

らね！」

ビシツと指を刺してライバルだ！と言っているように

「いつでも御相手いたしますよ、メリア様」

無表情のフェンリルだったがほんのり微笑んでいるようにも見えた

「フェンリル行きましょう・・・メリア、もし何かあったら

剣を抜きなさい、きつと何とかかなるでしょう」

「はい・・・姉さん」

そこに入ると、召使いが出迎えてくれた

「よつこそ・・・バルン州ミツカド市へ・・・」
すぐに香苗は気づいた

この子が隷属の印が押されている事を

(ここまで・・・汚染されていたのね・・・)

と言う事は、この市長と言う奴もきつと・・・悪ね・・・

しかも、この子の腕や脚には青いあざが見て取れた

「あ、君、ねえちょっと来て・・・ごみが着いてるわ。取って上げる」

私はその娘の額に手を置いた

隷属の印が一瞬にして消えると、声を上げようとした彼女を魔術で止めた

彼女の心にそのまま伝える

「貴方に危害を及ぼすことはしません。そのまま、頷くだけでいいです。」

聞いてください、いいですね？」

驚いていたようだが、すぐに冷静を保ってくれた

こくりと頷く

「私は、デイスニー王国 近衛士のセレネです。ここには、

視察で訪れました。貴方以外に、奴隷として扱われている人はいますか？」

こくりと頷く

「そのまま、右手で数字をあらわしてください。」

そうすると、親指以外が伸ばされた

「4人ですね？」

こくりと頷く

「貴女の、隷属の印はもう無効化されましたが、まだ少し泳がさせてください。もし、耐えられない罰を受けようとなったら」

私はいつも持っている非常用のペンダントを渡した

「これに、「助けて」と念じなさい。そうすれば、少し遠いですがデイスニー王国の保護施設まで送ってくれます。いいですね、耐え

られないときのみ使うんですよ・・・でなければ、こいつを逮捕出来ません・・・こいつが許せないのなら協力してください？できませんか？」

強く頷いた

「貴方たち以外の者を助けたいのですが・・・周りをうるつくわけには行きません・・・そのペンダントを奴隷として扱われている者の額に当てなさいそうすれば、術は無効化されます・・・その後、念じれば言葉を返さずに会話が出来ます・・・盗聴の恐れがあるので、それを使いなさい・・・私との交信もそれで出来ます。何かあったら私の事を念じなさい。額につけて会話が終わったら、相手の手の甲に置いて「友よ」と念じなさい。そうすれば、刻印が出ます。危機の時はその子も保護施設に送ってください。転送されると言う事を知っているのは貴方だけにしてください。いいですね。トラブルを防ぐためです。つらいでしょうが・・・我慢してください・・・」

頷くと私はすぐにその手を離れた

「ごめんなさい、はい取れた。」

「申し訳ございません、御手数おかけいたしました。ご主人様はこちらです・・・」

先ほどと違い、見違えたような瞳になっていた

「ありがとう・・・」

そして、彼女が誰も聞こえない声で呟いた

「お気をつけて・・・」

私はそれに頷くと謁見室に入った

そこには、エグゼクティブチェアにずっしりと座った

いかにも運動していませんと言っているような体格の大きい男が座っていた

「ようこそ、バルン州ミツカド市へ。市長をしております、ブブカと申すものです。どうでしたかな？街の方は・・・」

「いいとはいえないようですね・・・先ほど、手厚い歓迎があった

ところですよ」

「ははは．．．申し訳ない．．．ジュール一家には少し手を焼いて
おりましてね．．．」

いけ好かない．．．やつだ．．．

「そうですか．．．少し滞在したいと思っています。」

「是非そうしてください。でも、夜中の街は危険ですので」

「ご忠告ありがとうございます．．．」

すぐに踵を返し、部屋を出た

(『香苗様．．．あの子は?』)

(そう．．．あの子も犠牲者．．．何か匂うわね．．．フェンリル．
．．

隠密に調査して)

(『御意』)

すぐに、フェンリルの姿が消えた

門を出ると、疲れきったメリアの姿あった

「メリア!何があったの!」

すぐに、抱きかかえ治療魔法をかける

緑色に光る香苗とメリア

肩で息をしていたのが段々と収まってきた

「姉さん．．．ちよつと張り切りすぎちゃった」

「何があつたか話して見なさい．．．」

「実は．．．」

1時間前

「また、留守番ですね．．．」

「そうだねえ．．．!」

4・5人がメリアの周りを囲んだ

「誰!私たちに用?」

すぐに剣の柄をつかんだ

「貴様は、ブブカの手下か！」

「違うわ！勘違いしないで！」

相手もメリアも臨戦態勢に入っていた

「では、何者だ！」

「あんた！人を訪ねるときは自分から名乗れって言われなかった？！」

セレネ姉様直伝！

「貴様からなのれっ！」

いきなり、飛びかかってくるとすぐに剣を抜いて交わした

セリスも結界を張り誰も入れさせないようにする

金属が弾く音が鳴り響く

「クツ！女の癖にやりやがる」

「女だからって舐めるなよ！」

先ほどとは違う低めのアルトボイスの声で言った

「女だからって手加減はしねえぞ！」

「ふっ、莫迦が！」

その時、剣が真つ赤に燃えあがった

「なっ！なんだ！！」

相手の剣はまるで溶けるようにグニヤリと曲がっていた

鉄が真つ赤になって

「ま・・・魔剣かつ！」

「そんなもんじゃないさ・・・魔剣ではないな・・・残念ながら」

そして、燃え盛る剣を相手に向けると

「まだやるのか？」

「くっ」

もう一人の法を見ると、結界を破ろうと必死になっている男たちがいたが

まるで歯が立たないように見えた

男は、口笛を吹き何か手で合図をしていた

そうすると、皆散るように逃げていく

「くそっ！」

そう言って逃げて行った

「そう……そんなことが……」

（きっと……レジスタンスね……少し興味がある）

彼らを使うって事？

（戦力はあったほうがいい……）

「ねえ、メリルその奴らどっちに行ったか分かる？」

「たぶん、あの山のほうだと……」

後ろを振り向くと、まだ夕暮れだと言っのに松明の様な明かりが見える

（あそこね……）

フェンリルを抜かした3人が向かう先は、レジスタンスのアジトになった

第5章05 レジスタンスとこたいめくん・・・って！うそっ！

香苗達は、山の中を歩いていった人の気配が3・4と増えていく

まあ、増えたからと言ってどうなるかとは思えないが左右にたいまつが備え付けられた門の前には数十人の御出迎え達が勢ぞろいしていた

「何だ？貴様らは！用がねえならとつとと消えな！」

このチンピラが・・・なにを、ぬけぬけと・・・チンピラとなると何処も同じなんだなあ・・・となんとなく思っている香苗

「あんたらに用はないよ、頭に用があるんだ」

そういうと、皆がワハハハと笑い

「俺が頭だ」

とか言う

香苗の眉がびくりとつりあがる

徐々に彼女の体から黒いオーラが漂い始めた

その時は、もう地を向いていて、前髪が彼女の顔を隠していた

徐々に黒髪が段々と宙に浮き行き場を失い舞う

メリアは気づく

これは、前回と同じパターン・・・

黒鬼になる・・・前触れ

「ね・・・姉さん・・・落ち着いて・・・ね・・・

あんたらも！本当の頭連れてこないと・・・どうなるか分からない

よー！

「しらねえ〜なあ〜」

今度は、こめかみに血管が浮き上がる

「ま・・・まずいですよう！本当に、しりませんよ？

貴方たち死んじやいますよ！ー！」

オロオロとするセリス

「……………」

無言で、手に魔力を溜め込む

「どういふ風に殺そう……」

焼こうかしら……切り刻んであげようかな？はたまた、潰すのもいいわね

そう……溺れさせるのもいいわ……ああ……そうだ……レ
ーザーみたいに風穴開けたら一瞬か……それも面白くないわね……」

なんだか、やけに怖い事を呟いている香苗

メリアとセリスがかなり恐怖に怯えていた

「ね……姉さん……落ち着いて……深呼吸して……ねっ」
「御姉様……お気を確かに……」

心配する妹たちを見て、優しい顔……いや……奥底ではどす黒い触ったら凍りそうな雰囲気をかもし出しながら

「私ね……貶されたり、脅されたりするの、大嫌いなよ……
負けず嫌いなのかな……大丈夫よ……3/4ごろし程度にして
上げるから」

そ……それって……絶対4/5以上に殺すってことじゃないっ！
この人達本当に死んじゃうっ！免罪符あるからいいのか？……い
えいえ

ああ！やばいようそれはあ！

2人はあせる……無用な戦闘は避けたい

「御兄さんたち！謝って！姉さんに謝って！！死にたくないなら！！
今なら間に合うから！！」

セリスが叫ぶが

そんな忠告を聞かず

「けっ！そんな女にまけるはずねーんだよっ！うらあ！」

剣術も何もなく、ただ単に剣を彼女に振り下ろした

彼はあつけないなと思っただろうが、すぐにそれは否定される

香苗の人差し指と中指によって掴み取られてしまう

「なっ・・・指で掴みやがった・・・くそっ、ぬけねえ・・・」

「死にたいようだね・・・君・・・」

その声は、まるで先ほど違い別人の様な声だった

それに怯み、持っていた剣を離して後ずさる

香苗は掴み取っていた剣を右の方へ投げ、その剣は1/4ほど木に刺さっていた・・・どれぐらいの力が彼女にあるのか

未だに把握出来ないが、この世界で彼女以上に力のあるものはきつといない・・・

「・・・早く選べよ・・・どれがいいんだ？・・・

きめられねえんなら・・・俺が決めるぞ・・・」

香苗は、怒ると男っぽくなる性質がある

それは、元の世界で自衛隊に勤めていたことに関係してくるのだが手にはあまるほどの魔力、まだ属性をつけて居ないため渦巻く球体があった

どンドン魔力を圧縮して行く

「そうだな・・・俺は・・・気分的に風がいいな」

言った瞬間、その魔力は風属性に変わり香苗の周りが風に包まれる落ちてくる葉が一瞬で粉々になる

まるで獲物を探すように風の触手がうごめく

「どうしたんだ？早く来いよ・・・死にたいんだろ？」

「く・・・くそーっ」

やけになって、向かおうとしたとき

「やめろ！本当に死にたいのかっ！！」

タイミングよくそれを制止する声が響いた

「なっ・・・お・・・御頭！」

数十人のチンピラ共が道を開けるとそこには

フェンリルのように少し黒い肌に、目は黒に近い茶色

髪は銀・・・そして、特徴のあるとがった耳

書物だけしか見た事のない、絶滅したと聞いていた人物がいた

「ダークエルフ・・・まだ生き残りが居たのね・・・

シエラの声に、持っていた風属性の魔力を握りつぶし消し去る香苗
「貴方が頭？」

声も、話し方も元に戻っていた
妹たちもホツとする

「こいつらが、とんだご迷惑を・・・代表として謝罪いたします。
深淵の黒鬼・・・いえ、デイスニー王国近衛士 セレネ・アキータ
殿」

頭を下げる男・・・いや、どうなのだろう・・・エルフ自体

男女と言う関係がない・・・そう、両生類なのだ・・・

しかも、私の名前まで知って居るとは・・・結構な情報網ね

「謝ってくれるなら、それでいいわ」

「ご配慮感謝いたします・・・こんな場所で話すのも、

私の家までご案内いたします」

一つの家に招かれ、出された椅子に座る3人

「回りくどい事は、私好きじゃないのですぐに本題にしますけど、

とりあえず、名前。教えて」

「メルト・バルスキーです」

「貴方たちは、レジスタンスですよね」

「はい、確かに私たちはレジスタンスです。革命軍といってもいい
でしょう」

「運営費は？」

「街に協力者が多数います・・・そこから分け与えられています。
と言っても、貴族ではなく・・・商人協会からです」

「市長の横暴はいつごろから？」

「3年前の市長選からです。市長に当選してから税を上げ、徴収も
厳しくなりました・・・前市長がなるべきだったのですが・・・不
慮の事故で」

事故？怪しいわね・・・

「そうですね……この事を国王に報告は？」

「しましたが……結局受け入れてもらえず……」

確かに……あのときの国王は……今ならともかくだが受け入れる前に……もみ消されるだろう……

「ジュール一族との関係は？」

「全くありません……噂では、市長と結託していると言っ話を聞いています」

あいつのことだ……やりかねないな……

「それで、クーデターを起こそうと考えているのですか？」

「出来れば、穏便に済ませたいのですが……仕方がないのであれば……」

「ある程度は分かりました。最後に……貴方は……ダークエルフですか？」

「いえ、純血ではありません。エルフとダークエルフのハーフですなるほど……」

「市長の横暴も……見ぬ振りも出来ないか……近衛士としてクーデターを起こすことは許しません」

「ですかっ！しないと、私たちは……」

「話しは最後まで聞きなさい、クーデターは許すことは出来ませんが、

市長の再選をすることを王国の方に上申してみます」

「ほ……本当ですか！」

「ええ、きつと3日ほどで再選の命令書が来ると思います。それまでに、

やって起きたい事が……そう……ね、レジスタンス解散させなさい

「なっ！どういうことですか！」

「貴方たちのこの集団は、商人教会以外が見ればただのごろつきの集団

盗賊とかにしか見えないわ……それでクーデターを起こしたら

知らないうちらの騎士団が押さえに来るでしょ・・・面倒な事は避けたいのよ・・・」

「確かに・・・傭兵を募っただけの集団です・・・」

「だから、解散させなさい・・・こんなの、私一人でも潰せるぐらいにしかなくてないわ・・・いえ、隣にいるメリアだけで十分よ」
そこまで言われて、黙っている彼ではなかった

「では！その証明に我々の一番強い者と戦ってください！」

「いいでしょう・・・それで、気がすむのなら」

その後、フェンリルからの報告によると

やはりジュール一族と市長とはグルだと分かった

そして、あそこに居た少女たちもまだ、がんばっているとの事だった
香苗はすこし、ホツとしていた

あの少女たちに何も無い事を祈りながら・・・

翌日

決闘の場には、先ほど香苗を怒らせた男とメリアの姿があった

「これより、バカンス対メリアの決闘を行う！両者剣を抜け！」

バカンスだけ剣を抜いた

メリアは全く抜かずに、微動だにしない

「メリア、剣を抜きなさい」

「いいえ、このままでいいわ」

審判の指示を無視する

確かに、抜かないといけない規定はない

「メリア姉さん・・・なにするつもりなのかな・・・」

「・・・あの子つたら・・・」

セレネは分かっていた、彼女がこの後どういう風に相手を沈めるかを

「はじめっ！」

「うりゃあっ！」

叫びながら突進していく男

ヒョイと体を捻りかわすメリア

振り返りざまに剣を横に振るがそこにはメリアはいなかった

「なっ！何処に行った！」

「ここよっ」

バカンスの真後ろに立っているメリア

「くそっ！」

振りかえるがそこにも居なかった

「なっ」

「まったく・・・何してるの？早くしてよ！退屈」

脚払いをし、相手を転ばせたり、背中を押してバランスを崩させた
りと

遊びたい放題の状態だった

「メリア、遊んでないで早く終わらせなさい」

香苗がそう指示をすると

「はあ、いい、姉さん」

突きの姿勢で突進してきたバカンスを空中で前転しながら避け

そして、着地寸前で首元に手套を御見舞いする

相手は、硬直し動かなくなると

音を立ててひれ伏した

「ねえーさあ、ん勝ちました」

手を振って喜んでいるメリアを見て・・・溜息を突く香苗

それが当たり前、フェンリルと同等とは行かないがそれなりの

強さがあるのだ、こんなチンピラと比べられたら

フェンリルに失礼である

「・・・御約束どおり、レジスタンスは解散します・・・あの・・・

セレネ様・・・最後に・・・私からのお願いがあるのですが・・・」

「ん？」

「私と、御手合わせ願いませんか？」

「ん、代償は？」

「この・・・私を持っている、ダークエルフに伝わる秘伝書では・・・
どうでしょう？」

黒い光沢のある本を見せると

香苗の目が光る

「いいわ！受けて上げる！あ！そうそう、こっち来て」

メルトの耳で囁くと

「えっ！貴女様が・・・！！」

「どっちがいい？」

「・・・できれば・・・」

私のでばんねっ！

(ちゃんと、獲物はゲットするのよっ！)

分かってるって！

「じゃあ、召還するね」

そういうと、彼女の周りに風が吹きまわり
姿が見えなくなるとすぐに風が止んだ

しかし、そこには香苗の姿がなく

シエラの姿があった

『始めまして、メルト君・・・私が御相手いたしますわ』

「貴女様が・・・シエ」

『シーっそれは、心の中で秘めてください。さっ！始めましょう』
今まで抜かなかった、聖剣を抜く

相手も、ダークエルフの伝説の剣を抜いた

「・・・お願いします！」

ヒュツと風を切る音がすると同時に金属が当たる音が響いた

『あら、なかなかやるわね』

「貴女も・・・」

ギリギリと交じり合う剣

間合いを開けすぐに突進して行く

「はぁあっ！剣儀！ブラストシュート！」

なっ！

早すぎる突きにシエラは完全には避け切れず、髪を数本切れてしまった

「なっ！ブラストシュートを・・・避ける・・・なんて」

「そう・・・そういう気なら、私も容赦はしないよ」

シエラは自分自身である剣の魔力を上げていく

聖剣に青い光がともなっていく

『いくよ？用意はいい？メルト君！』

青い稲光の様に放電している剣を肩の上部に水平に構えた

それは一瞬の事だった

きつと瞬きをしていたら見えなかった

いや、していなくても彼女の姿を見る事は不可能だったであろう

一瞬にして、メルトの後方5メートル程にいるシエラ

その数秒後、爆音と共にシエラの方へと飛んで行き

それを、シエラは受け止めた

『全く・・・たいした者よ・・・こいつ・・・』

完全に意識は飛んでいたメルトだったが、シエラの一撃を

剣の腹で受け止めていたのを見て、褒めていた

彼を、家まで運び香苗にバトンタッチをした後治療魔法で

傷を治した

「貴方が、気が着いた頃にはもう事は終わってるから安心して」

そう呟いて、メモ書きを置いてレジスタンスのアジトを後にした

「さあっ、メリア・セリス！本番よっ！」

「はい」

3人は市長の館へと進んでいった

第5章06 初めての車窓から置き土産

囁くように風が舞う

ひゅーうつと

そこから、3人の人間らしきものが

市長の屋敷へと歩いて来る

3人の内2人は帯剣しているが

もう一人はとても幼い

子ずれなのだろうと誰もが思った

「おい、ここから先は市長様の御屋敷だ！」

門番が私に言う

そうでしょう、だってその本人に用があるのですから

「お願い」

私がそう呟くと、メリアの姿が一瞬にして消えた

いや、門番の背後に

枯れた太めの木を折るような音が2つ鳴り響いた

そのまま歩いて行く

硬直しているように動かない門番

数メートル離れてから地に伏せる音が聞こえた

「おい、門からの定時連絡がないぞ」

一人の通信士が言った

通信士と言っても、音を伝える手段がないため

屋敷まで伸びた紐を引っ張るといふ原始的な通信手段しかない

だが、その定時連絡がないのだ

香苗が倒してしまったから

「ちよつと見てこい。どうせ寝てるんだろつ」

「分かった」

そう言つて、待機所を出るとそこには一人の女の子が居た
「なんだ？迷い込んできたのか？ほら、ここから出た、で
その後、男が声を発する事もなく意識を暗闇に放した
メリアの手套によつて

「おい、どうしつ！」

倒れていた同僚の姿を見て抜刀しようとするがそれも遅く
彼女の抜刀した柄の部分によつて次々と倒して行く、圧倒的な強さで
一人の女性によつて待機所に居たものすべてが意識を失つた
そして、その前を歩いて来る香苗に合流する

「殺してはないわね？」

「・・・はい・・・」

「よろしい」

その数分後の屋敷内では、何が起きているのか分からず慌てる姿が
たくさんあつた

キーン、ガシユツ

切り刻まれる音が廊下に木霊する

「な・・・なにが・・・」

一人の騎士が翻弄する

コツコツと誰かが近づいてくる

窓から差し込む月の光がによつて

相手の姿が見えてくる

黒いブーツにズボン、そして黒い服

黒い髪、黒い瞳

しかし、手や首などの肌はとても白かつた

「お・・・おまえは・・・誰・・・なんだ」

その容姿は、とても神秘的な・・・ものだつた

「・・・セレネと言います、市長さんはそちらですか？」

その男の後ろにあるドアを見つめる

「く……来るな！こ……ここから先は、誰も入れさせない！」

ガチガチと震える手で持つ剣はとても弱弱しく見え何か空しく思えた
「そんなへっぴり腰では、殺すにも殺せませんよ？」

そして、私はその人を無視し通り過ぎるとき

目を細め

「……戦の前でビクついている餓鬼が、えらそうな事ほざくな」
香苗はその部屋へと入っていく

「だ！だれだ！……セレネ様……こんな夜遅く……どうされ
たんですか」

ほほ、ここまで平然を保てますか

殴りこんできたんですよ？

さすが肝が据わっています

「いえ、ちよつと近くを寄ったものですから……少し御話をしま
しょう」

そう言っ私は、近くのソファーへと座った
とりあえず話題を作らないといけませんよね

「御話……ですか？」

「ええ、前市長の事です。独自の調査で分かった事なのですが」
香苗は手を合わせさせる

彼女には、何か考え事をするところという行動になる癖がある

「どうにも不可解な事がありましたね……」

「不可解ですか？」

「そうです……選挙前に事故死……と言うのは、何かと不思議
な事があるのだなあと……思いましたね……当時の調査をして
いた人達にお会いしようと考えて行ったのですがね……」

「……で？どうでしたか？」

「全員白骨化してました……死因はいろいろ、圧迫で死んでいたり
数箇所の刺し傷による出血死、絞殺による窒息死もありました……」

「

「ほう……」

「で……おかしいと思うんですよ……なんで、関係者殆どが死んでいるのか……死体を何故そのままにしているのか……変じやありませんか？」

「そういう偶然もあるし、死体の方は気づかなかったのでしょう」
「まだしらを切りますか……いい度胸です……」

「で……やつと見つけたんです……証人とやらを」

ピクリと眉を動かす

眉、動かししましたね……それは、何かまずいと思ったと考えましよう

私が求めていた行動です

「そ……その証人とやらは？なんて」

「その子は、市長がジュール一家と結託し殺しを依頼したと……そう言っているのですよ」

ニヤリと笑う私

どうも、こういう展開が好きで……

「バ……バカな事があるか！うそだ！そんな話は絶対うそだ」

「そうですねか……ちょうど、その方もいらっしやるんですよ？

そうですね？召使いさん」

ドアの方へと言い放つと、ユツクリと扉が開き5人の召使いが入ってきた

「な……お前たち！何をしている！早く出て行きなさい！」

あせっていますね

その焦りが、ド壺へと導くんですよ

「申し訳ないのですが、その方が証人です……どうぞ御話ください」

「私は……あの、選挙戦の前日に……ジュール一家の幹部ら

が、市長の所へ来て「俺たちに協力してくれれば、お前を当選に導いてやるよ」って……そう言っていました」

あせりのあまりなのか、バンと机を叩き立ち上がると

「何を言っているんだ！貴様！」奴隷”の分際で何をたわごとを！
言いましたね・・・重大発言言いましたよね・・・私聞きましたよ？
「おや？奴隷ですか？知っていますか？デイスニー王国では奴隷制
度の禁止と言う法律があるのを・・・先ほど・・・市長は『奴隷の
分際で』でいいましたよね？」

「そ・・・それは言葉のあやで・・・」

「そうでしょうか・・・実は、私がここに来た時、隷属の印を押さ
れた

この子たちがいたのを見ましてね・・・解呪して置いたのですよ」

「なっ・・・」

「そして、貴方を葬りさるために・・・ご協力をいただきました・・・
」

そういうと、一人の召使いの手には黒い手帳

残りの4人には、書類などが手にあつた

「証拠集めをしていただきました・・・それでも・・・言い逃れし
ますか？」

「し・・・知らん！そんなもの！俺は知らんぞ！」

おやおや・・・まだ、しらんぞんですか・・・

仕方がありません・・・

「・・・本当に、脳味噌腐った野郎だな・・・お前は」

先ほどとは全く違う、凍るような冷えた空気が変わる

「奴隷を人身売買で買い、尚且つ賊に前市長を殺させ

拳銃の果てに、その賊は野放し。しかも、税を上げ

市民に批判を浴びている・・・そんな市長務まるのか？」

「くっ・・・」

「国はねえ・・・市民のためにあるんです・・・国のためじゃない
んですよ

それは、市も同じこと市民の事を考えなければ・・・誰も付いてこ
ない

誰も知っていることです・・・ですがっ」

立ち上がり、市長に指をさす

「飾りの市長なんざ必要ないね！」

「き……きさまあ！！言わしておけば！」

刹那

国王軍の数十名が部屋に押し入ってきた

フェンリルと一緒に

そして、紙の様なものを市長に付きつける

「ブブカ・アルデニーロ市長、殺人強要及び収賄・横領・奴隷禁止
法違反の

容疑として貴方を逮捕します！」

「なっ……俺は何もしらねえ！しらねんだ！！はなせっ！くそあ
！」

連行されるブブカ

「なんか、いいところもって行かれた気分ですよ、隊長」

そこに居るのは、近衛騎士団長のマルチダだった

「そこが俺のいいところだ」

「でも、隊長ご自身で来るなんてめずらしいですね」

「ああ、ティニア王が戻られたんでね。君たちを迎えに行くついでに
この逮捕状を渡してくれと言われてね。来て見れば」

外の奴ら殆どがメリアがしとめてくれていた

といつても、気絶や骨折などの致命傷に当たらない程度に手加減を
して

「こうだからなあ……なんか、啞然としててよ。そうしたら、こ
いつが『どうぞ、主がお待ちです』なんて言うじゃねえか……ま
ったく、お前らどうにかしてるわ。そうそう、新しい市長なんだが
な。お前に一任するとよ！」

「わ……私がですかあ！」

「ああ、これが任命書だ」

一枚の紙を渡され見ると、任命欄には何も書いてなかった

「そこに誰でもいいから名前書きゃいい」

「いいやつですか？」

「ん〜確かに一人います・・・ですが・・・うむ〜」

「確かにいるのですが・・・まあいいでしょう。その任承ります」

「オウ！頼んだ！こいつは俺が何とかする。早く帰ってこいよ」

「王様がうずうずして仕方がないらしいからな」

「分かりました」

そして、数日後の市長任命式

「メルト・バルスキー、貴殿を、バルン州ミツカド市の市長に任命する。」

デイスニー王国 国王ティニア・デイスティーニ 代読・・・おめでどう

「ありがとうございます」

ワァー

市民全員が盛大な拍手と喝采を上げていた

こうして、デイスニー国初のダークエルフの市長が誕生し

それが話題になり、活気付くと共に

鉄鋼製品の価格を値下げ等をし仕事に飢える人も減っていった

こうして、私たちの一回目の旅が終わった

何事もなく・・・終わるのがいいのだが・・・

そうも言っていられないのもこの世界の特徴なのかもしれない

第6章 01 何か変なのが居る！

あの旅から約六年
年を取らない私には、何も変わらず
周りがどんどん変わっていきます

快晴の中、城下町を歩いています
今日もいい朝です

これから買い物、食料調達です
朝市って言うのもこの町にはあります
そのため、今町へと繰り出しているんです

城の中で住んでいたのではと？
いえいえ、そうも言うてはいられません
というより、そういうのは嫌いです
なので、ティニアが私の家を作ってもらいました
といっても、豪華なものではないのです
私が断りました

断固として断りました
そんな豪華なもの嫌です
元の世界では、素朴に質素に暮らそうと考えていたのですから
そういえば、朝ごはんがまだだったような気がします・・・
お腹減りました

少し腹の虫が泣いています
「マリー、やっぱり、ご飯食べようか」
私の後ろで一緒にあるいている人がマリーさん
六年前の救出劇によって助けられた召使いの一人なのですが
なんか、私に恩を返したいということでしたので
私の直属のメイドさんに当たります

なんと、5年もの歳月を経て勉強して来たそうです

そこまで、がんばってきたのですから断るのも気が引けたので……
しかも、年的には……私より上になってます……

(いっ！)

ギロツとみられてます……

朝食は、いらなさいってしまつたため、ちよつと消極的です……
腰が引けています……冷や汗だらだらです

怖いんです、私に始めてこの世界で怖いといえる人が出来ました
この方には逆らえませぬ……無理です！

そりゃ、剣とか魔術とかなら勝てますが

精神的に勝てませぬ……

非常に嬉しくありません……

「だから言つただではありませんか！朝のご飯は重要だと！」

この人には頭が上がりませぬ……

実の母親に似てるんです……口調も、声も、性格も……

正論を言ってくるので、言葉が出ないので……

出したら2倍以上に返つて来ます

「ごめんなさい……」

カクツとうな垂れます

ご飯が恋しいと言つのはこの事を言つのでしよう

毎朝のご飯は欠かさないので、なぜか今日に限って食べていま
せん

マリーのご飯がまずいのではないんですよ。とてもおいしいんです
でも……量が……半端なく多いんです

朝はあまり食べられないので、少なくとも言っているのに……多
いんです

食べないとやっぱりやっていけないようです

困りました

「しょうがないですね……近くの食堂で食べましょう」
呆れたように言われたのですが

私はとても嬉しいです！とても！なぜか、マリーが神様に見えていました

ちよつと、大げさかもしれませんが・・・

「やったっ！」

小声でガッツポーズをした所を見られたようで

キツと細めで見られてしまいました

「あはは・・・」

最近はとても平和でよろしい限りです

たまに、魔獣もきたりしますが適当に追っ払っているようです

でも、私はそんな平和を許してもらえないようで・・・

「はらへつたあゝ・・・ん？何？」

目の前に誰かがいます

黒い魔術師用のローブにいかにも魔法使いですと言っているように杖まで持っています

「勝負だ！黒い魔女！」

ここ6年間、この様な方がずっと挑戦してくるんです

今度は黒い魔女ですよ！いつからそういう名前が増えてるんでしょう

たしか・・・前は、黒い死神・・・だった気がします

今度メモって置きたいぐらいです

えーと、確かこの人は7回目です

がんばりますね・・・

「黒だか白だかしらないけど、名前があるんだから、名前で呼んでよね！」

叫ぶ私に帰ってきた言葉は、

「そんなの関係ない！決闘を申し込む！」

・・・またですかっ！

実は、前回の旅の時から私の事が噂になり

このように、『自分がNo.1になるっ』という

大ばか者が後立たちません
困ったもんです

と言うより、馬鹿が多すぎます

「い・や・だっ！面倒だもん」

こういうごたごたは、拒否するに限りませ

「き・・・きさまっ！侮辱するきかっ！」

「侮辱も何も、貴方私に勝てないよ？」

「くっ！やってみなくてはわからんっ！！」「火炎弾」！

呪文を唱え、ソフトボールぐらいの弾を飛ばしてくる

呪文唱えた時点で何が飛んでくるか分かる

相手に勝機はない事は明白なのだ

香苗はそういうことをしなくても、イメージで

出せるため本当の戦闘と言うときにしか使わない

なので、こういう馬鹿らしいことの時は

短い短縮魔術語を使うことが多い

「『零』」

ピツと指をその弾へと向けると

水が蒸発するようにその弾も消える

「な・・・これならどうだ！」「火炎連撃弾」ッ

数十近い火炎弾が飛んでくる

私は身軽なステップで避けるのに必死・・・のはずはなく

かなり余裕で避けている

「貴様！避けるなっ！」

（支離滅裂だし・・・避けるでしょ！普通）

「しょうがないなあ・・・」

私は避けるのを止め、飛んでくる火炎弾を手套で切る事にしました

「よっよっ」

カポーンと口が開きっぱなし

これぞ、開いた口が塞がらないというんだらう

「な・・・魔法がダメらなっ！」

杖から、細身の短剣を抜く

（へえ、仕込み刀？いや、仕込み短剣か？）

「くらえ〜っ！」

香苗！

（大丈夫）

え？

余裕な声に驚くシエラ

スツと相手の右側に避ける

「てい！覇っ！」

左手の手套で相手の手首を強打し短剣を離させると同時に

右手で手首を掴み少し捻り上げた

「はへ?! にぎやっ」

相手の脚は地と逆になり鈍い音とかえるの断末魔の様な

声が聞こえた

「ふう」

手をはたき、伸びている男を見下ろす

か・・・香苗？いつ体術なんて・・・

（あれ？言つてなかったっけ？自衛隊でね、合気道5段でしょ、銃

剣道7段徒手格闘4段なんだ。自衛隊の全国大会まで出たんだよ。

準優勝だったけど）

い・・・言つてないわよっ！

（あはは、だつて言つたら『自分で何とかなるでしょ！』とか言つて

面倒な事やつてくれないじゃない？）

そ・・・そんな事、知つてたらそうするわよ！

（だから、言わなかったの。でもばれちゃった。

いずれ言おうと思つてたからいいんだけどね）

とりあえず、浅い地の仕入れを終え家に付くとき

「まっつっ!」

扉を開けようとするマリーを静止させ意識を集中させると

（何か・・・いる、何者？人間じゃないけど・・・この魔力量は・・・）

入って見ないと分からないか・・・

勢いよく開け抜刀する

「だれっ！」

そこには誰もいない・・・いや、2階に2人の気配はあるけど1階にもいる・・・

「すまぬのう・・・勝手に入ってしまったって」

え？どこから？！

見渡しても何処にもいません

気配はかなり近いのですが・・・

「ここじゃ！ここ」

「え？」

下を見ると、黒猫がいました

・・・猫？いや・・・この猫普通の猫じゃない・・・人間が化けているの？

「いやはや、突然御邪魔して申し訳ない」

もう何も驚きません、この世界では

「で？貴方私に何か用？」

「いやあ、この国に最高の魔道士と剣術士がいると聞いてのう御邪魔してみたのだよ」

じろじろと私の周りを回り、見渡すと

「素晴らしい！なんていう魔力なんだ！その封印をしてもその魔力只者じゃないのう。お主・・・何者じゃ？」

こ・・・こいつ・・・何者?!封印の事も知られるなんて・・・

こいつ・・・もしかしたら、封印都市ラグーンの使者かもしれない

（ふ・・・封印都市って・・・あの?!）

封印都市ラグーン、結界で守られ外部からの侵入を拒むと言われ

外交も交流も全くない未知の都市

噂では、古代ヒステリア語（古代魔術）を使うとして伝説になっているほどのものだ

それが？こいつ???

「な・・・何者も何もないわよ？ふつーの、女性？」

「ほう、普通とな・・・なら、これは避けれまい！」

（あ！これは！！古代魔術！）

すぐに、古代魔術の結界を張ると爆音と共に結界の周りに纏わり付くように

稲妻が弾けていた

「な・・・何をするのよ！！！」

いきなりの暴拳を許すわけにはいかない

「ほう、それを防ぎましたか・・・なら、これはっ！」

急に猫の爪が伸び素早い踏み込み

シエラは反応して抜刀した

その爪を防ぎ、魔力を高めその爪を切り裂いた

キーン

「なんとっ！爪が！うあっ」

シエラが、容赦なくその猫の喉元を突こうとしたとき

「待つてください！」

誰かの声に反応し、シエラの剣は猫の喉元数ミリの所で止まっていた

「ミラージュ様・・・」

その猫が答えた先にいた者

「ありえない・・・」

その女性の容姿も女神の様な姿だったが、それ以外に女神と言えるものがあつた

（・・・翼？！有翼人種つて・・・いたっけ?!）

確かに伝承にはあつた気がするけど、いや・・・あれは物語に過ぎない

『ま・・・まじ?!!』

(始めて見た・・・)

わたしもよ・・・

「マブロ、そこからはなれなさい！貴方の独断で行った暴挙で自分の命を絶とうとしたのですよ！」

そして、私の方へ向きなおすと

「大変申し訳ない事をいたしました・・・私、ミラージュ・リアー
ティー

と申すもの、光の民『セレネ・アキータ』様にお願いがあり参りました」

突如、現れた有翼人種の一人ミラージュとその猫

一体全体どういう厄介ごとに巻き込まれるんだろ・

第6章02 はあ、結婚ですか？え？わたしは・・・

マリーに御茶を用意してもらい、2人＋1匹で茶をすす

「で？私に何をしてほしいと？」

とりあえず、用件を聞こうと思ひ話しかける私

厄介が多すぎるんです

はあ、行列が出来る相談所でも作るうかしら

「申し訳ございません、お菓子が切れておりまして・・・」

マリーが申し訳なさそうに言うと

「いえ、お構いなく」

ソーサーを置いて、真剣なまなざしで私を見ると

「私をかくまうてほしいんです！」

はい?!かくまうて・・・

その時、メリアとセリスが眠たそうにしながら階段から降りてきた
ちやつかり、セリスはメリアの裾を掴みながら尚且つ、

昔買って上げたぬいぐるみを抱きかかえていた

「おはよう・・・姉さん・・・お客様？」

「おはよう、そうよ。だから着替えてきてから降りてきなさい」

「ふああい・・・」

目をこすりながらテクテクともう一度階段を上がっていく

「もう・・・朝が弱い子なんだから・・・ごめんなさいね。」

話を戻しますけど・・・かくまうとは？」

「はい・・・ある方から私は追われているんです・・・

助けてほしいにも、相手が男ですし権力もある方なので

太刀打ちが出来ず、困って居たんです」

まあ、閉鎖都市の人達が敵だと言っているのであれば・・・

この世界で私ぐらいだろうけど・・・

「そう・・・でも、そういうのは話し合いで何とかならないの？」

「ならないから困っているんです！」

そ．．．そんな力説されてもねえ．．．

「その原因って？」

「それは．．．」

ん？結界に異常？でもないか、無理やり入ろうとしている人がいるなあ

「まあ、兎に角．．．うんしょっ」

静かに立ち上がり、家から出る

2人？も目を合わせ慌てて追いかける

結界を破ろうとしている数十人の甲冑たち

殴ったり、魔術を当てたりとガンバっているようです

また無理な事をして．．．

「あの〜私に用ですか？」

「そこに居る！ミラージュ嬢を返してもらおう！」

ふむ．．．穏やかではありませんね．．．

「まあまあ．．．わけを話してほしいんですけど？」

「問答無用！」

また、ガンガンと叩き割ろうとする姿を見る

頭悪っ！

「はあ．．．じゃあ、ガンバって．．．」

そう言つて、踵を返す

ガンガン

．．．

ガンガン

．．．

ガン プチ！

「うるさっ！はあ．．．もーっ．．．」

家の玄関で立ち尽くすミラージュを見て

「ミラージュさん、転移魔法つかえます？」

「は．．．はい．．．動かないものでしたら」

「あの人達の御家まで飛ばせる？」

「ま……まあ……可能ですけど」

そう……なら、邪魔な人は御帰り願いますか……でも、ただ帰らせるだけだと……またきそうだしねえ

その時、玄関の戸が開き着替え終わったメリアが顔を出す

「姉さん、ご飯は？」

「マリーが、用意してありますよ……あ、そうだ」

ポント、手を叩きにやりと笑う

「？」

「とりあえず中に入りましょう。けっちゃん、相手雑魚だからガンバってね」

そういうと、結界が少し光る

「けっちゃんって？」

ミラージュが疑問に思い聞くと

「結界の事。あの子、ちゃんと自我があるのよ。しゃべれないのが欠点なんだけど……今、研究中」

「なんと！我々も出来ずにいた、自己結界なのか？！」

驚く黒猫

自己結界とは、意思を持った結界の事であらゆる障害をも

自己判断し破られる事はないと言われる結界の事である

「もちっ！結界の種類は、魔・聖・物の古代・現代の6種類で

256層にもなる結界をはってるから、破られる事はないでしょ

自己修復もするし。音も消したいんだけど、鳥とか森のささやきが聞きたくてね。作ってないんよ……作ろうかしら……」

黒猫は、目を点にし開いた口も塞がっていない

「ミラージュさん、朝食でも一緒にどうですか？」

「よろしいのですか？」

「ええ、是非」

ニコリと天使の笑顔で

「ご一緒させていただきますわ」

とりあえず、ガンガンうるさい奴らは一時無視をしてと

「美味しい！こんな美味しいの、城でも食べたことないですわ」
絶賛するミラージュ

「ありがとうございます」

ニコリと笑うマリー

何か久々に見たなあ

朝食も食べ終わり、未だにがんばっている外の人達

「さて、メリアには課題を・・・外にいる数十名の招かれざる方たちを打ちのめすのが課題です」

「うおっ！うでがなるう！」

メリアは、火の精霊の所為かかなり戦闘貴族に成り下がってしまいちよつと矯正するべきか考えていたのですが

まあいいでしょう・・・

「今回は、単独ではなく連携を組んでやってもらいます。フェンリル」

スウと私の横に現れます

「お呼びでしょうか？主」

「メリアと一緒に外の方を退治して来てください。これは、訓練です殺すことのないよう監視と指示の連携を教えて上げてください」

「御意・・・メリア・・・行くぞ」

「ああ〜も〜〜なんで、フェンリルとなの〜、姐様がいい〜」

「いいから行ってきなさい。終わったら呼ぶのよ」

「ほあーい・・・」

そう言つて、家から出て行く

「いいのでしょうか・・・あんな幼い子を・・・」

「ふ・・・外見でものを言っではいけないわ。何なら見学しててもいいわよ」

「はあ・・・」

そう言つて外に出ると・・・

UJU<

第6章03 手加減するのよ

未だに結界を破れずにいる男たち

「まだ破れんのかっ！」

激怒する隊長の一言に

「申し訳ございません！頑固な結界でして！いい訳をする」

「ふん！いいわけなぞいらん！速く、ミラージュ様をあの方へと御連れしないと私の株が下がる！」

近衛隊長の男が、いくつもの不手際がバレあまり国王に良い印象を与えて居なかつたのに腹を立てていた

結界の中から何者かが近寄ってくるのを見つけた隊員は叫んだ

「だ！誰かが来ます！」

結界の中から出てくる2人の少女と女性

女性の方は背中まである長い黒髪に黄色い瞳、そして女性特有のすらつとしたフォルムの服を身に纏い

少女の方は、金髪に緑の瞳に赤い皮製の服に黒いズボン姿で、唯一帯剣をしていた

「はあくい、おはようございます。私、セレネ姐の妹でメリアと言います」

何かよく分からないんですけど、とりあえず。無条件降伏及び即時撤退を勧告します・・・でいいんだよね？フェンリル」

「・・・まあ、妥当でしょう」

いきなり無条件降伏などといわれた近衛隊長はというと
プスプスと頭に湯気を出し

「なんだと！そんな事！騎士の長である私に向かって言うのかっ！
激怒するが

「だって・・・じゃないと、仕留めろって姉さんが・・・いうんだもん」

そのやり取りを結界の外で見ていた私は、苦笑します

(・・・私そんな事言った?)

ような事は言ったね

(言っていないって・・・)

ささやかに、否定しつつフェンリルに念話で訂正を呼びかけた

「・・・主からですが、話を聞いてからでも遅くはないと・・・

もし、自分で判断できないのであれば・・・出直すなり、引き下がるなり

するよう申し上げております」

(いや、言っていないから・・・そんなの!)

「き・・・貴様!我らを侮辱するきか!!」

「まあ、そう取ってもらっていいかと・・・」

(ああ・・・これじゃあ、火に油注いでるジャン・・・)

「ゆるさん!」

そう言つて、抜刀する男たち

(ふえ・・・フェンリル?あんたも、メリアに毒されてるよ・・・)

(『そんな事ありません。主セレネ』)

(はあ・・・)

クククと笑うフェンリルを見ると、全くもって説得力がありません

「かかれっ!」

わあゝつと、襲い掛かってくる光景を私は見ていた

こういう人つて、本当単調よね・・・

狙っているところ皆同じなんだから

ギン

槍が皆同じ場所に混じりある音の中2人はその場には居なかった

瞬間移動したように

攻撃を仕掛けた男たちは周りを見渡すが何処にも居ない

「う・・・上だ!」

遠くで見ていた隊長が叫ぶと同時に皆が上空を見た

ニヤつと笑い手には、魔力を溜め込んでいる

「行くよ〜っ 汝の願いを叶えよ、紅き炎よ、聖火の灯火のように燃え上がれ！グラストファイア！」

手に抱えられないほどの火炎弾を地に叩きつけると

猛烈な爆風によって騎士達は吹き飛ば

「ぐあ〜っ！」

爆音と、立ちこめる煙は王都まで聞こえる事となる

「く・・・くそう・・・」

「うそ〜まだ、立てるの!？」

驚くメリアの後ろで

「メリア・・・一発でしとめられないのは貴方の技量不足です認めなさい」

冷静に判断し、忠告するフェンリル

「こらあ〜メリア！皆様のご迷惑になる事しちゃだめですよ！」

結界の中から私は叫ぶ

ティニアになに言われるやら・・・

「ご・・・ごめんなさいい」

下を見るフェンリル

大体2つに分断され慌てふためく騎士たちの姿があった

「メリア、2つに分かれたようですので片方任せます。いいですね」

「オーライト！」

先ほどまで、緑色の瞳と金髪が火の精霊と同調した瞬間

髪と瞳は真っ赤に燃え盛る紅い色に変わった

「・・・いくよ」

浮かれ調子だった声は、全く別人。凜とした声に変わっていた

「なっ！！奴は！精霊憑きだ！きをっ！」

メリルの神速な速さで騎士たちの間をすり抜ける

そして、いつの間にか抜刀していた剣を鞘に戻すと

騎士たちが着ていた鎧が胸元から溶け出し

音を立って地に落ちる

「うああ〜おたすけ〜」

完全に腰が抜けながら逃げ惑う

「に、逃げるな！敵前逃亡は極刑だぞ！」

そんな言葉もむなしく皆が居なくなってしまった

「ん？フェンリルも終わったの？」

「ああ、問題ないが・・・なかなか、芸術的な切り方をしたな」

「まあね、このぐらい出来なきゃ・・・でも、そっちも

並大抵の技術じゃ無理だつて」

フェンリルの後ろを見ると、脚を抱え蹲る騎士たちがいた

その脚には数本のナイフが刺さっている

「で・・・あんた一人だけど？かえる？それとも、私とやりあう？」

「ま！まて！話し合おう、そうだ、そっちのほうがいい！」

そういいつつ、右手には後ろへといく

「まあ、姉さんはそう言ってたしね」

（あいつ、右手に短剣握ってる）

（・・・だな）

（すこし、油断して誘って見る？）

（それもいいだろう）

（OK！）

「確かに、主もそう望まれていますので、こちらです」

踵を返し相手に背を向けた時

ニヤリと笑い男が動いた

（来る！）

（きたあつ！）

男の短剣の刃先は地に向いたまま動かなかった

いや、動けなかった

メリルの長剣は腹部に

フェンリルのナイフは喉元に掛かっていたから

「あら？何をしようとしたのかな？」

「・・・私も聞いて見たいですね・・・」

「ま・・・まで！はなしあ・・・」

冷や汗を描いている男の情けない姿を見ていた私

（はぁ・・・もういいです、やっっておしまい！）

（了解！）

（『分かりました』）

「ぐはっ！」

フェンリルの手套によって意識を闇に葬られた

5分も経っていないと思う

それを、一部始終見ていたミラージュの驚きはすごいものだった
きつと数分はボケーと見ていただろう

「ミラージュさん？」

手をミラージュの顔付近に持ってきて振るが反応なし

「ミラージュさん！」

今度は肩を叩いた

「あ・・・はいつ!？」

裏返った声で反応する

まあ、あれを見て普通は驚くだろうけど

私的に言えば普通だし

「あの人、お家にお返しして上げてください」

「あ・・・分かりました」

そう言つて、転移魔法を唱える

約数分唱えた後あの男たちはその場から姿が無くなった

「どうも、あ！そうそう、ミラージュさんだけに教えますね

その転移魔法なんですけど・・・」

ミラージュの耳元で呟くと

目を見開いて

「えっ！そんな簡単な方法で転移出来るんですか?!」

「ええ、そういう方法もあるんですよ。そうすれば、時間短縮
できるでしょ?」

教えたのは、転移魔法の短縮版

「は・・・はい、さすが黒の魔女と言われてますね・・・
我々の都市以上に魔法の事を熟知しています」

「そうなの？閉鎖都市って言われてるからだと思っただけ」

「この王都の特務に付いている人なら当たり前前に使えるわよ？」

「そ！そんなことまで？」

「だって、私一応近衛隊長だし・・・兼、第5特務隊長だしね・・・」

「だ・・・第五特務隊って！あの噂の・・・」

「噂？え？噂まで立ってるの？！」

最近になって私が設立した部隊、第5特殊任務隊1〜4まであったのだが

あえて私の直轄部隊を編成して作ったのがこの部隊
普通のありえない事件などを担当する部隊なのだが
いろいろと、個性あふれる部隊なのだ

もちろん、私には忠誠を誓っている

フェンリルもメリアもセリスもこの部隊の一員

私は、まあ使えない上司みたいな位置づけらしいけど

大体は、フェンリルが任務を請け負っている

「まあ、ティニアに要請してみたどう？ん〜亡命となると、国籍外
れちゃうし・・・ん〜、援助？いやなんだろうなあ・・・ん〜・・・

国交の調停と言う形で護衛してもらうのもいいんじゃないかな」

「そうですね・・・そのようにしてもらえると嬉しいですね」

「分かったわ。とりあえず・・・フェンリル」

「はい、主」

「ミラーージュさんを王城までお送りして」

「御意、ミラーージュ様こちらへ」

「御世話になりました・・・」

深々と一礼する

「いえ、何も出来ません・・・御元気で」

「はい」

そう言つて、部屋を出て行つた

「姉さん・・・なんだつたんだろうね」

「さあ・・・」

「姐様、そろそろ御庭の方行きましょ
セリスが誘つてくる」

「そうね、そろそろ収穫の頃だもんね」
そう言つて、庭へと向かうのだった

つづく？

つづく、ものすごい誤字をするなあと自分でも天晴れです・・・
いやはや・・・もつ少し、IME君！学習してほしいです・・・
(八つ当たり)

第6章03 手加減するのよゝ (後書き)

reitoo様、誤字報告ありがとうございます

第6章04 強敵現る！

翌日

コンコン

扉を叩く音が聞こえテクテクと、マリーが応対に行く

「はい、ただ今、どなたです・・・か？」

見知らぬ人ならば、結界が阻むが知っている人は素通りする
もちろん、結界からの報告もない

だから知っている人はずんだけど、さっきの反応
何か気になるなあ

「ん？だれ？」

ソーサーとティーカップを両手に持ちながら玄関を見ると

ミラージュと黒猫の姿

あらあら・・・また厄介事かなあ

「昨日ぶりでございます、セレネ様」

「おう、げんきだった？つて、昨日あつたばかりだったか」

「今回は、お願いではなくティニア陛下からの伝言と令状を
御持ちいたしました」

「ん？・・・え・・・」

【セレネ・アキータ近衛騎士兼第5特務隊長

セレネ・アキータに、ミラージュ令嬢の護衛及び事の收拾を命じる

ティスニ王国王ティニア 署名

P.S. 厄介事に巻き込まれるの好きだねえ〜】

な・・・な・・・

「なにい！！あのやろう・・・クロス！」

完全に握り締められクチャクチャになる令状

「伝言で、【まあ、適当にがんばって】と」

はあ・・・だから厄介事は困るんだよ

「で？私にどうしてほしいの？都市の壊滅？知事の抹殺？」

ものすごい怖い事を連発する香苗

確かに、彼女ならやりかねない

とても今、逆鱗に触れられた気分なのだ

「い……いえ、都知事が結婚の話をやめさせてほしいだけなんです」

「はあ？結婚話？いいよなあ……けっこんかあ……いいよなあ」
ズウンとしずむ香苗

「あははは……」
苦笑するミラージュ

結局、私の家に居座る事になった

根本的な解決になってないと思うけど
まあ、対策はこれからって事で……

物静かに佇む一人の女性がいた

日本刀の様な黒嫌さに包まれた物を左手に持ち
その人は呟く

「……ここか……シエラ……」

むすつとした顔でミラージュの方へ振り向くと

「ねえ、いつまで居座るの？」

不満そうに言う香苗

あれから、約1ヶ月経ったが使者と言う使者は
あの結界で全てあしらわれ

メリアとフェニールでことごとく大敗して帰っていく
私に取っちゃん迷惑だ

「すみません……私の我俣で……」

申し訳なさそうに言うと、私も何か

心地よくない……悪者のようで……

「まあ、庭の手伝いしてもらってるからいいけどさあ
そつばを向いて言う」

実は、彼女もガーデニングが好きで庭に行くといつも
意気投合しているのだが、それが終わるとなぜか
不満をぶち当ててしまう

まあ、気を許せる人だからって事で不満を言えるのは
嬉しい限りなのだが・・・相手は、どう思っているのかは
分からない

しかも、彼女の植物に対する知識は
悔しいけど私以上、というよりティニア（元だけど）の次に
師匠と呼べる人の様な気がする

（植物に関するものだけだけど）
暇になってしまった私は

「庭に行くてくるよ」
そう言つて外へ出ると

一人の女性が立っていた
見覚えの無い女性が
「・・・貴女だれ？」

紅黒い皮服に身を纏っている女性が立っていた
というより、その皮服・・・元の世界で見たことがある！
「そ・・・それ、スカジャン?!」

古い服なのか結構よれよれのようで、まだ着られそうな雰囲気のもの
「・・・ほう、この服の名前を知っているのか・・・なら
キツと目を細め

「・・・シエラがいるのだな」
（貴女の知り合い？）

えっ・・・ああ・・・まあ・・・あまりあいたくないような・・・

ここに来た時からの腐れ縁で・・・

(地球人?)

違うわ、ティニアと同じような処遇よ

(そ、なら貴方に任せる!尻拭いなんて嫌だもん)

「彼女に、どう言うよう件ですか?」

その間に、ニツと笑い「私用だ」と言った

ふむ、何かご立腹のようで

(彼女、何か怒ってるよ?)

いや、なんていうか、勘違いしていると言うか・・・

(もー、ならあんた自身で説明して上げなさい!)

ちよっ!まっ

私は聞く耳持たず、シエラの意識を引きずり出す

「結君、彼女入れていいわよ。ああ、もし家壊されそうになったら防いで上げて」

ピーンといい音がする

「あ、名前知りませんが。シエラ呼びますね。あんたも、ちゃんと説明して上げなさい!」

刹那

香苗の周りに風の渦で壁が出来たと思ったたらすぐに止むと

そこには、紅い服を着たシエラが立っていた

『あ・・・あの・・・シエンリン?・・・これには事情が・・・』

オロオロするシエラの姿は見たことなかったけど
なんか、おもしろそう

結界の外にいた彼女は、ワナワナとうつつむきながら

ぼそぼそと呟き、歩み寄ってくる

左手に握っていた日本刀の様なものから綺麗な剣が姿を現す

『・・・シ・・・シエンリン?・・・』

「シエラ・・・さ・ま」

『は!はいい!』

「いいましたわよね・・・貴女が、帰ってきたらならすぐに私のも元へ寄ると・・・」

『あ・・・言ったような気がするねえ』

「忘れてたんですか？」

『ま！待って！話を聞いて！これにはふか〜い事情がある』

「問答無用！！！」

6・7mあつた間合いが1歩で1m近くまで来た

(すごい！)

『！』

シエラも抜刀しカタナを受け流す

『シエン待って！話を聞いて！つてえ！』

シエンリンと言う彼女の刀とシエラの持っていた剣が

弾き合い2つとも宙に舞い地面へと刺さった

『うそっ！』

勢いよく迫ってくる殺気の塊に怯え体を硬直させるが

強い衝撃・・・と言うよいタツクルが決まり

押し倒されるシエラ

「シエラッ！逢いたかった！」

涙と枯れた声にシエラはどうしようかとあせっていたが

どうしようか迷っているようだ

(まったくもう・・・仕方が無い・・・)

香苗が助け舟をよこし

彼女の頭をなでた

「心配かけたね。ごめん」

シエラの声で香苗が言うと

彼女はもう号泣のあまり、20分近く泣いていた

とりあえず、事の事情を説明した

「そうなのですか・・・意識だけ・・・ここに」

しよぼんとする彼女に謝罪の言葉をかける

「ごめんね・・・なんか、本人じゃないんだ。偽者？

かも知れないけど、こんなんでよければ」

『こんなん！つてなによっ！』
体は同じなのに、声は全く違うのが何か違和感を持っているよう
それを見ていた、ミラージユは
「私は帰りませんよ！シエンリンさん」
怒鳴るように言うミラージユをポカーンと
見つめて
「え？」

第6章05 貴方敵なの？それとも

カチャリ

鞘から刀が出る音がする

「え・・・」

いつの間にか間合いを取っている

そして、刀まで抜いて・・・

「シエ・・・シエンリンさん・・・」

黒いオーラがシエンリンさんから吹き出るように出ている

（これは・・・まさか・・・）

な・・・なに？どうしたの？何が？

（危険よ！）

その叫ぶような声に反応して、抜刀する

（フェンリル！皆を非難させて！・・・いや、セリスを呼んで！）

なに・・・なんで、シエンから邪悪な気配がするのよ！

（彼女の心に宿っていたのよ・・・魔族が・・・）

ま・・・魔族って、まさか

（そのまさかよ・・・シエラ・・・本気でやらないと・・・

死ぬわよ・・・）

分かった

（分離するわね）

「『我に宿りし、聖なる魂よ、現世に戻り、舞い上がれ、そして！

具現せよ！』」

香苗の前が突然、突風が吹き荒れ舞い上がったと思ったら

シエラが現れた

「魔力あまり使うんじゃないわよ！私の分あるんだからね！」

『大丈夫、あまり使わないわ！シエン・・・なぜか分からないけど

貴女まで、苦しい思いする必要のないのよ・・・今、楽にして上げる』

シエラが言つと、

「うぐううああああああああああっ！」
目が紅く光りだした

「【貴様達が、ミラージユを預かっている奴らか】」
その声は、シエンの声とは全く違う低く響く声だった

「そうよ。貴女も良い宿り主に会えたようね・・・でも、
その子を選んだのが」

『運の尽きよ』

シエラは腰を低くして、彼女に切りかかった
それを、平然と受け流す

くっ、ブランクがあるかな・・・

「『我に集いし風の精霊たちよ、我に従え！我が前に降臨し
舞い踊れっ！』」

指先に集中し相手に向け、風の魔法を放つ

「【ふっそんな程度か】」

脇にそらされ避けられる

（あんたが、あの子についていなければ、これ以上やってるわよ！）
心の中で叫びながら

（セリスまだっ！？）

《もう！私の眠りを妨げるなんてっ！あと、もう少し！あと少しっ
！後1分耐えて！》

魔に対するならセリスほどの腕前はいないだろうが
ここまで、心に根を持ってしまつと剥がす時に

心が壊されてしまふ・・・

きつと命に関わるだろう・・・

奴を自分自身で彼女から出してもらわないと・・・

そして、束縛する結界魔術を作らないといけない

そこまで・・・耐えないと

しかし・・・彼女・・・

「強い・・・」

バタリと倒れるシエン

「いまよ！」

私は叫ぶ

「《聖なる者たちよ、我に従い、魔に対抗し封印せよ！》奴を娑婆には出すな！」

この子、眠い時と寝起きって・・・怖いよね・・・
誰に似たんだろう・・・

・・・

ちよつと、私見ないでよっ！

しかも！最後の言葉・・・誰が教えたのっ？！

【なっ！これはっ！！聖結界！こんな小娘にこんな大魔術が！】

「なんだか・・・わからないけどおっ！私の眠りを妨げた罰は重いんだからあっ！」

そ・・・そんな理由で？！というか、もう昼だし！起きてもいい時間だよっ！

「《我に契約せし聖精霊『ティーネ』よ・・・》って・・・ああくもーめんどろー！眠いしっ！ティーネあいつ消滅させて！」

ピツと指を刺す

おいおい・・・娘よ・・・そんなんでいいのか？
と思っていたが

【ティ・・・ティーネ？なんだ？そんな精霊】
きつと、しらねえとか言おうとしたんだろっけど

彼女の持っていたペンダントが光だし、精霊が具現化すると
魔族の男も蒼白になり凍った

【う・・・うそだろ・・・マ・・・マリア・・・】

ティーネ の名になる前は マリア と言う名で魔族では、
一番恐れられていた精霊の中の一人、昔は精霊王の右腕として
動いていた物だから知れ渡っていた

【ま！まで！はなしをきい】

《話しなんて聞く耳、持ってないわ。雑魚がっ！》

白く輝く球体に収まってしまった魔族はそのまま収縮し
鈴のなるような音と共に塵へと還った

《ふあく眠い・・・寝ましょ主》

「そうね・・・まだねむい」

目を擦りながら家に帰っていく

・
・
・
・
・

私達の、奮闘はなんだったのだろうか・・・
むなしく思える・・・

ふゆーうと落ち葉が風に舞った

我に返った香苗は

「あ！そんなことより！」

シエラも我に返り

『シエン！』

急いで彼女の元へ駆けつけた

第6章06 ふうん、そうなら

『シエン！おい！シエン！！』

抱きかかえながら、呼びかける

魔族に宿られていたのだから心の負担は大きいはず

香苗はすぐに、魔術で身体機能を確認した

「・・・体は大丈夫だね・・・あとは・・・」

心の問題・・・原因は・・・

ちらつと見る

シエラね・・・

はぁ・・・と溜息をつく

未だに涙ぐみながらシエン！と呼び続けているシエラが

何か可哀そう・・・

あとは・・・この子がどのぐらいの心の強さを持っているか

それによつては、意識が戻らずに・・・って事もありえる

どうしたものか・・・と、悩んでいると

『香苗！シエンをどうにかしてやれないか！おまえの魔術なら』

香苗は首を横に振る

「・・・だめよ・・・魔術でも万能ではないの・・・もちろん、法

術も

人の心を揺さぶる事は出来ても・・・回復や復活なんて・・・

出来ない・・・私達が出来る事は、彼女の心に呼びかけるしかない」

それは、医者が手遅れですと言っているようなものだった

施しようがない・・・どうあがいても・・・あとは、本人しだい

『シエン・・・私が悪かった・・・おまえを残して・・・帰った

すまなかつた・・・許してくれなんて言わない！だが・・・

おまえだけは・・・おまえだけは失いたくないんだっ！』

シエンを抱きかかえ、涙を浮かばしながら叫んだ

その涙が、シエンの頬に滴り落ちる

「……うつ……」
う……うそっ！

そんな速く回復するなんて……古文書に記してあるものだって最低でも1年……いや、下手すると……意識が戻らない事だってあるのに……

目を見開いて驚く香苗

『シエン！私だ！シエラだ！！わかるかっ！』

「……シエラ……サマ……」

『シエン！シエエン！』

なき崩れて、そして彼女を強く抱きしめる

「シエラ……様、何で……泣いて……いる、のですか……」

弱弱しい声で言うシエン

『な……なんでもない……なんでもないんだっ……』

ただ……言わせてくれ……私が悪かった……私が……私が』

「……大丈夫ですよ……シエラ様……少し……休ませてください」

せっかく見開いた瞳が閉じて行く

『ああ……ユツクリ休め……でも、ちゃんと起きるんだぞ』

「……はい……」

そして、彼女は闇の中へと落ちて行った

その後、香苗の体を使ってシエラはシエンを付つきりで看病した香苗曰く、「私の体なんだから休ませてよね！」

と言ってはいるのだが……「すまん、これだけは譲れない」

そう言い返してくるから……どうしようもない……
セリスもやっとなきてきて、聖法で身も心も休まる法術をかけてくれた

「……んっ……あれ……ここは……」

シエンが気づき目を開ける

体が動かないのか、首だけを横にずらすと

ベッドの端で寝息を立てながら寝ている香苗がいた

「・・・誰だろう・・・この人」

そして、また上に向き呟く

「某は・・・死んだのかな？」

『・・・バカツ・・・おまえが死ぬはずないだろう』

その声に驚いた、ずっと・・・ずっと聞きたかった声

「・・・せ・・・シエラ様・・・なのですか？では・・・やはり

ここは・・・」

『安心しろ・・・現世だ、おまえは、悪い夢を見ていただけだ』

「・・・はい・・・そんな気がします・・・セレネ様を襲う・・・

夢を・・・」

そう言いながら、起き上がるうとする彼女を制止させ

もう一度寝かせる

実際、心を操られていたのだから・・・夢とさせれば夢なのだろう

心に隙があったから魅入られてしまっただけの事・・・

『いい、寝ている。今食事を持ってこさせる』

「・・・すみません・・・」

『ああ、お前のためならなんでもするさ』

やっぱりシエラ様だと・・・その時彼女はおもった

「ありがとうございます・・・」

この世界には御粥と言うものはない

穀物を煮込んだものを味付けしたものだ

病みあがりの体にはこれがいいだろうとマリーが言っていた

「・・・おいしい・・・」

ウツつと泣いてしまう彼女

まだ、心のどこかに傷を負っているのだろう

それが癒えさせることは・・・人間にも魔族でも出来ないこと

もちろん、神でも・・・

時間がそれを癒してくれるだろう・・・そう願うだけだった

『感情と言つものがある・・・それは、生きているもの全てにあるものだ・・・だから、悲しんだり笑ったり喜んだり楽しかったりそれは自然の成り行きなんだ・・・だから・・・思う存分泣け』

「うつ・・・うつう・・・」

押し殺した彼女なりの泣き方なのだろう

それを慰めるように、シエラは彼女の頭を優しくなでるのだった

その後、シエンの回復は驚愕するほど順調だった
そして・・・

『シエン・・・ちよつといいか』

急にシエンを呼び出すシエラ

「はい・・・シエラ様」

そして、庭に出ると脚を止め

『香苗・・・ちよつと分離してくれ・・・』

香苗は察しが着いた・・・彼女なりの落し前つてもものをつけるのだろうと

「『我に宿りし、聖なる魂よ、現世に戻り、舞い上がれ、そして！
具現せよ！』」

そして、シエラと香苗が分離すると

それを見ていたシエンも驚いていた

『おまえに話さないといけないことがある・・・』

シエンが来た時の事を全て話した

驚きも隠せないのか、なにやら心当たりがあるのかそんな顔だった

「・・・某は・・・とんでもない事を・・・」

『いや・・・私が悪いのだ・・・私の所為で、おまえに心の隙を
与えてしまった・・・このとおりだ・・・すまなかつた』

頭を下げ謝る

「いえっ！シエラ様！そんな・・・頭を上げてください！」

『いや・・・私なりの・・・けじめがつかない・・・』

そして、その頭を上げ真剣な眼差しで言い放った

『シエン！・・・私を殴れ！』

「えっ！」

『・・・頼む・・・殴ってくれ・・・それで、気がすむなら安い事だ』

「で・・・ですがっ！」

その答えを遮るように香苗が言った

「殴ってやりな・・・彼女なりの落とし前なんだよ・・・あんたを

そこまで追いやった自分が許せないの・・・だから・・・さ

おもいつきり殴ってやりな！」

香苗の方に向き、そして、シエラの方を向いた

「・・・わかりました・・・失礼します・・・」

その瞬間、風が巻き起こったともったら

シエラが6メートルほど吹っ飛んだ

『グッ・・・ッ』

うああ・・・おもつきり殴ったね・・・いったそお・・・

そして、彼女が歩み寄ってくる

「・・・シエラ様・・・私も殴ってください・・・」

『それは出来ん・・・私が悪いのだ・・・』

「いえ・・・私は、貴女との忠誠を破りました・・・

私なりの落とし前をつけてください・・・」

シエンがシエラの手を取り立ち上がらせる

『・・・そうか・・・なら』

グッと目を瞑るシエン

しかし、おもっていた衝撃は来なかった・・・

その代わり、ポカリツと頭を叩くシエラがいた

「え？・・・」

調子抜けしたシエンが、腰を抜かし座り込む

『おまえにはこのぐらいの罰で十分だ・・・』

「せ・・・シエラ様・・・」

さあて・・・これからどうするんだろ・・・

なんだか、王道な展開だし・・・

そんな風に横から眺めていた香苗だった

・・・家族・・・増えそうだな・・・

第7章01 お仕置きに行きますかあ（前編）

予想通り家族が増えた・・・

やっぱり増えた・・・はあ・・・

「で・・・どうする気なの？」

バシツと片手を握り合掌するシエラ

『元凶を叩きのめす』

おいおい・・・冷静なシエラさんはどこですかあ

ダイニングテーブルに勢ぞろい

これでは、まるで家族会議だ・・・

「で？その元凶を叩くって言ってもねえ

しってるでしょ？」

私がシエラに聞いたただす

『・・・知ってるが、これまで卑劣な事をしたのだ

許すまじき行為だ！』

「なんですか？その、”知ってる”って」

セリスが聞いてくる

「セリスは知らないのか？ふむう、とりあえず説明するとね

魔族って言うのは、実は人間から発生するものなの」

「え！私たちからなんですか!？」

「そう、普通なら魔族なんて生まれませんけど

魔族が、人間に卵を産みつけるの。寝ているときにね

それを、皆は”魔の卵”と言ってる。

それが孵化すると、人間の心の闇に巣を作る。

そして、それが成虫と成ると宿り主から離れて

魔族と言う形になるの」

「へえ、でも今回は宿り主に居ましたけど」

「そう、そこなの。魔族としての暗黙の了解・・・いえ、

魔族としての掟として、宿り主には極力負担をかけてはいけない

という、考えなのよ。結構、魔族って義理のいい奴なんだけど

中にはそう言う事をしない奴が居る、いわゆる、味を占めちゃう奴ね
いちいち、人間の負の感情を探さなくても中に居れば
いずれ負の感情なんていつももあるんだから。

だから、ずっと居座り続ける奴が居るわけ」

その話に割り込んでくるメリア

「でもさ、おきてを破ったらどうなるのさ」

「普通は、そこで抹殺されるわ。でも、相手も魔族

そんな下手な事はしない。悟られずに、宿り主にも気づかれずに

ずっと居座る奴も居るの。それが、今回の奴」

『だが！我々に被害が有ったのも事実！話を付けるいいチャンスだ
！』

「まあ、そうだけどさあ・・・はあ、こんなにまで熱くなるシエラ
始めてだよ」

呆れたような口ぶりに皆も納得する

「とりあえず、話だけでもつけてくるって事でいいんじゃないです
か？」

「確かに、監督不屈きだよね・・・ふむ、とりあえず話しだけでも
つけてきますか・・・まあ、魔族の長も顔見知りくらいにはなりた
いしね。

今後の対策も講じたいし・・・行きますか・・・とつても準備もま
だし

まあ〜気楽に行こう」

あんまり乗り気じゃない香苗

「あ〜それと、シエラ。あんた暴走するんじゃないよ。い・ち・お・
う

私の魔力だつて事忘れないように！」

『う・・・善処する・・・』

「よろしい、なら2日後の朝出発しましょう。それまで、各自準備
を整えて置くように」

はい！

2日後

「よし！皆、じゅんぴはできた〜？」

皆、無言の頷き

「よし！ではない・・・こう・・・ともつたのに！何よ！今度は！」

目の間にいたのは、背中にこうもりの様な羽の生えた人間だった

「魔族・・・だよね？」

確かめるようにメリアが私に聞いてくる

「ううん・・・たぶん、書物と同じ格好だし

セリスが倒した奴にも似てるから」

と、話し合っているとき

「我々の破門にした同属を殺つたのは貴女たちかな？」

なんか、紳士っぽい口調の魔族だなあと感心してしまう

「そうよ、とんだ迷惑を受けたわ」

「それは・・・とんだ無礼を、我々も謝罪いたそう・・・

それに付いて、貴方たちに御話があると長が申しております。

ご同行願いますかな？」

「あら、御迎えなんて。結構ですね。私たちも伺おうと思っていたのですよ」

「それなら、話は早い是非一緒に一緒くださいませ」

その魔族とやらと一緒に巣である場所封印都市ラグーンへ行く事に相成った・・・

第7章02 お仕置きにいきますか(中編1)

こういうとき、お迎えが来るって言うよ

一般民は、貸しきりバスとか自家用車とかだるうけど

富豪でも、リムジンとかベンツとかそういう類がいいなあ

と、香苗は思うが・・・

ここは異世界、エンジンも開発段階で大きいし車サイズなんて
まだまだ、とりあえずメルト・バルスキー(現バルン州ミツカド市長)

にエンジンの構成などがある程度教えて置いたから

いいのが出来るはずである・・・魔術を使ったクリーンなエンジン
貴重な魔術師を使わずに馬も使わずに移動が出来る車が出来れば
産業発展の極めに成るだろう。まあ、一応

私は、戦闘機エンジンの整備員だったからそういう知識も豊富だったの

教えておいたのだけど・・・まだ、完成したと言う声がかからない
と言う事で・・・いま、まさに！馬車と言う代物に乗っている。

コトコトと、車軸が回る音を聞いていると眠くなる・・・

「・・・暇・・・」

香苗の血液型は『B』なので、落ち着いていられないのだ・・・
むわあ~~~~っ！もーだめ！限界！

馬車の上にある通気口を全開に開け顔を出す

「すみません、もう限界なんで散歩して来ます」

「は？ちよっ」

シュツという風の切る音と共に香苗は舞い上がった

それを平然と見ていた、メリアとセリス、そしてフェンリル
実は、この3人だけ連れてきた

残りの者は、何かしら理由を付けて引つ込ませたのだ・・・
敵陣地に行くのだから、卵を産み付けられちゃ困るしね

唯一精霊憑きには卵を産み付けられないのだ。
もちろん、聖獣にしても同様である

一人に一つしか器が無いため、とりあえず自衛手段を講じるためにも
精霊憑きじゃ無い者は家に置いてきた

「あの人は・・・全く落ち着かない・・・」
メリアがぼやく

「まあ、御姉様ですからねえクスクス」
セリスが笑いながらいった

「・・・主様・・・」

呆気にとられるフェンリル
馬を操っている魔族も卵を産み付けてやるうかと思っていたが
メリアはともかく、セリスから湧き出る聖の気で近寄れなかった
わざと少しずつ出して自分でも自衛手段を行っていた
そういう、冷静且つ賢い頭脳を持っているのがセリスなのだろう
フェンリルも同じことをしているのだが

「はあくきもちいい・・・」

実際、こんな大空を飛ぶなんて考えたこと無かった
私を整備した戦闘機が大空に飛ぶところを見て
羨ましいと思つたことは、何度もある

でも、唯一思う事は『無事に帰ってきて』と言う願い
戦闘機を誘導して、見送るときの敬礼

パイロットもそれに気づいていつも敬礼してくれる
そして、いつも笑顔だ

だから、帰ってきて欲しい。私の仕上げた戦闘機と一緒に
そんな昔のことを思っていた

「私が、大空に飛ぶなんてね・・・しかも、飛行機と言っ
機械じゃあなくて、私一人で飛ぶなんてね・・・」

独り言を聞いていた、シエラが問いかける

『香苗？あんだ、元の世界で何してたの？』

「あれ？言わなかったっけ？」

『いや、自衛隊に居たって事だけしか聞いてないよ』

「そっか、私戦闘機のエンジンを整備してたの。」

「F-15Jっていう、双発ジェットエンジンのね」

『F-15？聞いた事ないわね・・・私の頃は、零式戦闘機とかだったから・・・その、ジェットエンジンって何？』

「あはは・・・」

そこからかいな・・・

説明してあげようと思ったとき

「！？」

何かに気づき、前方を直視する

「・・・鷹？・・・いや、使い魔ね・・・」

きつと、私達の偵察にでも来たのだろう

その場に、滞空しながら考える

(どうしようか・・・ん～、危害を加えようとしてるようにも見えなくもない・・・ん～)

とりあえず・・・

香苗は、手に魔力を込める

その大きさは、ハンドボールぐらいの大きさだ

「『汝、森の精霊と契約を告ぐものなり・・・周囲を照らし、隠れる物を照らし出せ・・・Suche』」

透明な、魔力の塊が緑色に染まるとそれを放り投げた

落下速度を上げながら、地面に設置すると

雫のように波紋を作り出した

それを落としながら思うことがある・・・

ここの魔術は、ほぼ地球の言語を利用したものが多い

今回のも、ドイツ語・・・だったはずだ・・・

そこら辺も何か関係あるのだろうか・・・

ふと思いながら探索を続けた

(・・・居た・・・2・・・3・・・5・・・7・・・7人か・・・)

その時、フェンリルから念話が届く

(『香苗様、いま微かに魔力の波動を感じましたが・・・』)

(あ、それ私。ちょっと不穏な動きがあっただね、探查魔法使ったのばれた?)

(『微妙ですが・・・聖獣並みの感覚じゃなければわかりません』)

(そ・・・そう、あと数キロのところに魔族らしいものが潜伏してるから

とりあえず、全員起こしておいて。どうせ寝てるんでしょ?)

(『・・・その通りです・・・起こしておきます』)

(私も今戻るわ)

(『了』)

帰ってきたもの・・・

「・・・起きてない・・・」

「すみません、主・・・何度も起こしたのですが・・・」

「はあ〜っ」

長い溜息の後

「こりゃあ、殺しがいがあるもんだ・・・」

ド強いさつきを放つ香苗

ビクッ!と跳ね起きるメリアとセリス

「姉「さん」様」

何がなんだかわからない様子 of 二人

「・・・フェンリルが何度も起こしたっていつてるけど・・・

何で起きなかつたのかなあ〜」

「そ・・・それはあ〜」

「あ・・・ですね・・・御姉様」

あわわわつと、いいわけじみた事を言う前に

「いいわけ言うのかな?」

「「ごめんなさい」」

「よろしい、起きて早速なんだけど・・・お客さんみたい」

ニコツと笑う香苗

それに気づき、剣を握るメリア

そして、弓矢を取るセリス

「セリス、これ上げるわ」

差し出すのは、私の愛用していたアーチェリー

「え！でもそれは・・・」

「いいの、もうちょっと時期を待ったほうがいいと思ったんだけどね
いい機会だし、使って見なさい」

「は・・・はいっ！」

私のアーチェリーに持ち変える

「軽い・・・」

ふふっ、と笑う私

さて・・・どんなもんなんだか・・・

第7章03 お仕置きに行きますか(中編2)

閉鎖都市ラグーンへいく途中だった

香苗が「お客様みたい」と言つと

馬車は止まった

「どうしたの？」

すでに、香苗を含む4人は馬車から降りて居た

そこに居る7人の魔族そして・・・

「アンタもグルだったわけね」

送迎のために来た2人の魔族もそこに加わって居た

「残念だが、あんたたちはここで亡き者になつてもらつ」

香苗以外全員が臨戦態勢になる

「ちよつと聞かせてもらつてもいいカナ？」

「なんだ、冥土の土産に伝えてやろつ」

「ちよつとしたことよ」

光沢のない、黒い衣服はなんとも言いがたい神々しい姿の香苗

「ラグーンの市長の命令？」

「はっ、あんな奴の命令なんて聞けるか！気づいて居たんだろ？」

「まあ〜なんとなくね・・・一応確認よ・・・そう、残党かあ・・・

フムフムと、納得したように頷く

「うん、OKとりあえず、ラグーンとの戦にはならないことがわかつただけでも、収穫」

ニコリと笑う香苗

「はっ、そんなゆうちよなこといつてられる状態か?!」

「ん〜まあ〜なんとかなるでしょ。4対9だけど・・・一人につき2人相手にすればいいわけだし・・・」

「こちらは魔族だぞ。何を根拠に!」

「こつちだって、精霊憑きが2人聖獣1その他・・・私だけど1居

るからね」

ドッコイドッコイよ

と、言い放つ

「その余裕が、仇になるなよ！いくぞっ！」

その合図の前に、香苗が魔術を放っていた

地中から衝撃が走り、走り出そうとしていた魔族の一人が飛ばされる

「バーカ・・・そんな、『いくぞ』なんていったら、いつ来るか解
つちやうじゃない・・・」

呆れたように呟く

飛ばされた魔族は自慢の羽で宙に浮く

「キサマア！！」

それを合図に、残りの者も突進してくる

香苗は、片手に剣を抜刀し構える

4人に向かって魔術波が放たれ、香苗は結界魔法で受け止めた

「セリス！」

後ろで2本の矢を構えていたセリスが矢を放つ

一人の魔族の右肩と左足に受けた矢はその場所を恰もなかったように
消滅させた

「ぐあああああああっ！」

勢いあまって、砂煙を上げながら転げる

そんな仲間も気にも止めずに、香苗に長剣が振り下ろされる

すぐさま右手に持っていた、長剣で受け流すと背中越しに

左手に蓄えていた魔力を魔族に放つ

ドンツ「」はっ・・・」

鋭利な矢のようになった魔力の塊に、その魔族の背中に空洞が出来た
しかし、その時の香苗に隙が生まれた

一人だけならよかったが、その後ろにもう一人いた

香苗！

剣を下に下ろしていた状態だったため、剣を受け止める体制になる

「主！」

それに察知したように、フェンリルの投げるナイフが相手の手の甲を貫く

貫いたナイフの剣止めに手の甲が当たり勢いあったためその魔族は、左回転しながら転がり落ちた
まるで、その場でダンスを踊っているように

「サンキュ、フェンリル」

「い・・・いいえ」

フェンリルは、サンキュの意味が解らなかつたらしいが、礼を言っているのだからと受け止めた

これで、残り7人・・・

楽勝だと思っていたが・・・

やはり、4対7はきつい・・・

ここで、封印を開封すると多くの敵を作ってしまう・・・

魔族自体、光の民を良い用に思っていない

それどころか、敵対心バリバリなのだ

それだけは避けたかったが・・・

「仕方がない・・・か」

封印を、解除しようとしたとき

なにやら、遠くから馬の音が聞こえ出した

リーダー格の男が、苦虫を噛み締めるような顔をする

「クツ・・・予定外の邪魔が入った！ここは引くが、

おまえの命はいつも狙われていることを覚えて置け！」

そう言い放つと、煙を巻いたように魔族たちが消えていった

皆、武装を解くと遠くから聞こえていた騎士らしき人物が見えてきた

胸にある紋章・・・

「ラグーン騎士か・・・」

ボソリと香苗は呟く

馬を止め男の一人が

「おまえたちか？ここで魔術を使ったのは！」

「ええ、賊に囲まれたので仕方がなく」

穏便に済ませようと、嘘を付いた香苗

まあ、嘘ではないのだが・・・

「賊とは、魔族か？」

「ええ、9名ほどの」

「そうか・・・我々も、見回っているのだが・・・

何か取られたわけでもなさそうだな」

「ええ、命が取られそうになっただけです」

「そうか・・・私は、ラグーン第1騎士隊長アフル・スーザーだ、私の名前を言えば、謝罪金が貰えるはずだ」

「これはどうも、名乗られたからには私も言わなくては・・・

デイスニー帝国近衛隊長 兼 第5特務隊隊長の

セレネ・アキータです。お見知りおきを」

「せ・・・セレネとは・・・あの噂の・・・」

「黒い魔女とか、死神とかいっいたら、殺しますよ？あ・・・失礼、打ちのめしますよ？」

どっちも同じような気がするすると、後ろにいた同行者たちが思った

「こ・・・これは失礼・・・ラグーン市に、何か御用で？」

凶星だったのだろう、声が裏返っていた

「ええ、市長にお話が・・・先ほどの、魔族と・・・」

意味ありげに、目を細め

「ミラージュ妃について・・・」

その言葉に、目を見開き

「解りました。私を取り次ぎましょう、ラグーン市まで一緒にいたします」

「お願いします」

ニコリと、笑みを浮かべる香苗だった

さあ・・・どんな人なんでしょうね。ラグーン市長殿・・・
魔族と、ミラージュの件も一緒に片しちやいたいなあ

第7章04 お仕置きに行きますか(後編)

閉鎖都市

外部からの情報を全て遮断されている

まるで、浦島太郎状態だろう

市場にも活気というものもなく

通りすぎる人の瞳の奥に気になる光を見た

(・・・魔族に操られてるわね・・・まるで、牧場・・・)

植民地というものはこういうものなのかと

昔、歴史の時間に聞いた事があったが

こう目の当たりにすると、なんとも言いがたい心境になった

まるで、生ける屍ね・・・

(『シエラ様、あまり良いたえではありません』)

フェンリルが、シエラの意見に首を突っ込む

(<そういわれても、仕方が無いようにみえますわ・・・>)

セリスは、シエラの意見に賛成のようだが

(>信じられない・・・まだこんなところがあるなんて<)

目をそむけながら、会話に参加して来たメリア

全ては魔族の所為だろうと、簡単に片付けてしまえばそうなのだろうが

うが

香苗は、なにか深いところに意味があるように思えて仕方が無かった

しかし、街並みはまるで空中都市・・・地球の南米ペルーにある

マチユピチュ・・・それを、巨大化したような街並みだった・・・

いわゆる・・・絶景・・・

しかし・・・活気がないがために・・・それも、半減してしまうほどだった

謁見の間に案内された香苗一同はドアの前に立ち声がかかるまで待

った

「謁見希望のものよ、入りたまえ」

声的には、30代の男性の声に聞こえた

その周りにいる女性たち

やはり、目は虚ろ・・・何を見ているのかもさえわからないほどだった

魔術・・・いや、この周りに漂う魔性に満ちた魔力に踊らされている
そのように、香苗は見えた

何処の王や、帝王にも膝を付かない私たちは直立不動で彼を見た

「御初にお見えにかかります、私わたくしデイスニー王国近衛隊長兼 第5

特務隊長のセレネ・アキータです」

「ラグーン市長のダリア・オディーヌだ。我に何用か？」

「回りくどいことはよしまししょう。率直に言います。用件は2つ

一つは、魔族が我々の領地へと入ってきている事、貴方たちが行っている
いろいろな、ことは我が王も見過ごすわけにはいかないとおっしゃ

っております」

実際は言っていないけどね・・・

「貴方たちが行っている、『事』についてお考え直していただきたいとの陳情を受けております。もし、考え直さなければ我々にもそれなりの『事』

をしなくてはなりません。いわゆる忠告です。それが一つ・・・

もう一つは、先日私の所へミラージュ妃が亡命されました。

亡命されたからには、そちらからの関与があり次第、我々も動く所存です。

もう、国籍・・・いえ市籍と申しましょうか・・・それを、放棄したと・・・ご本人から承っております。我々も、デイスニー王国法第298条の『亡命者に関する法律』に法り、保護するとの王からのお言葉です。

それを、伝えに参りました。ご意見等ございましたら、お答えきる

限り

返答いたしますが？」

ズラズラツと言いめくった香苗に、途中で反論も出来なかった市長の顔は険しさをました

「・・・シユンリンはどうした・・・」

「ああ、それもありましたね。そちらも、亡命すると・・・いや、難民でしょうか・・・」

ダンツと座っていた手置きを叩いた

「・・・そうか・・・そういうことか・・・」

クククと笑い出す市長

とち狂ったか？と、香苗は思った

が・・・

「よかるう・・・忠告感謝する・・・だが・・・それで終わったとは思うなよ」

静かに立ち、剣を抜刀し香苗に向けた

『我々が、この街を支配していることはおまえらには、解っていないようだな・・・そして、今の状況も』

さっきの声とはまるで別人の口調で言う市長

しかし、皆身構える事もなく平然としている

やはり、香苗の家族である証でもあった

どんなときでも、動じない。そう教えているから

「私たちは、どんな状況にもなるうと・・・動じないよう、訓練されています。たとえ・・・瀕死な状態になるうとも・・・それがお

解りですか？」

『戯言を・・・』

「残念ながら、戯言じゃないんですよ・・・」

ニコリと香苗が笑いそして言った

「そのぐらい私達は強いってことなんですよ・・・お分かり？市長さん」

『ククク・・・アハハハハ、おまえバカか？周りをよく見てみろっ

て
『

「ん？知ってるわよ。もう囲まれてるってことも、人数もね・・・でも・・・それで、脅してるわけ？ないわよねえ・・・」

『何！？』

「私もね、伊達に、近衛隊長やってるわけじゃないの。それなりのことをして・・・（してないかもしれないけど）るつもりだからよく考えて見れば、私ってこの世界じゃあ何でもありなんだよね・・・

・
無敵と言えば無敵なんだろうけど・・・

しかも、私の体よくわからないけど。傷ついてもすぐに直っちゃうし・・・

この前なんて、転んで、グサツって枝が掌を貫通したのに・・・10分で直っちゃうし・・・なんか、自分・・・人間だーって、言えない・・・かも・・・

『じゃあーこの危機的状况、克服してみなっ！』

市長が、首を切るような動作をすると陰に隠れていた刺客たちが動き出した

第7章05 お置き決行！（前編）

最初の一撃を与えたのはセリスの矢だった

一瞬にして音速より速く走るその矢は

放たれた瞬間に爆音を放って飛んでいった

刺客たちの行動が止まる

セリスの網膜には、私が彼女に贈ったアーチェリーからの

情報が表示されているはずだ

それは、私が光の妖精に指示したものである
プログラム

航空自衛隊にいた私は、FCS火器管制システムも携わっていたので

こういうときに便利なのだ

光というものはとても便利であることは間違いない

そのアーチェリーから放たれる光が測量し
レーザー

計算などもその専用の妖精が行う、微調整は弓そのものが行うため

ある程度狙いを定めれば小さなセリスでも扱うことは可能なのだ

そして、聖属性の彼女が放った矢は弓から離れる寸前に

音速を超えソニックブームの爆音を放ち刺客の一人の胴体を根こそ

ぎ持って行き、その後ろにあつた壁までも持っていった

もちろん、刺客の頭から腰まで無くなっている

壁は、直径1mほどの大穴が開いていた

「セリス！少しは手加減しなさい！」

耳をポンポンとたたきながらセリスにいう香苗

「はあ〜い・・・」

少女にはまだ、手加減というものを知らない・・・そもそも

今回始めてその弓を使ったわけだから仕方がないのだが

それでも、手加減をしたほうだろう・・・しなかったら

この、城そのものをふっ飛ばしかねない

「はあ・・・で・・・、あなたの言っていた。危機的状況って

どんな状況なんでしょうねえ」

にやりと笑う私の手には、魔力が増大してソフトボールぐらいの玉が発生していた

もちろん、相手は魔族だ

対魔族用の聖属性に変化させる

「クツクツ……だがな……絶体絶命の数だったらどうする？」

ククク……」

そういうと、指を鳴らす

ゾワッ

私の体に凍るような寒気を追った

(な……なに?)

(『主……外から無数の敵意を持った者たちが押し寄せてきます』

)

(しくつたわ……外にいた魔族を呼んだのね……)

多勢に無勢……

(全員に通達!ここは撤退します!セリスが開けた穴に向かいなさい!)

念話で指示するとみないつせいに行動した

「魔族の長さん!今回は、撤退するわ……だけど……私を怒らせたことを後悔させてあげるから、覚悟しなさい!」

「姉さん……それなんか、負け犬の遠吠え……イタッ!」

メリアの頭を殴る私

「だまらっしゃい!」

「ククク……待っているぞ……アハハハ」

仕方がなく、私たちはそこから退去することになった

「悔しいわ……あのやろう……絶対つぶす!」

『まあ、落ち着け……』

「これが落ち着いてられるの!絶対ぶつ殺す!メタメタノギッタンギッタンにしたるわ!」

怒りの力によって、近くにあった大木が見事に切られ

ズドーンと大きな音とともに倒れた

「ある意味、姉さんって起こると神より怖いかも」

ボソツと呟くメリアに香苗はにらみつける

「なにかいったっ!？」

ブルブルとメリアは首を振る

「にしてもどうするの？相手は団体魔族さんだよ？」

セリスの言うとおりである・・・団体力の強い魔族が

族を作ると厄介なため、ほとんどがその団体を作る前に

消滅させるか去勢（卵を埋めつけさせる能力を剥奪させる）

のだが・・・

こうも隠密に作り上げられてしまったのだから・・・どうすればいいのか

とても迷うのだ

しかも、あの状況だとほとんどの魔族は人に寄生している

人を殺すのもいやだが、殺しても魔族自体は生きているため

あまり意味を成さないのだ・・・だから、人間のほうを無力化させ

その後出てきた魔族をたたくのが一番いいのだが・・・

「セリスが、魔族をあぶりだす・・・のも無理よね」

セリスより私のほうが魔術的なもの聖術的なものも長けているため

聞くまでもない

彼女が聖域を作るとしても私の家一個分がいいところだ

城全部もしくは町全部に聖域を作ることとは不可能・・・

さてどうしたものか・・・

そのとき

「主、私にいい考えがあります」

突然言い出したのは、フェンリルだった

第7章06 お置き決行（後編）

「あのさ・・・フェンリル・・・私の部隊を呼ぶのは解るよ・・・」
苦虫を噛み締めるような顔をするフェンリルが「はい・・・」と応えるが

「でもね・・・あいつは余計でしょ」

私の第5特務部隊の面々の前に聳え立つ人物こそ余計なものだ・・・

「なんだい？余計なつて、僕の事かい？」

僕の事？と言った人物こそ、デイスニー帝国国王ティニアその人だった

「そうよ！なんで、こんなところにいるのよ！そもそも、あんたが私に『後始末はおまえがやれ』つていったんじゃない！何で来るのよ！

それに！公務はどうしたのよ！公務はっ！しかも！僕つて何だよ！僕つて！もういい歳こいてんだろつがああっ！」

「え？えーと、官房長に『任せた』つて書置きして来たし、まだまだ花の40台だよ？僕でいいじゃないかあ」

テヘツと笑うティニア

内心『コロス』と思いつながら拳を握るその手には、やはりどす黒い魔力が

こもっていた

「ああ？花の40だあ？・・・綺麗な嫁さん持つて、しかも子供まで生んで！そういう事言うんだあ〜はあ〜そうかいそうかい！」

あせったティニアは

「あ〜〜、ね、面白そうだからさあ〜来たんだつて。ね、僕がいれば

それなりに話は進むでしょ。ね。ね」

その仕草は、まるで子供だった・・・どうも、私と会話をすると子供に戻るらしい・・・というか、私が年を取らないから

だと

ティニアは言うが・・・

「話が進むばかりか・・・危険すぎるんですよ！解ってるの?! ええっ!」

にらみつける香苗

一応は近衛士なわけで・・・王を危険な場所につれていきたくはないのは当たり前であって・・・しかも、40台の爺だぞ・・・

そんなの足手まといの他、何があるってんだ!

「まあ、良いじゃない」

と、ニコニコとするティニアに、香苗は溜息をつくしかなかった

「で、ミリアとはどうなの?」

始めて、あったのは確か最初の頃のレストランだったはず

あのときは、幼馴染って感じだったけど

本当に結婚しちゃうとは思わなかった

私的には少しだけショックだったんだけどね

まあ、幸せならそれでよしとしよう

「うん、元気だよ。セレネに『よろしく』だって、

それと、ミンクも『また遊ぼう』だってさ」

ミンクとは、ティニアとミリアとの間に出来た子供

私とは仲がいいんだ

「そう、それならいいわ」

なんか、複雑な気持ちになる私・・・

「ティニア、アンタ私にはなれないようにね! いい! 解った! それと・・・」

私は、持っていた魔具を渡す

「これを持ってなさい。あんたに、卵産み付けられちゃ困るんだから」

腕輪の様なものを渡す

「ゼー！たい、外すなよ！いい！解った！寝るときもだぞ！」

「うん、解った」

「本当かよ……」

渡した魔具は、産み付けられた瞬間、その卵は体内で分解される作用を持つ腕輪

分解された卵は魔力に変わるため、一石二鳥の代物なのだ

その後、作戦会議が行われた

私の第5特務部隊の全てがいわゆる、物怪もののけと言われるものの類である
聖獣・魔獣・精霊の第一級扱いのものが全てである

そのため、人型に変われる能力があるため皆、人型に代わっている
もちろん、光の民である香苗に忠誠を誓っているので、優秀な部下
達なのだ

そのため、近隣の国はデイスニー帝国に反旗を立てることは、国の
玉砕に繋がるわけである

「……では、この作戦で異議のある者は？」

フェンリルが言うところ「皆が『無し！』と応える

これも、香苗の自衛隊時代に教え込まれたことをそのまま訓練で
活かしている

自衛隊では、質問がない時『無し』と応えるのが一般的なのだ

「では、明朝日の出4石（4時間）後実行に移す！解れ！」
バツ！と敬礼をし、皆が一斉に消えた

本当に消えた……いつも思うのだが、どうやって消えるのだろうか
かと

疑問に思う香苗だったが

「主、明日も早いので、お休みになられてください」

「うん、解った。後は頼むよ」

「御意に」

第7章06 お仕置き決行（後編）（後書き）

s p e c i a l t h a n k s

宇佐美様

ありがとうございましたっ！

第7章07 お置きき実施！！（前編）

寝袋で包まっていた私

外からは、小鳥の鳴き声とお天道様からの日差しで
テンとの中は、明るく照らしていた

「ううん・・・」

ムクリと起きると、目やにが付いていたので
目を擦りながら開くと・・・ひ・・・

「ひああああああつ！」

隣には、なぜかティニアが！がああああ！

な！なんでえ！どうしてえ！こいつがいるのっお！

「ううん・・・カナちゃん・・・うるさいよう」

なななななな・・・何がカナちゃんだあ！

ゲシッ！と肘撃ちをかます私

「ふぐう！・・・」

混沌させてしまい、あせる私

「ティ！ティニア！おきろっ！」

揺さぶる私、だが、未だにピクリとも動かなかった

キャンプ広場

「それでは、行動を開始してください」

フェンリルが仕切ると

皆、それぞれの姿に変わり散って行く

「では、セレネ様・・・」

「ねえ・・・本当に私この格好で行くの？」

その姿は、囷潜入の時使った身体変化の術で、

10歳程度の姿になっていた

「いつ見ても、それって詐欺ですよね」

ティニアが呟くと

キツ！と私はティニアにらみつける

「ナンカイツタ」

「いえいえいえいえいえいえいえいえいえいえ！！」
首が回転しそうなくらいに横に振る

「たくもー・・・はあ」

長い溜息をついた

ひっそりと静まり返った市場に足を踏み入れる
歩いて来る人もやはり、生気が無い
そして、城門の前に立つ5人

（時間は？）

（『まもなくです・・・』）

と、その時

半円球状の物が城全体に覆いつくした

「完成です・・・あとは、我々の部下たちが何とかしてくれるでし
よう」

「そう、ならいごうか」

「着たか・・・ククク」

そう呟く知事の後ろにひっそりと立つ者がいた

バン！と扉を開ける

私は、堂々と

「さあ、再戦に来たわよ」

「ああ、まっていたよ。愚か者さん」
なにおう！

「なあに、私が手を下すまでもない・・・この娘が御相手してくれ
る」

そついうと、男の後ろから現れた女性

その女性を知っている者たちは目を見開いた

「な・・・なんで・・・ミラージユさんが・・・」

ミラージユの瞳は、赤く染まっていた

そして、右手には細長いレイピアの様な剣も握られていた
彼女の潜む、悪魔の卵が孵化したことを表していたのだ

つづく

最終章 お仕置き実施（後編）終了！

「ど……どうして?! ミラージュさんが!?!」
メリアが驚愕の声を上げた

（……私は感じてはいたんだけどね……）
私もよ……

「ミラージュさん! 私よ! 解らないの?! メリアだよ!」

必死に問いかけるメリアだが、無情にも黒い鞘から刀を出した完全に、魔の力に押さえ込まれている……いや、これは……

「まあ、予想していたんだけどね……ねえ、私こんな小さい姿にしなくてもよかつたんじゃないの?」

「あ……だつて、その格好可愛いじゃん」

密かに後ろにいた、ティニアが呟く

「あとで御仕置きね」

冷たい笑みを、ティニアに返してやった

「さて……彼女も、腕試しした言つて顔してるから……

しかし……珍しいわね……聖と魔の混種?」

『奇跡に近い人物よねえ（いつみても）……』

「でも2対5……いや4か、それじゃああれよね」

ニヤツと笑う私に

大笑いをしだす知事

「あほらしい、また前回と同じになるぞ?」

「ちつちつちつ、そんなこともう手配済みよ」

「なに?」

香苗がパチンと、指を鳴らす

するとどうだろうか、何処から来たのか数十人の適えと色違いの服装の者たちが香苗の後ろに立っていた

「ちつ……警備の者はどうした!」

叫ぶが、誰も返事が無い

「おい！だれかいのか！！」

沈黙を破ったのは香苗だった

「皆さんは、お休み中よ？私たちが休暇を与えたわ」

「この尼！勝手なことしやがって！」

「知らないわ・・・、そんな戯言いいから、どうするの？

誰と戦いたい？・・・あ、もう一人いるのよ？剣の達人」

「なんだあ？！」

「『我に宿りし、聖なる魂よ、現世に戻り、舞い上がれ、そして！

具現せよ！』」

いつもながら、香苗の周囲に白い竜巻が起きたと思ったら

そこから、1人だったはずが、知らないもう一人の女性が立っていた
かなえも、幼女姿から元の姿に戻っている

『御初にお見えにかかるわね、知事・・・それと、御久しぶりかし

ら？ミラージュ・・・いいえ、きょうき境葵』

「あ・・・あんたら、知り合いなの？！」

香苗も驚愕な事実を知り、驚く

『まあ、腐れ縁No.2かな？』

「じゃあ、ミラージュは貴女に任せるわ・・・それと、知事？

どれがいいかしら？メリア？それともセリス？フェンリル？

ああ〜言っておくけど、ティニアはダメよ？」

「フン、おまえに決まっているだろ？セレネアキータ！」

そう言い放つと、腰に携えていた剣を抜いた

「そう、私を指名なのね？・・・フェンリル！例の物を」

「はい、主殿」

そう言つて、持って来たのは長さ1.5mほどの布に隠されている
物だった

「実はね、バルン州に知り合いがいてね。作ってもらったのよ」

バツと布を取るとそれは、黒い鉄で出来た塊だった

直径7.62mmの筒がある筒状の物体

香苗以外知る由も無い得体の知れないものだった

「じゃつじゃくん！」

「な・・・なんだそれは？」

「ふふふ・・・64式7.62mm小銃（改）！

重さは、重力魔力制御によってほぼ0kg！

7.62弾頭は・・・じつは、通常弾のみ・・・

（（ノー！））

だけど、最大15発の射撃が可能！通常弾なので

飛距離は500が限界かな〜と、説明はそのぐらい・・・

でね、私、剣術って苦手なのよ・・・でも」

腰の後ろに手を回し、短剣を抜いて銃にさした

「銃剣道7段の腕前、披露して進ぜよう？・・・ああ、

銃を撃つのは反則よね？あ・・・銃自体解らないかな？」

クククと笑う香苗

「ふん、笑わせるな！おまえの持っているのが銃だと？

信じられるか！銃って言うのはもっと細長いものだ！」

・・・たぶん、火縄銃の事よね？

「なら、試して見る？」

マガジンを入れ、薬室に弾を込め

タアン

撃った後、からの薬莢が飛び出す

弾は頬をかすめて飛び、男の頬には一筋の血が滴り落ちた

「な・・・ば・・・ばかな」

「まあいいわ、じゃあ、始めましょう」

『やっと、前振り終わり？長いわよ！』

「いいのいいの、だって・・・一瞬で終わりそうなもの」

呆れたような表情で見つつ

『そっちはな・・・こっちは・・・苦戦しそうだ』

ニツと笑うシエラ

「そう、ガンバってね」

『人事のように!』
そう言つて、突然シエラは走つた
ミラージュへと
「そう、人事よ!」
私も、知事へと向かつた

「なっ!くそっ!」
キーン

銃剣と剣が交わる

「いい事教えて上げるわ・・・銃剣はね・・・フッ!」
相手の剣を跳ね上げつつ、突き上げる香苗
その、銃剣さばきに圧倒されている知事

「な・・・何なんだ!その裁き方は!」

「銃剣道は基本的に、長さ2mある木銃といわれるものをつかつて、突きあう競技なのよ。しかも、一本を取るためには喉元、左胸、そして小手その3箇所しかない・・・しかも全て突き・・・その意味解るかしら?」

「しらねえよ!」
「教えて・・・上げるっ!」
バン!と、短剣の根元で小手を払い除け、そして喉元の寸前で止めた・・・あと2mm動かせば完全に息の根を止められる

「チエツクメイトよ」

(わかるかな?)
と思う香苗だつた
「く・・・」

意外なことを香苗が言つた

「ねえ、貴方たち魔族は何で人間を嫌うの?」
「き・・・嫌つちやいねえ!人間が勝手に嫌っているだけだろうが!」

「え？そうなの？？」

きよとんと、してしまう香苗

「好き好んで、人間に寄生までして生き延びているわけじゃねえ！
死活問題なんだよ！俺たちは、自分自身に生殖器官がねえ

人間に頼らなきゃあ死滅しちゃう・・・だが、協力してくれる
人間なんているはずねえだろが！」

(そういうことなのね・・・)

ふっと、戦意をそがれてしまった香苗

「そういう理由らしいわよ！ティニア！」

その頃、シエラはミラージュといい戦いをしていたが・・・

まあ、ほつともいいだろう

「事情はわかった、魔族の・・・名はなんていう」

「けっ、名を聞くときは自分から名乗れ」

「つと、失礼した。僕・・・いや、私は、デイスニー王国の王・テ

イニア・デイスティニーだ。よろしく」

「おれは、ここの魔族代表のモニターだ・・・」

「そうか、モニター殿。君たちには生殖器官はないと言ったな」

「ああ、無いな」

「では、この街にすんでいる者たちは無理やり卵を？」

「・・・いいや・・・下の者たちは・・・協力的だった・・・

だが、異教を唱える者たちが現れ・・・そのものたちは・・・

クソツ」

「・・・そうか・・・我々の、早とちりらしいな・・・

事情はわかった・・・だが、君たちのした行為は

黙認することは出来ない」

「・・・」

「だが・・・ここに私が来たのも何かの縁だ・・・一つ交換条件と
いかないか？」

「は？」

「君たちが、善意のある者たちが望んだもの以外魔の卵を産ませる

ことを許そう。その代わりに、管理を全て君が管理すること、そして、我々にもその状況を定期的に報告する事が条件だ。」

「そ．．．そんなことでいいのか？」

その応えに、香苗が反論した

「あんたねえ、あんたの一族が知らないけど？被害こつちまでこうむってるのよ？管理不届きでしょうが！」

「．．．それはすまんことをした．．．」

本当に魔族なのかしら．．．さつきまでの、強烈な剣幕はいつたいどこへ？

「まあ．．．謝るより、行動をしなさい」

「ああ．．．」

と、そこにティニアが割り込んできた

「それと、こちらの条件を呑んでもらうよ？それは、『永久和平条約』だ」

「わ．．．和平だと?!」

「ああ、魔族と人族との和平だ．．．といっても、君たちの一族に限る

どうだ？いい話だろう？」

「だが．．．他の一族が．．．」

「安心しろ、お前達に刃向う一族があるのであれば、我々ティスニ王国が全面的に協力することを約束しよう。」

「いいのか．．．本当に．．．」

「ああ、この条約を護りきる自信があるならな」

「．．．解った．．．締結しよう．．．」

お！これで丸く収まったカナ？

と、シエラをみると、未だに剣の撃ちあいは続いていた

「．．．いい加減死ね．．．」

ミラージュらしくない言葉を放ち振り下ろす刀を、シエラが剣で受け止める

『ッ・・・そんな可愛い顔して、そのような事言っではダメって
お母様に言われなかった？』

今度は、シエラが刀を受け流し、その隙に足払いをかける

「ッ！・・・知らん・・・いや、忘れていただけで言われたかも知
れん・・・」

はあっ・・・と、溜息をつき眉間に指を当てる香苗

「・・・まだ続きそうね・・・」

ポケーとシエラたちを見ながら呟く香苗

「そう・・・みたいだね・・・」

呟くティニア

「・・・止めなくていいのか？」

問いかけるモニート

「見ているだけでも楽しいかと」

答えるフェンリル

「姉さん強い・・・けど、ミラージュも負けてない・・・」

そこだ行けーと、叫びながら応援しているメリア

「・・・一応、応急救護の処置でも要しておこうかしら・・・」

冷静にこの後起きることを考えるセリス

そして、その後ろでジーとシエラとミラージュの戦いを観覧している
香苗の部隊たちがいたのだった

そして、数カ月後

封印都市ラグーンとの、永久和平条約

(歴史では、『モニート条約』と記することになる)

が成立・締結した

これは、この世界始まっての快拳とも言えることであり

他の魔族一族も続々とラグーンへの移籍申請が絶え間なく続いている

ると言っ

もちろん・・・反対民族に対しての対立は耐えないと言っ

最終章 お仕置き実施（後編）終了！（後書き）

作者のMISSSTYです

ディスプレイ二読破ありがとうございます

評価の激しい小説になってしまったらしく

良い・悪いが2分割してしまう小説らしいため

評価・感想はいただきません。

しかしながら、この続きを見たいという方は

一般公開していない第2部を

私のホームページにて

メールマガジンにご登録いただいた方のみ

続きが見れるようにしております。

見たいという方は、下記のURLから

トップページにあるメールマガジンに

ご登録くださいますようお願いいたします

<http://www.missty.jp/>

なお、荒らし・冷やかし等はご遠慮ください。

長い駄文を読んいただきましたありがとうございます。

作者から心を込めて。

番外編 1 あのこと…はじめまして…

このお話は、香苗がとある一人の女性に目をつけたことから始まる面白くもおかしくもそして…悲しくもある一つの物語である

あの騒ぎから、数ヶ月経ったある日のこと…

この私、ディアース・ノーストレック（皆は、『ディナ』って呼ばれてる）に一つの手紙が届いたの
そう…あの手紙を読んだ時のことはよく覚えてるわ
だって…その手紙は…

小鳥の囀る中、朝日を浴びながら

「うにい〜っ…はあ〜…」

朝日がまぶしい…

私の容姿はそんな綺麗って程でもなく…
醜いつて程でもなく…ごくごく普通の…
人間…

「朝って苦手…」

じゃ無いの…実は…悪魔…

数ヶ月前に魔族長が王国との条約を結んでから
森の中でひっそりと一人で住んでいた私は
封印都市に移住及び移籍申込みをして晴れて
ラグーン市民になったの…

だけ…

「ディアースさん？いますか？」

あれ？だれだろう??まだ朝だよ？

「はあ、い、どなたですか??」

ガチャツと戸を開けると一人の青い服の女性が立っていた

「ディアースさんですか?」

「は……はあ?」

コクンと頷く

「貴女様に是非こちらの試験を受けていただきたいとの御要望がございました」

と、手渡された一通の手紙

表紙には私の名前

そして、裏には……

「え?あ……あの、何かの間違いでは?」

「いいえ、是非貴女様にと近衛騎士長兼第5特務隊長

セレネ・アキータ様から御預かりになつて参つたしだいです」

え……セレネつて……あの、泣いている子も黙る

悪魔の悪魔……魔王でもひれ伏すといわれている、あの……

「い……イタズラではないですよね?」

どうしても信じられない……

「はい、封印の紋章を見ていただければ本物かとお解かりになるかと」

……確かに、この紋章はディアスニー王国のものだ……

「あの……返事はいつまで?」

「いえ、その内容を読まれてからすぐにでも」

「は……はあ」

封を外し中の紙を出して……読んだ

『ディアース・ノーストレック殿

新たなる組織の編成に、貴女の御力をお借りしたいと考えています

是非とも、ディアスニー王国まで来て欲しいと思うしだいです

強制では有りませんが、承諾していただける場合

私の部隊にはいることを条件とします

それは、戦争に参加すると言つ事をよく考えて返事を頂きたい

来てくれるのであれば、それなりの待遇を取らせていただきます

いい返事を期待します

近衛騎士長兼第5特務隊隊長 セレネ・アキータ

あの手紙が来て・・・私の生活が大きく変わっちゃった

よくもあり・・・悪くもある・・・あの手紙を貰った事で・・・

番外編2 あのこときちやいました

世界最大の王国であるディスニー王国の悪名高い人物に目をつけられてしまいました・・・

ふつう・・・

「断れないよね・・・」

そんな事を思いながら馬車の車窓から見える景色を眺めていた何で私なんだろう・・・

ポーとしていると、ユツクリと馬車が止まった

「ディアース様、到着いたしました」

「あつ、はい」

慌てて、外に出ると予想したより高い馬車の高さに躓き

下から城を見上げた

「た・・・たかあい・・・」

見上げるその首の角度は60度ぐらいあるのではないかと思う

「全高位456m横幅2400mと言われています」

「あ・・・あの、『m』ってなんですか？」

ものすごい素朴な疑問なんです・・・

「ああ、申し訳ございません。単位をご存じなかったのですね

『m』とは、人間の体の一步を平均を取り、その1.25倍した

距離を言うそうです。現在、『m』の正式な距離はディスニー王国

科学技術研究所内に保管されている『魔力維持製ものさし』という

ものが、神『シエラ』さまが残した物とされそれを基準とされています

ます

まあ、そうですね。今日の前にある門の横幅を12mと考えて

下さればいいと思いますよ」

こ・・・この門の幅が12m?!・・・456mって・・・

想像できないよ・・・

「お話が長くなってしまいましたね、こちらです」

「あ・・・すみません」

「いいですよ、お気になさらずに」

「は・・・はあ・・・でも、ああ・・・きちやっただ・・・」

セレネ様の侍者である人の後をあるいていくが・・・

皆、道を開けるようにこの人に最大級の敬礼をしているんだけど・・・

・
いったいどんな大物なの？この人物・・・

そして、結構あるいた先に着いた・・・あの門が12mだから、その半分ぐらいある扉についた

侍者が立ち止まると、ノックもせずに声が聞こえた

「どうぞ」

ナ・・・何者?!セレネ様って!どっか見られてるのかな
と、きよるきよるしてしまう私

「失礼します」

侍者がドアに近づくと自然に扉が開いた

門の倍の長さはあるのではないかと言うほどの大きさに
ポツンとソファアールと執務用の机、そして横一杯に広がる
本の山に驚かされた

一番驚かされたのは、目の前に据わっている女性だった

黒髪に黒い瞳、容姿も・・・嫉妬しそうなほど綺麗だし、
なんか、恐れ多いというような・・・オーラが私を襲う

侍者の後についていく、入った瞬間

ピリツと体中の毛という毛が逆立った

(な・・・なに?!この・・・雰囲気・・・)

ガチガチに固まる私に優しい声で

「貴女が、ディアースさん？」

「あ!は・・・はい!ディアース・ノーストレックですっ!」

ピシツと直立不動の姿勢になる私

あ。。。っ来るんじゃないかなあっ

「そんな緊張しなくてもいいのよ・・・って無理よね、ちよっと待

ってね」

そういうと、彼女は手を上げ『パチン』と指を鳴らすと
今までであった雰囲気が一気に変わり、ほのやかな気分になる

「こ……これって……」

私に向かつてニコツと笑う彼女

しかし、私の左に居る付き添ってもらった侍者である彼女には
全く違う顔つきで

「龍姫、ご苦労様下がって良いわ」

危機間違いではないかとおもう程、張りのある声で彼女に言つと

「何かございましたら及びください、主殿」

「ええ」

そういうと侍者であった、龍姫がスウと消えてしまう

リュウキ……りゅうとうきいいい?!?!

「あ……あの、龍姫って……あの」

「ん? ああ、あの娘? 水龍の長の龍姫よ? それが?」

うっ……そお……っ! だって! 私はこの世界で、7900年ぐ
らい

生きてるけど、あの誰にも主従関係にならないといわれていた

あの、龍姫があ?!

「そうそう、自己紹介がまだだったわね。どうぞ、座って」

「あ……はい……失礼します……」

ポフォンと座ると、目の前に先ほどの彼女が座ると

後ろから、気配無く誰かの声が聞こえた

「御茶を御持ちいたしました」

びくっ! 後ろに振り向くと、また違う女性

こ……この人……知ってる……

「ありがとう、そこに置いて頂戴」

「御意……御久しぶりですね、ディアース・ノーストレック」

「ふえ……ふえ……フェンリル?!?!?!」

ソファアーに足を置いてしまうほど驚く私

慌てて、座りなおす

う・・・嘘でしょ?!あの・・・あのフェンリルが?!なんでえ?

「それでは、ごゆるりと」

がたがたと震える私

あの、数百年前のあの戦争の時私は、敵軍にやられる寸前で

彼女に助けてもらったの・・・だけど、お礼も言えずに

彼女は立ち去ってしまった・・・

こんなところで出会えるなんて・・・

「・・・さん?ディアース・ノーストレックさん?」

「あ!すつつみみやせん!」

「え?」

あわわあ!口が回って無いよう

「あう・・・」

クスクスと笑われてしまう私・・・ああ・・・穴が有ったら入りたい

「自己紹介いいかしら?」

「あ・・・はいっ!」

背筋を伸ばす私

「私は、近衛騎士長兼第5特務隊隊長 セレネ・アキータ

セレネって呼ばれてるわ。長くないそのままね。でも、皆

『主』とか、『我が主君』とか、『セレネ殿』とかそういう風にい

うの

・・・やめてつて、いつても聞かないのよね・・・」

た・・・確かに貴女様は、様とか殿とか付けるぐらいの大物ですよ

?!

「あ・・・私は、ディアース・ノーストレックです・・・ダイナつて

呼ばれていました・・・一応・・・悪魔です・・・」

「うん、よろしくね。では本題、貴方が来たってことは

私の要望を受け入れたってことでもいいのかしら?」

「あ・・・あの、どういう事をするかによって・・・と言いますか・

・

その・・・」

「ああ、要点言っていなかったわね。私の第5特務隊に新しい私直轄の・・・というより、サポート班を作ろうと思うの」

「さ・・・さぽーとはん？」

「あ、ごめんなさいね。サポートって言うのは、私の国の言葉だったわ

援護班ね」

「え・・・援護ですか？」

「そう、後方支援を主にしてもらう班よ。主に、敵の部隊に人間では目視出来ない距離に置いて軍勢を減らすための班を作ろうと思ってるの。そして、貴女が礎になって欲しいの」

「は・・・はあ・・・私がですか?!」

「そう、貴女がよ。そして、貴方のための武器も作ったの・・・でも、

それにはいるには、試験を受けて欲しいの」

「し・・・試験ですか？」

「簡単よ、そこに立って」

ソファーからはなれて、何も無い所に連れて行かれる

「この棒、持って」

渡される金属の棒

「こ・・・ことうですか？」

「いえ、こんな感じに」

前に突き出すような槍の持ち方をする

その時

ドフウン

(クツ)

いきなり衝撃にびっくりはするものの

その持っていた金属の棒は持っている手の手前まで

吹き飛んで無くなっていた

踏ん張った足元は、陥没してひび割れている

パチパチパチと手を叩くセレネさん・・・いいのかな。さんで
「・・・合格よ！ディナ！」
ナ・・・何が合格なのよう？！

番外編3 え？けいやくですか？

「あの・・・何が合格なんですか？」

片手でもてるほどになってしまった鉄くずをどうしようかと迷いながら聞いた

「そのぐらいの反動がある武器を使うからよ。」

他の者にも、試したんだけど・・・肩を壊すわ

骨折するわでぜんぜん話にならなくて・・・

その時にね、貴女の情報が舞いこんで来たって訳

すごい偶然だと思わない？とか言う始末

ぐうぜんなんだろうか・・・

「あ・・・あの・・・それで私何をすれば・・・」

「これよ」

よっこらしよつと、掛け声を唱えて持つてくる大きな木箱

「これ・・・なんですか？」

「ふふふ・・・120mm対物ライフル砲！銘々、シューテルハル

ッ！

どう？かつこいいでしょ」

木箱から、もう一つのなんだか鉄製の入れ物を出した

そこにはいつている物を出すと

「これが弾よ。HEAT・・・になるのかしら・・・鋼鉄に、地属性のコーティングをした弾で、炸薬は火妖精の燐粉から作った物を使ってるわ

取り扱いには気をつけてね」

ナ・・・なんだかぜんぜん解らない事を言っているのですが・・・

「え・・・えつと、これを使ってなにをすれば？」

「撃つのよ。弓と同じよ。引き金引くだけだから、弓より簡単かも」

「う・・・撃つだけですか？」

「そ、簡単でしょ。どう？やって見ない？」

う・・・撃つだけで、衣食住タダ・・・給料も出るし待遇もいい・・・戦争もめったに聞かないし・・・いいかな・・・

「・・・はい、やってみます」

「よかつたあゝ、それでね、まず最初に契約をしたいと思うの」「・・・契約も?！」

「そ・・・それって、主従関係を結べて事ですか?」

そればかりはいやだ・・・

「んゝまあ、早い話はそうなんだよね。でも、一部違うというか・・・

私はね、一方的な契約はしてはい無いの。あの、龍姫だってそうよ契約には私に2つ 貴女に2つを申し出るわ

1つ 私の命令には服従する事

2つ 私の許可なく死なないこと

これは、貴女が私に契約を誓うもの
そして、

1つ 私の命令に具申が出来る事、いわゆる意見ができるってことね

2つ 2つ目の命令を私が強行する場合、第5特務隊 全隊員の4

/5以上の具申があつた場合、その命令を拒否できること

これが、私が貴女に契約を誓うもの」

そ・・・そんなこと・・・誰がそんな契約・・・誰もしない・・・

だけど、主従関係を結んでいながら意見が出来ると言う

初めてだけど、素晴らしい内容に感化された

「解りました、契約します」

「いいわ、では契約を・・・」我、汝に契約するものなり・・・

我は汝に誓う、汝に我は意見を許すものなり」

「我、気高き魂に誓い汝に契約するものなり」

私と、セレネ様の体が光り目に見えない一筋の光の糸が

私と彼女の間に生まれた・・・これで契約がすんだことになる

「・・・契約するの始めてです・・・なんだか簡単なんですわ・・・

番外編3 え? けいやくですか? (後書き)

作者のMISSSTYです

ディスプレイ二読破ありがとうございます

評価の激しい小説になってしまったらしく

良い・悪いが2分割してしまう小説らしいため

評価・感想はいただきません。

しかしながら、この続きを見たいという方は

一般公開していない第2部を

私のホームページにて

一般公開しております。

<http://www.missty.jp/>

なお、荒らし・冷やかし等はご遠慮ください。

長い駄文を読んでいただきましてありがとうございます。
作者から心を込めて。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5720b/>

ディスティーニ～運命～第1部

2010年10月14日13時48分発行